



* 0027441000 *

0027441-000

特203-455

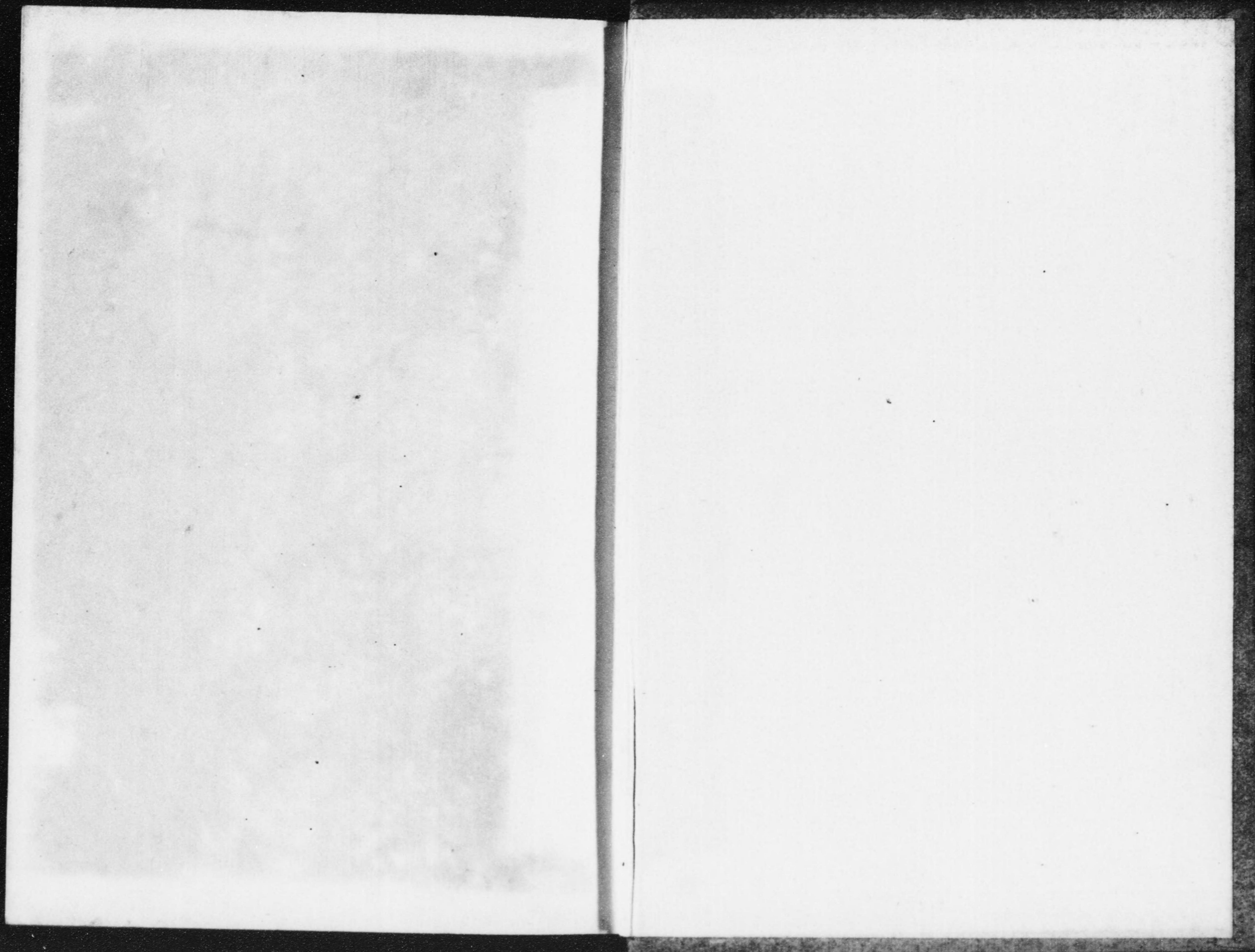
「金」の社会問題

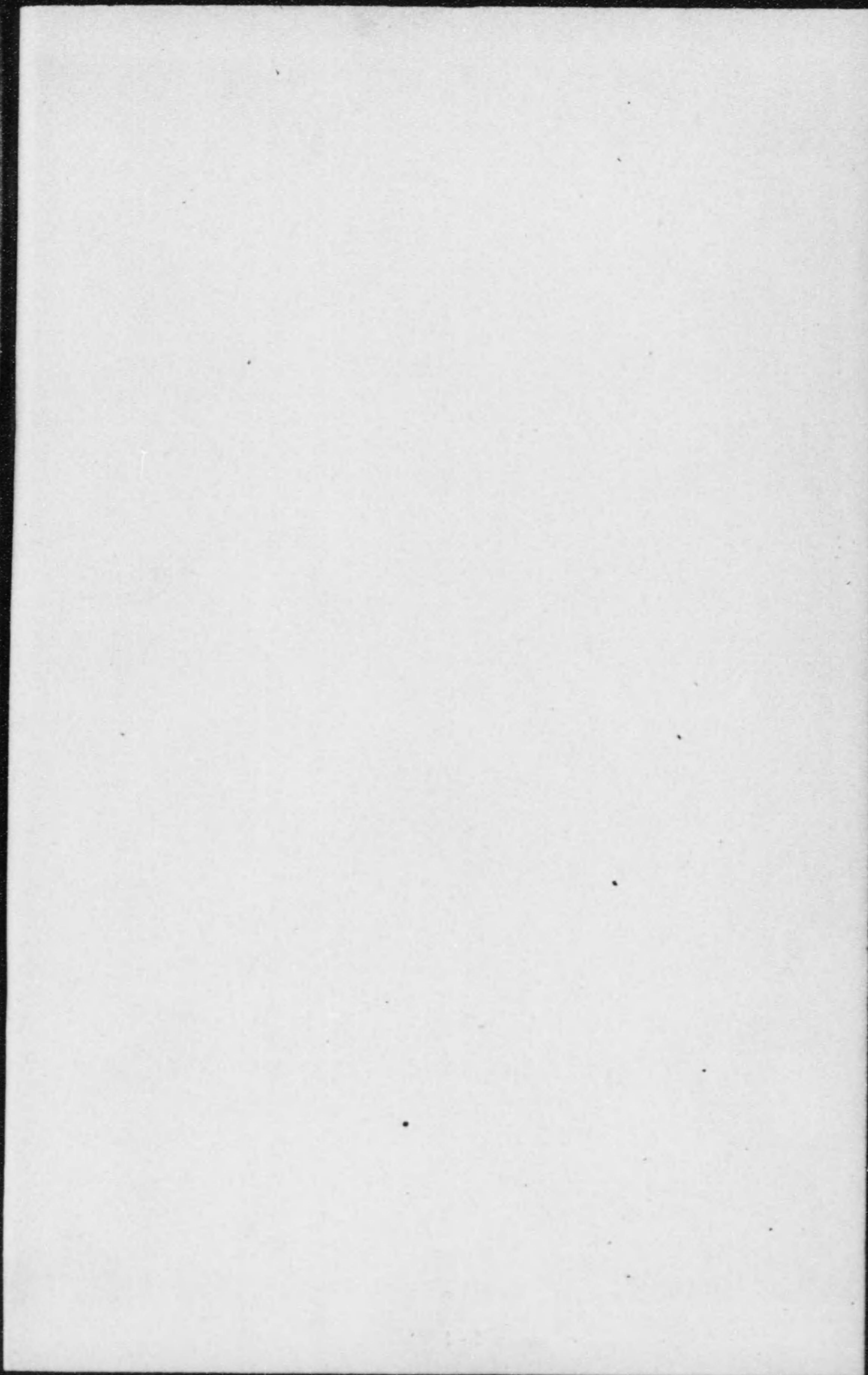
赤神良讓・著

章華社

昭和5

ADH





特203
455



法學士
文學士
赤神良讓著

金の社會問題

木村利三氏
寄贈本

東京章華社版



序

私がこの問題に関心を持つてから、足かけ七年になる。

そして私は、馬上ゆたかに得意満面で行く「金」の王様に、「真裸體だ」と、思ふ存分の嘲笑をば、あびせかけてやりたいと思つたからである。

吾々はいつまでも「金」の奴隷であつてはならない、總ての世界に於いて「人間の權威を復興」しなければならぬ、と考へたからである。

本書は唯その祈りの一章に過ぎない。

昭和五年三月十二日

大磯清水山にて

著

者

目次

第一篇 「金」の歴史と理論……………一

第一章 「金」の自然史的研究……………五

第二章 「金」の本質に對する理論的研究……………四

第二篇 貨幣罪惡說の研究……………五

第一章 オーウェン及びその一派の貨幣觀……………七

第二章 プルードンの貨幣理論及び交換銀行法案……………一三

第三章 グリーネの相互銀行論……………一六

目次

第三篇 貨幣と共産主義

..... 二〇三

第一章 ロードベルテウスの社會主義

..... 二〇五

第二章 マルクスの貨幣論

..... 二四三

第三章 勞農革命と貨幣制度

..... 二九七

第四篇 社會問題としての「金」

..... 三九五

第一章 「金」の瞞着性と偶像性

..... 三九七

第二章 「金」の動搖性・幻想性・背徳性

..... 四三五

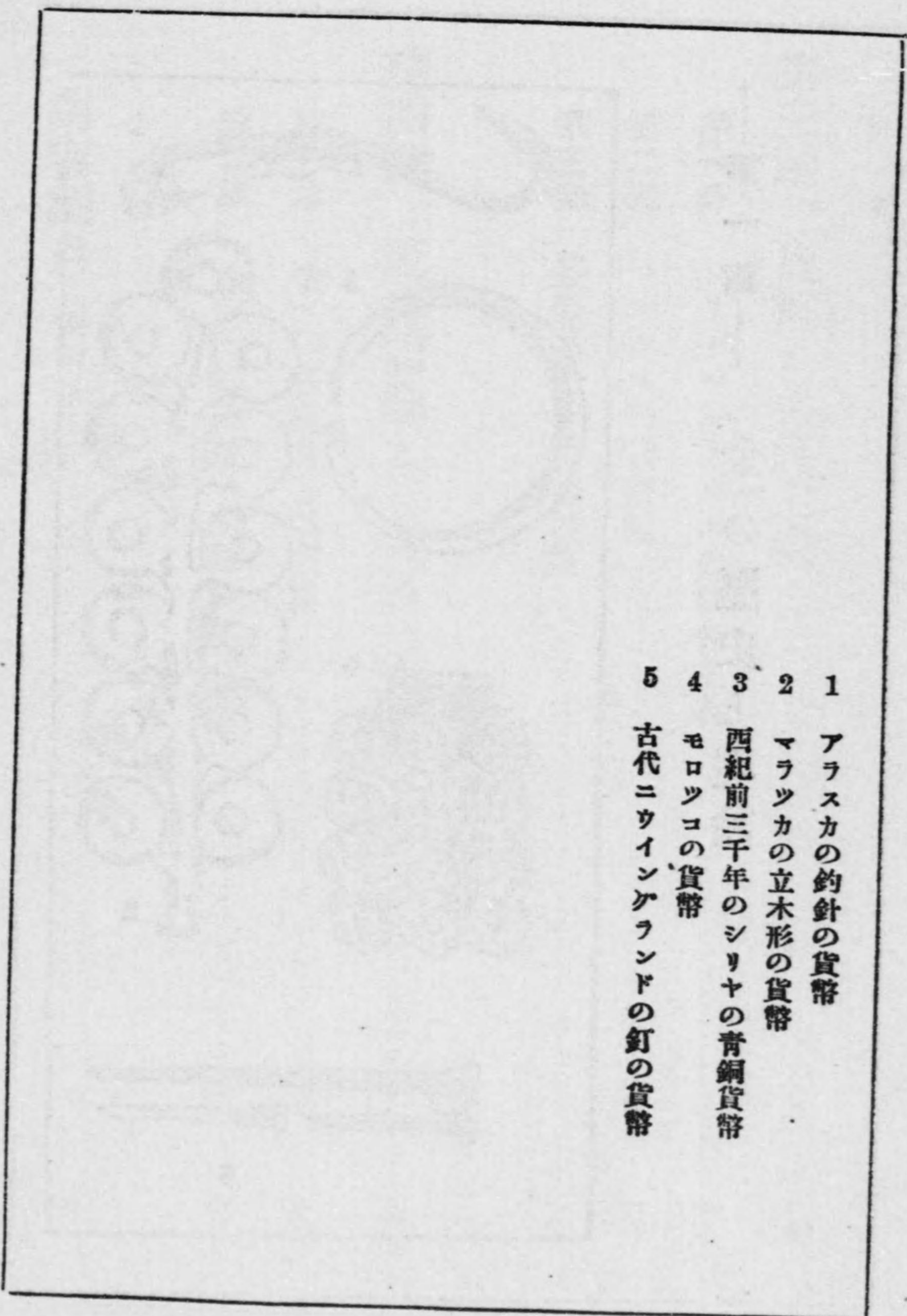
内容細目(索引)

..... 四六一



第一篇 「金」の歴史と理論

- 1 アラスカの釣針の貨幣
- 2 マラツカの立木形の貨幣
- 3 西紀前三千年のシリヤの青銅貨幣
- 4 モロッコの貨幣
- 5 古代ニウイングランドの釘の貨幣



第一章 「金」の自然史的考察

1

昔或る處に愚鈍の男が住んでゐて、一疋の牝牛を飼つてゐた。そして毎日彼はその牛から乳を搾つて、水氣のない朝の黒パンにつまる咽喉を濡ほす料にあてゝゐた。所が彼は或る日のこと、七八人の客をする必要に迫られて來た。そこで彼は考へた、その時になつてから、牛乳が不足を來たしやしまいかと、そしてその事が心配になつてならなかつた。然し間もなく彼の頭には、名案が浮び出して來た、それは五六日の間、牝牛から乳を搾らずに、それを乳房の中で貯へて置くことであつた。遂にその日となつて、お客が七八人やつて來た、彼はそこで五六日分の牛乳を一度に搾るべく、牛小屋へ駆け込んで行つた、然し彼が先づ驚いた

ことは、乳房の大きさが平常と變りのない事であつた、愈々搾つて見ると、彼が五六日の間、牛乳の代りに井戸水を飲んでゐた甲斐もなく、如何に乳房をしごいても、やはり一日分の牛乳しか出て來なかつた。

勞働力もそれと同じ事だ、殆んど貯へて置くことが出來ない。そこに彼等勞働者の盡きせぬ嘆きがある。勞働者は多く無産者階級に屬してゐて、一日一日とその勞働力を賣つて、以つて自己の生活を續けなければならぬ運命に繋れてゐる。そしてその勞働力は自分の身體から切離すことの出來ない商品であり、而もその勞働力は、時間と共に一瞬一瞬に流れ去りつゝあるのであつて、如何にその値が安くとも、勞働者はそれを貯へて置いて、値の出た時に一度に幾日分かの勞働力を、賣り拂ふと云ふことは不可能である。それ故に假令その代償が貧乏線以上の生活を爲し得ぬものであつても、彼等はそれを日々搾り出して、金に替へて置かねばならぬ、即ちこの勞働力の腐敗性は、金に替へられることによつて防腐され、その力に永遠性を附與することが出來るからである。

然し又この勞働力の腐敗性、即ちどうしてもその日その日の中に、この勞働力を賣切つて了はねばならぬと云ふ條件は、勞働者に對して大なる弱味であると反對に、資本家にとつては、その搾取をして益々容易ならしめ、従つてその懐に益々資本を集中せしめて來るに役立つのである。そしてこの金としての資本は、石炭が太陽のエネルギーを蓄藏してゐるやうに、勞働者のエネルギーを蓄藏し、その流動性と壓縮性によつて、資本による他の資本の掠奪を可能ならしめ、多數小資本家の少數大資本家への淘汰となり、遂にこの金は、二三少數の大資本家へと集中して、彼等に非常に多數なる勞働者を、各自の欲するがまゝに驅使するだけの大勢力を有せしめて來たのである。茲に昔時五十人力の豪傑に驚倒せしめられた人類は、更に千人力、萬人力の怪物を目睹するの已むなきに立ち至つたのである。

斯くして個人相互の間に大なる力の差等を生じ、多數の人類は、少數二三の人々に終生奉仕するが如き世態を現し、世を舉げて二三の金持に隸屬するが如き觀を呈して來たのである。そして勞働者は自己の力によつて自己を虐げ、自己の手によつて自己を絞め上げ、自己

の足によつて自己を蹴飛ばすが如き、喜劇にして而も深刻なる眞の悲劇を演出せねばならなくなつて来た。これが果して人類の辿る可き機制的運命であるか？、確にそれは大なる疑問である。

洵にスノーデンの云ひし如く、全國富の八割八分までが、僅に全人口の二分五厘によつて占有せられ、百人の中六十五名までかその一生を貧窮の裡に終ると云ふことは、どうしても吾々の理想とする社會状態ではない。それ故に吾々はそこに幾多の缺陷を發見せねばならぬ。そして先づ第一にその力を擁して、手より手へ、懐より懐へ、勞働者より資本家へと流動して行く所の、金そのものゝ制度に對して大なる疑問を抱かざるを得ない。金、それは社會の血球である。そしてそれは又古くから人類を悩ました所の困難なる問題である。吾々は何時までもフリジアのミゲス王のやうにこの偶像に跪かねばならぬのか？、一考する必要があると思ふ。

註(一) 一日勞働しなければ、その翌日の能力は多少増加するけれども、それは個數拂制度の場合

にのみ有效である。尙又その勞働を數日間休止する時には、これを一日で償ふことは、能力の上からも、時間の上からも到底不可能である。

- (2) Malkins, An Introduction to the Study of Labour Problems P. 93.
- (3) Rowntree, Poverty: a Study of Town Life, P. 13.
- (4) Marx, Das Kapital, III. S. 590.
- (5) Brooks Adams, The Theory of Social Revolutions, P. 13.
- (6) Philip Snowden. (The London Times, March, 21, 1923.)
- (7) Johnson, Proceeding of the Academy of Political Science in the City of New York, January, 1923. P. 133. 山崎覺次郎博士『貨幣問題より見たるアダム・スミス』(經濟學論集、第二卷第二號、一頁)
- (8) 昔小亞細亞のフリシアにミゲスと云ふ王様があつて黄金が欲しさに、自分の手の觸るゝものは何物でも黄金と化するやうに神様に願つた。その願が叶つたので喜んで居ると、纏て喉が乾く、水を飲まうとすると黄金に爲る、腹が空く、食事を攝らうとすると、それが黄金と爲る。そこで

勝手な言分ではあるが神様に、折角の許可の取消を願つた。そこで神様の命令の儘にバクトルス河に入り手を洗つた、そこでこの河の底には金色の砂が満ちて居ると云はれてゐる。

2

ゾラは、神が此世を「金」と「戀」との二つの柱の上に建設したと考へ、リツペルトは、「飢」と「戀」との二つの力によつて、人世は動かされてゐると考へたのである。若しこの兩者、共に眞理を語るものであるならば、「金」と「飢」とは同一の力を指示するものでなければならぬ、即ち「金」は「飢」を醫し、進んでこれを防止する力を有して居らねばならぬ。然らば吾々は金を食ひ、金を飲むことは出来るか？、否、金は單に交換の仲介物たるに過ぎない。若しこの金が交換の仲介物たることを拒絶せられた場合には、人はその金を抱いて餓死せねばならない、そしてその場合に硬貨は地金として紙幣は紙屑としての價值さへも有してゐないことになる、故に金はその背後にある社會的信用に基く力によつてのみ、その生命を

繋いでゐるものであると、考へねばならぬ。

然し乍ら吾々は、古來如何なるものが金として使用され、そしてその進化がなされて來たかを跡付け、先づ「金」そのものゝ概念を明にする必要に迫られてゐる。

私はこの必要の爲に原始時代に遡る。原始時代に於いては人類はその血縁關係によつて結合せられてゐた、尤もその始めに於いては、全く忌嫌なき内婚制、即ち群婚制により、無意識的に本能的に性慾の動くがまゝに生殖し、分娩するがまゝにこれを鞠養し、事實上の血縁關係によつて自然に群棲生活を行つてゐた。然し次第に變じて擬制的に、即ちトータムによつて、血縁關係ありと考へる所の一團が、群棲生活を營むやうになつて來たのである、そしてそれは所謂「社會原形質」³⁾であり、その各成員は未だ人物比重の關係に入込まず殆ど等質の關係にあつた。然し多くの社會學者の考へるやうに、それは眞に等質であつたと云ふことは出来ない、その社會原形質はやはりアミバーの如く漠然と中核を有してゐて、その中核即ち群長によつて統一せられ、そして本能的に烈しき種族保存の欲望によつて動されてゐた。

文明の進むに従つて人類は、種族的より個人的に流れ、遂には自己の爲に種族の福祉をも平然として裏切るに至つて來た。⁹⁾けれどもその當時に於いては、此種族保存の欲望が人類の胸中に本能的に烈然として燃え立つてゐて、その爲に彼等は總てを犠牲にして顧みず、否犠牲と云ふが如き感じすら有してゐなかつた、彼等は働蜂が自己の所屬する蜂群の爲に、殆ど無意識にその敵に向つて突進し、折重つて斃るゝも意とせざるがやうに、自己の所屬する群を保持する爲に、あらゆる努力を盡して來たのであつた、それ故にその群の一成員が獲得したる所の物資は、一つ成員の私有ではなくつて、その群の共有するものと考へられ、原始人群は斯くしてのみその存続をなし得たのであつた。即ち彼等は三十人より四十人を以つて一群をなしてゐたのであるから、共有制でなければ、群婚制に依る嬰兒の鞠養も、その妊婦の保護も到底不可能であり、且つ又多くの場合、その狩獵にも、果實の採集にも、屢々出會ふ所の他群を襲撃して、その有する所の牛羊を掠奪するにも、或は野獸の襲來より自己を防禦するにも、武器や其の他の道具を未だ有せざる彼等は、始終相協同して、一群總てが同一の行動

を取つて行かなければ、その存続の可能性を發見することが出来なかつた。それ故に彼等の得る所の物資は、直接にも間接にも群全體の勞働の結果として考へられ、従つてそれは群の共有に屬してゐて、そこに未だ私有財産の分化する餘地が介在し得なかつたのである。⁷⁾

そして又その群の存続する上から考へても、一群即ち三四十人の人々が共働をなす上に於いて、そこに偉大なる力を有する中核、即ち群長を必要とし、又その共働は自然的に、その群長を巻き出さずには置ない。この群長によつて群の共産は、各個人の生活に過不及なく、分配せられてゐたのであつた、⁸⁾そしてこの分配に際しては、將來の獲得行動を刺戟する爲に、その狩獵に於いて或はその掠奪に於いて最も偉功を立てたる者が、その獲物の最も良き部分を、又無能であつた者より多くの分前を得たのであつて、茲に私有財産權の思想的胚子が芽生えてゐたのである、⁹⁾又この時代に於いても既に各自の耳、唇、鼻等に差込む裝飾品、纏ふてゐる獸皮、進んでは武器等をも私有してゐたのであつた。¹⁰⁾この單細胞は群婚制より來る人口の過剰と、この過剰より來る人口制限の必要と、¹¹⁾他群との争鬭に勝利を期する必要と

により、女兒の間引きを行ひ、従つて一妻多夫制となり、この一妻多夫制によつて、内部的にその分裂が始められて來た。然し乍らこの一妻多夫制は、豊饒なる土地への移住により、又は他群の征服によつて一夫多妻制となり、茲に群長或は其他の強者は、性的享樂の爲に婦人の奴隸即ち生殖奴隸を私有し始め、次いで男子の奴隸を自己に奉仕せしめる爲に即ち勞働奴隸を私有し、次第にその分裂を急いで來たのであつた。

然るに他方に於いては、豊饒なる土地への移住により、人々はそこに定住するの傾向を現し、人類は狩獵時代或は遊牧時代より、半狩牧、半農耕の時代に入つて來たのである、けれども人々は未だ共働して耕作し、従つて其生産物は共有であり、その消費に於いても總ての者が同等の權利を有してゐた。それ故に勿論その土地は共有であり、一群の占有地は約三哩四方であつて、土地は火や水と同じくこれを私有することは出来ない¹³⁾と考へてゐた。それ故に吾々は未だそこに個人間の交換現象を發見し得なかつた。然し乍ら群と群との間、殊にその血縁的關係によつて友情的である分群——多くは食物の不足によつて相分離した群——

相互の間に交通がなされ、或は一つが農耕を主業とするのに反し、他が遊牧を主とする所より、相互の間に過剩を來してゐる生産物を贈與し、相互の贈與は次いで交換の現象となつて來たのである。こゝに商業主義が發生し、交換の利を「群」として學んで來たのであつた。然るに又一夫多妻制の結婚は、必然、家の發生を來し、この家の發生と發達とは、群の内に多くの單細胞を分化し、群を一變して氏となし、或は部となし、部落となして了ふのである。そしてこの家はその中核として家長を生じ、群長は變じて族長となり、或は首長となつて來る、斯くしてその家の統一と鞏固とが増大するに伴ふて、群の有してゐた個人拘束力が減少し、こゝに群有財産は家産として分割され、家長はその家族の全體に代つてその家産を管理し、家と家との間に交換が行はれて來たのである。¹⁴⁾そして親交ある近隣の部落間に於いては、その部落を通ずることなく、家それ自身が相互に直接有無相通ずる所の交換を行ひ出して來た、そしてそれは原始的物々交換そのものであつた。

(1) Giddings, Principles of Sociology, Pp. 158. 250.

(2) 高田保馬博士(社會學原理、七一九—七二二頁)は原始群は血縁關係によらずして、地縁による、即ち空間的接近に由つて結合するものであつて、血縁の關係は從屬的意義を有するに過ぎないと云つてゐられるが、事實はそれと反對であつて却つて地縁は從屬的意義を有するに過ぎないものではなからうか。原始人は原始人ほど排他的である、それ故に彼等が生殖關係によつて自然的に結合せられ、彼等が未だ血縁と云ふことを理解せざるまでも、本能的に、それに對して愛着を有し、好感を抱くに至るのである。之に反して彼等が遊牧の途に於いて、他群に近づく時は、それは寧ろ直に戦を意味するものであらばならなかつた。

- (3) Durkheim, De la division du travail social, P. 189.
- (4) 日本社會學院調查部『社會教科書』二六頁。Ward, Pure Sociology, P. 274; Ratzelhofer, Die Sociologische Erkenntnis, P. 229.
- (5) Dounont, Depopulation et Civilization, P. 106.
- (6) Lafargue, Evolution of Property, P. 33.
- (7) Loek, the Nationalisation of Credit, P. 65.

(8) Esquimaup. が一人二隻以上の獨木舟を有することの出来ないと云ふが如きは、その例であり、又 Englians も、その鯨を取つた時に最年長者がその一群の人々に平均に分配することになつてゐる。

(9) 分ち與へられた食物が私有された初めの物であつた、そこで Esquimaup は物を求めた時には必ず、それを舐めて、自己の私有物であることを象徴するのは、これから起つて來たものである。

- (10) Lafargue, ibid., P. 17. (死んだ時にはそれ等の品物を死體と共に埋めるのである。)
- (11) 拙稿『社會學夜話』(共存、第三卷、第四號、五七頁。)
- (12) Word, ibid., P. 247.
- (13) Lafargue, ibid., PP. 39; 34.
- (14) Loek, ibid., P. 65.
- (15) Lafargue, ib id., P. 44.

物々交換は人々のエネルギーを非常に浪費し、時間を空費せしむるものであつて、甲が不用とする物と、乙が必要とする物とが一致し、反対に乙が不用とする物と、甲が必要とする物とが、符合すると云ふことは殆どなく、ジードはその厄介さを、カメロン中尉の話を引用して説明してゐる。²⁾ 即ち中尉が亞弗利加のタンガンイカ地方を旅行してゐる中に、一隻の小舟を必要とした、そして漸くその小舟を発見したが、それはシデ・イブン・ハビブの所有する物であつて、彼は象牙とならその小舟と交換しようとする。然し中尉はその象牙を所有してゐなかつた。そこで中尉は象牙を所有してゐる男を再び発見せねばならなかつた、漸くモハメット・イブン・サリブが象牙を所有してゐることを発見したが、彼はその象牙と布とを交換しようとしてゐた、そこで中尉は三度その布を所有してゐる男を尋ねばならなかつた、幸にもモハメッド・イブン・ガアリブが布を持つてゐて、中尉の所有してゐる針金と交換することを承諾した。そこで中尉は針金と布とを交換し、その布と象牙とを交換し、その象牙と小舟とを交換して始めて小舟を使用することが出来たのであつた。

この複雑なる手續を、人々は繰返すの煩勞に到底堪へなくなり、こゝに一つの方法が案出されて來た、それは市場である。交通至便の要地に、例へば路の十字になつてゐる所で、甲の村からAが豚と羊とを交換しようと、相手を尋ねながら豚を曳いてやつて來る、又乙の村からBが斧と豚とを交換しようとやつて來る、そしてBはAの豚を見て、Aを呼び止め、その肩にする斧と豚とを交換しようと、話しかける、然しAは斧の必要を感じてゐない、所が丙の村からCが羊と布とを交換しようと、羊を連れてやつて來る、Aはその羊と豚とを交換しようと申込む、けれどもCは豚を欲してゐない、さうかうする中に、丁の村からDが布と斧とを交換しようと、その相手を尋ねてやつて來た、茲に彼等四人は、この十字路の若草の上で腰を下しながら、暫時の間にその交換をなし得たのであつた、斯くのごとき偶然的な出來事繰返しは、その十字路に不用の品を持って出てゐるさへすれば、何かしら自分の必要とする物と交換することが出來ると云ふことになり、方々の部落から人々が不用の物を持つて、その十字路へと集つて來るやうになつた。そして又その集りは、部落の慣習や、仕事の都合

からして一ヶ月の中何日と何日とが、最も多く人々が集ると云ふやうなことになる、その日に出て行けば、その交換がより容易となる所から、そこに自然と市日が定まり市場が始められて来たのである。然しながら人々は猶その怠惰の追及に倦むことはない。この市場に出で、数度の交換を重ねるのや、定日までその交換を俟つことに苦痛と困難とを大に感ずる所から、この不便を補ふものとして色々な商人を分化せしめて来た。

又他方に於いて、人々はその物々交換に際して煩勞を少くせんが爲に、誰れも好んで交換し、誰れにも必要欲く可からざるものであり、消費されて了ふ物、即ち一般的不變的な價值を有してゐる物を、常に保存し所持するやうに勉め出して来る。アダム・スミスが、注意深き人々は、世人がその勤勞に對して、多分交換することを拒絶しないであらうと考へられるやうな種類の財貨をば、常に保持することに努めると述べてゐるのは、この事實を指すものである。そしてこの要求に應ずるものとして、先づ第一に主要食物及び衣服が考へられる。現にハドソン灣沿岸一帯の地方に於いては、毛皮及び鞣皮がその生活必需品として、好んで交換

せられる所から、毛皮及び鞣皮は貨幣としての性質を帯び、否、既に貨幣そのものとなつてゐるのであつた。又地の東西を問はず狩獵時代には、衣服としての價值を有するこの毛皮及び鞣皮は、その交換に對して非常に有利なる地歩を占め、そしてそれは貨幣として考へられてゐた、例へば Iappish 語の rāha (毛皮) は、同系の言葉である Esthonian 語に於いては「金」と云ふ言葉となつてゐるのである。又露西亞に於いては、ビーター大帝當時まで、鞣皮の「金」が通用せられ、羅馬、カルタゴに於いても亦、この「金」が通用せられてゐた。そして現在亞米利加印度人の間に於いては、海狸の皮は一枚約二志に通用してゐるのである。又狩獵を事とし争鬪を常とする土人の間には、武器が各人の最も好むものであり、所持しやうとしてゐる物であつて、鎗の穂先六本が、女子一人の價值に相當し、濠洲の土人は武器を造る材料である石を以つて最も好んで交換される物と考へ、「金」の役目を演ぜしめてゐた。然るに遊牧時代に入り込んで来ると、その主要財産は家畜であり、従つて牛羊が「金」として使用せられてゐた。即ち Latin 語の Pecunia (金) は Pecus (家畜) より來り、英語の

fee (給料) は Anglo-Saxon 語の feoh 即ち家畜と云ふ意味の言葉より轉じ、同系のものとして獨逸語に nich (家畜)があり、又希臘語の κτήνη (財産) は keþna 又は keþna (家畜を飼ふ)と云ふ動詞より變化し、獨逸語の Schatz (財産)、Anglo-Saxon 語の ðæt 或は ðeat (富)、Norsk 語の Skat (税、貢)となつて來た、そして Frisian 語では Sket となり、再び元の家畜と云ふ意味に歸つてゐる。又マイネーの云ふ所によれば、牛はそれを一頭二頭と數へる所から Capitale (頭)と呼ばれ、それより經濟上の術語として Capital (資本)が生じ、法律上の術語に於いて Chattel (有體動産)となり、普通の意味に於いて Cattle (家畜)となつて來たのである、又奴隸も家畜の如く考へられて、交換の媒介物に使用せられ、婦人は購買婚の行はれるに伴れて、牛は六疋羊は二十四頭と評價されるに至つたのである。

然るに農耕時代に入るや、穀物を以つて交換の媒介物となし、ジードに従へば、日本に於いては米、それは一八六八年の革命まで、物品、給料を計算する標準となつてゐた。¹³⁾又歐米に於いても穀物、それは希臘時代より今日まで「金」として使用せられ、諾威に於いては、

穀物を銀行に預入れ、或はその貸借が行はれてゐる。大麥、小麥、燕麥は歐洲に於いて、玉蜀黍は中央亞米利加殊にメキシコに於いて、オリブ油は地中海沿岸地方に於いて、チヨコレートの實は東印度に於いて、¹⁴⁾煙草はバーヂニヤに於いて、¹⁵⁾「金」として使用せられたのである。又綿布は、アビシニヤ、スマトラ、メキシコ、ペルー、シベリヤ等に「金」として使用せられ、獨逸語の Pfennig (小銅貨の名)は羅典語の Penna (布)より變化して、¹⁶⁾その昔を語つてゐる。又一六九四年までポルトガル領のアナゴラに於いては、藥で織つた小さな疊表が金として流通し、花筵はサモアに於いて物品交換の媒介物となり、鹽はアビシニヤ、スマトラ、メキシコに、安息香、護謨、蜂蠟はスマトラに共に「金」として取扱はれ、茶は韃靼人及び西藏人の間に、釘は蘇蘭土の村々に於いて又「金」として役立つてゐた。其他小刀、釣針、草削器、鼎、大釜、水瓶、扇、曲玉も亦各所に於いてこの用に供されてゐたのである。¹⁷⁾北米土人の間には、帶又は頸飾にする貝殻が、「金」として使用せられ、その長さや色と光澤とによつて、その價を異にし、黒の一呎は白の二呎に相當してゐた、之と同じく東印度

人の間には、子安貝が「金」として使用せられ、印度、暹羅、又は阿弗利加の西海岸地方に於いて、現に少額の賣買にそれが必要とせられ Maldive 或は Laccadive 島より採集して輸出せられたのである。そしてこの子安貝一個の値は一片の百分の二に相當し、Ezra 島に於いては、鯨の齒が子安貝の代用をなし、白い齒よりも赤い齒が高價を示してゐる、又南洋の諸島に於いては、珍しい鳥から抜き取つた赤い羽毛が、「金」として通行してゐるのである、¹⁵⁾そしてこれ等の物の價値は、その根本に於いて單に裝飾用に供されると云ふことにあるのであつて、生活に餘裕のある地方に於いてのみ見らるゝ現象である。

吾々は茲に進んで貨幣としての金屬を考察することにしよう。希臘語に於いては *αργυρος* を、銀、銀貨或は貨幣と同意義に用ひ、羅典語に於いては *aes* を、銅、青銅、眞鍮、貨幣、賃金と同意義に使用し、佛蘭西語に於いては *argent* を銀又は貨幣として用ひ、獨逸語に於いては貨幣 (*gold*) と黄金とが同一語源より來り、日本語に於いては金は黄金又は貨幣を意味してゐる。

今、金屬貨幣の時代を、金貨時代、銀貨時代、銅貨(青銅貨)時代、鐵貨時代と分けることが出来る。そして貨幣は、この順序によつて發見せられて來たのである。¹⁹⁾ 黄金はその初め砂金として發見せられ、その硬度が錫の如く軟かであり、光澤の美を永久に失はない所から、未だ溶解力を知らない彼等も容易にこれを裝飾用として使用し、埃及に於いては、今より五千五百年前既に價値の標準として用ゐられ、*Menes* の法典は今より三千六百年前に黄金の價は、銀の二倍半なることを規定し、²⁰⁾ 舊約聖書に、ヤコブがカンナの地にあるシケムの邑に至り、その邑の前に天幕を張り、その野をシケムの父ハモルの子等より金百枚を以つて購ひ、²¹⁾ 又ヨセフが、汝の主人より金銀をぬすまんやと云つてゐるが如きは、金銀を貨幣として使用してゐた事を物語るものである。

又、ホーマーが *Cleus* が黄金の甲冑を牛百頭で買ひ、*Dimoede* が青銅のそれを、牛九頭に買取りしを語つてゐる、²²⁾ そしてこの黄金の尊重せられる主なる原因は、埃及語で黄金を *nub* と呼び、ヘブライ語で *zahab* と呼び、サンスクリットで *jvalita* 或は *hiranya* と呼んでゐる

る如く、その燦爛たる光澤に依るのである。然るに銀はその光澤に於いて、黄金に劣つてゐる。即ち黄金を *sol* (太陽) と呼び、銀を *Luna* (月) と呼ぶ如く、又ヘブライ語に於いて、動詞の *Khasaf* (青ざめる) より變じて *Khesef* (銀) が出来、希臘語に於いて白いと云ふ意味の *argentum* より羅典語の銀 (*argentum*) が出来たやうに、その價值も亦従つて黄金に劣つてゐる。この金銀は地金の價值に於いて裝飾用であり、そしてそれは現今の支那に於いて、商人が秤を用意して其の都度量るやうに、古代に於ける金銀は、その重量によつて、その價值を計算したのである。それ故に金銀は棒状として貯藏され、交換に際してそれを適宜に切斷したのである。即ち露國の留は「切斷された一片」(*filii*) と云ふ意味から轉じて來た言葉であつて、それによつてもこの事實を推知することが出来る。

又、銅も貨幣として、既に古代の埃及に用ゐられ、九十一瓦を一 *mon* とし、牡牛一頭をば百二十 *mon* と評價し、中央アフリ加に於いては、現今真鍮の棒が貨幣として用意せられてゐる。²⁵⁾ 鐵はアリストテレス及びポールクスの云ふ所によれば、古代より貨幣として用ゐら

れ、ホーマーの時代及びイスライルに於けると同じく、その重さによつて價值が計算されてゐた。又ジードの云ふ所によれば、或る時代には寧ろ鐵が他の金屬より尊重せられ、鐵塊が賞品として與へられたことすらある。²⁶⁾ そして現今でも中部アフリ加では、直徑四分の三呎より二呎までの、厚さ半吋の鐵板を貨幣として盛に使用してゐるのである。其の外、鉛は彈丸の形によつて、古代の希臘、羅馬に、又は一六三五年まで、米國マサチューセッツ州に、現今では緬甸の市場に於いて、小額の賣買を助けてゐる。次に錫は、マラッカ海峽沿岸に於いて用ゐられ、共にその目方によつて、その價值が評されてゐるのである。

以上述べ來つた物品が貨幣として交換の媒介をなし得る能力は、物品そのもの、中に含有されてゐる價值に基くものであつて、假令南洋の土人の間に貨幣とされてゐる赤い羽毛と雖も、それは裝飾品として他に誇示するに足る所より、又黄金は各種の緊急切迫してゐる日常生活の欲望が満足されて來た時に、——そしてそれは比較的少數の人々であるが、——その人々から價值を認められて來る、即ち彼等は珍らしき物品たる貴金屬や、寶石を愛好し、假

令それが無用であつて、役立たない、即ち武器にもならねば道具にもならない、換言すれば劍にもならねば筆頭にもならない贅澤品であると云ふことが、却つて自己の富が他に優越する事を示す象徴であると考へ、従つてそれを裝飾品として熱愛し、若し人々が黄金を所持する時には、彼等は何時にても、自己の有する財貨と交換することを許諾する所から、この富豪の交換を條件として、その價值が認められて來たのである。²⁷⁾

茲に吾々は現時の所謂貨幣即ちアリストテレスが西曆紀元前三八四年に“money existed not by nature, but by law.”(貨幣はその性質によつて存在するものではなく、法律によつて存在するものである。)と云ひし所の鑄貨及び紙幣と、當時のそれとは相異なる性質を有してゐることを發見せねばならぬ。そしてそれは Money といふ一語に依て能く表示せられてゐるのである。それ故に吾々は次にこの Money といふ言葉に就いて考へることにしやう。

註(1) Jevons, Money and Mechanism of Exchange, P. 3.

(2) Gide, First Principles of Political Economy, PP. 49—50.

- (3) Osgood, A History of Industry, PP. 23. 47.
 (4) Lafargue, The Right to be Lazy, P. 9.
 (5) 商人の儲は、この人々の勞を省くものとして是認せられ、田舎又は新開地に於いては、商店が一軒か二軒あつて、如何なる物品でも賣つて居り、又大都會に於いては餘り商業が専門化した結果として、その各商店を買廻る不便を救ふものとして、Department-store が發生したと同じ理由である。シードは金が出来た、然し賣る人のあるのを尋れ、買ふ人のあるのを尋れるのが困難であるから、そこで商人が出来たと云ふのは寧ろ誤であつて、金が容易に出来なかつたから却つて市場が早く出来、商人が出来たのである。

(6) Kinley, Money, P. 16.

(7) Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, B. I. chap. II. III.

(8) Gide, *ibid.*, P. 51.

(9) Jevons, *ibid.*, PP. 20—21.

- (10) Osgood, *ibid.*, P. 23; Westermarck, *The History of Human Marriage*, vol. I. ch II.
- (11) H. S. Maine, *The Early History of Institutions*.
- (12) Jevons, *ibid.*, P. 23.
- (13) それは明治維新の誤である。大名、士、足輕、仲間が石(コク)高でその給料を貰つてゐた。ことを意味するのであらう。そして明治四十年頃までは、屋外労働者の日當は、一日米三升と云
- (14) Caracasに於て一五二一年に cacao-nut が三十個に Penny 1 に通用した。
- (15) そしてその煙草は彼等が消費するのではなく、何日にも輸出することが出来るからであつた。又 Virginia. の植民會社は、その植民の爲に若い妻を輸入して、その一人の代價を煙草百封度と定め、後には百五十封度に値上げした。Walker, *Money, Trade, and Industry*, P. 5.
- (16) Erich Eppich, *Geld eine sozialpsychologische Studie*, P. 15.
- (17) Carille, *The Evolution of Modern Money* P. 235; Erich Eppich, *ibid.*, P. 15.
- (18) Lock, *The Nationalisation of Credit*, P. 66.

- (19) Gide, *Principles d' Economie Politique*, P. 262; Spalding, *The Functions of Money*, P. 22.
- (20) Kirke Rose, *The Precious Metals Comprising Gold, Silver and Platinum*, P. 2.
- (21) 舊約全書、創世記、第三三、四二、四三、四四章。
- (22) Homer, *Iliad*. B. VI.
- (23) Hoefler, *Histoire de Chimie*. P. 43.
- (24) Osogod, *ibid.*, P. 51.
- (25) Lock, *ibid.*, P. 65.
- (26) Gide, *First Principles of Political Economy*, P. 52; Spalding *ibid.*, PP. 24—25.
- (27) Carille, *ibid.*, P. 236; Veblen, *The Theory of the Leisure Class*, P. P. 12-14.
- (28) 裝飾品や贅澤品が貨幣となるのは、その生活が容易なる熱帯地方か、又は文明の進んでアルシヨアツシーの如く生活に苦しまざる階級の存在してゐることを必要とする。

この Money は、羅典語の鑄貨即ち Moneta からやつて来た言葉であつて、この Moneta は刻印することによつて、その價值を知らせると云ふ意味の Mones より轉じて来たのであると云はれてゐる。然しながら、それは寧ろ羅馬に於ける鑄貨が羅馬で最も舊くからあり、又尊崇せられてゐる男の子が生れると一片の黄金を奉納する風習になつてゐる、Juno Moneta の神殿で始めて作られ、そしてその刻印として、天にまします女王で、天の光であらせられ、Jupiter の妃であらせられる Juno の像が用ゐられた所から、Moneta と云ふ言葉が、鑄貨と云ふことを意味し、これが動詞に變化して Mones となつたものと考へられる。それ故に Money の語源は、女神の名から出て来て、貨幣としての特質は刻印を有し、それによつてその價值を示してゐると云ふ所にあるのである。

却説、前にも述べし如く、物々交換の不便に堪へ兼ねた人類は、誰れしも交換することを好むやうな物品を保存し、それを交換の媒介物とすることの、より便利なることを發見して來た。然しその次の時期に於いては、その物品を金屬に求め、交換する都度、その重量を計

り、それを切斷してゐたのであつた。けれどもやがてその取引が盛になつて來ると、彼等は常に秤を持參し、その都度その重量を計り、それを切斷すると云ふ煩雜さに、再び堪へかねて來た。そこで彼等は、その棒狀の金屬を幾多の小片に横斷して、その都度切斷するの手續と不便とを省き、且つその一片一片に、その目方を刻し、進んでそれが純良のものであることを保障する爲に、各種の徽章を附し、進んではそれによつてその一部を切斷することを防ぎ、その都度純不純を驗し、その目方を計る煩雜さを省略したのである。即ち斯くして Money が生れ、そしてそれを鑄貨或は硬貨と云ふたのである。

この鑄貨は、西曆紀元前一〇九一年支那に於いて、始めて鑄造せられ、Aegina に於いては、同じく西曆紀元前八九五年に、アルゴス王の Pheidon によつて、その表面に龜の圖案を有してゐる洋銀貨が鑄造されたと言はれてゐる。又歴史家ヘロドウトスによれば、金貨或は銀貨を最初に使用した人々は Lydia 人である。然しフェニキヤも亦、既に西曆紀元前一五〇〇年より一二〇〇年頃までには、地中海東部諸國の商業の中心となり、一〇〇〇年より六

〇〇年頃に至つては、一大植民國と變じ、即ち八五〇年にはカルタゴを建設し、斯くして大船を發明し、航海を盛にし、地中海より更にジブラルタル海峡を出で、大西洋上の英國又はその沿岸諸國と通商してゐたのであつた。この通商の必要上から生れて來たものは、アルファベット、鑄貨とであり、そしてその鑄貨の種類は銅貨及び金貨であつたと傳へられてゐる。又ジードによれば、金屬に刻印し、或はその鑄造を發明したものは、フェニキヤの近くにある小亞細亞の希臘植民地であり、オスグウッドによれば、フェニキヤ人は希臘人よりも先に、その商業上の取引に際して鑄貨を使用し、希臘人は西曆紀元前七〇〇年時代に一定の型と一定の價值とを有し、その都市の徽章を刻印して、正しき目方を保證した所の鑄貨を使用してゐたけれどもそれは、フェニキヤ人より學んだものではなく、*Phoenicians* 人より學んだものであると論じてゐる。

然し、私は歐亞の間に於ける鑄貨の起源は、フェニキヤにありと考へねばならぬ。何故なれば、彼等は古代に於ける最も盛なる商業國であつて、彼等フェニキヤ人を介してのみ、古

代の歐洲即ち地中海沿岸諸國は、その貿易をなし得たのであつた。古代の人々は主して天産物によつてその生活を維持し、そしてその天産物は氣候により、土味、地性によつて左右せられる結果、古代の人々は、その近接してゐる國々との貿易よりも、寧ろ氣候と土味と地性とを異にし、従つてその天産物の種類を異にしてゐる、遠國との貿易を必要としたのであつた。この遠國相互間の貿易の仲介をなすに當つて、どうしても、各國語をその發音によつて表し得るアルファベットを必要とすると共に、各國に共通なる信用を有してゐる鑄貨を造り出し、それを流通せしむる必要に迫られて來たのであつた。フェニキヤ人は、春の航海に際してその通貨を支拂つて、オリブ油を買取り、秋の航海に際して、曩に支拂つた所の鑄貨と引替に陶器を賣ると云ふが如く、その鑄貨を利用したのであつた。斯くして留相場の不安定なりし蒲潮に我が朝鮮銀行の紙幣が一般的に使用せられ、麻相場の動搖常ならざりし獨逸に於いて、英國の磅が却つて重寶がられた如く、フェニキヤの鑄貨は地中海沿岸諸國の通貨となつたものと考へられる。そして各國はそれに頼つて自國の通貨を鑄造する必要に迫られな

かつた。然し他國がフェニキヤに代つて、假令地方的にせよ商業國となつて來ると、その必要を感じ出して來た。即ち希臘植民地中の商業的中心となつて來た Lydia が、フェニキヤに眞似て貨幣を鑄造し、これを再び撲して、希臘が自國の鑄貨を造り出して來たのであると私は推考するのである。次いで羅馬が地中海沿岸諸國の中に商業的地歩を占めて來ると、又鑄貨を有するやうになり、銅貨は西曆紀元前四五年に、銀貨は同じく二六八年に、金貨も亦同じく二〇七年に使用され始めたのである。¹⁰⁾そして商業的に洗禮を受けない西北部の歐洲が西曆一三二〇年まで鑄貨を所有しなかつたこと、及び英國に於いて初めて鑄貨が造られたのは、實に一四八九年であつて、英國が商業國として醒め出した時であつたこと等によつても、鑄貨は商業に關係を有してゐることを、推知することが出来ると思ふ。そしてヘルフエリツヒが「交通の人的媒介は商人であり、物的媒介は貨幣である」¹²⁾と云つてゐるのは、この關係を表してゐるものとしても亦、意味のある言葉である。

私は、こゝにこの鑄貨として如何なる種類のものがあるかを、一瞥して見ることにしよう。

キンレーは、この鑄貨として、鐵貨、銅貨、鉛貨、錫貨、白金貨、銀貨、金貨等があることを述べ、¹³⁾ ジエヴォンスは、鐵貨、鉛貨、錫貨、銅貨、銀貨、金貨、白金貨、白銅貨、其の他の合金貨を擧げてゐるのである。¹¹⁾

鐵貨は上古、ペルシャに用ゐられ、希臘に使用せられ、¹⁵⁾ 明治時代の初期に於いては、未だ日本に使用せられてゐたのである。然し鐵貨は餘りにその地金としての價額が下落し、且つ鑄安きを以つて貨幣として流通するには適當しなかつた。けれども歐洲大戰によつて獨逸の如く財政の急迫せる場合に於いては、即ち一九一四年より一九一九年までの戰によつて生じた通貨の缺乏を助くる爲に、一九二〇年の二月には五錢鐵貨が一百十六萬八千二百五十一麻鑄造され、同年の八月末には、それが七千一百八十萬麻に及んだのである。¹⁰⁾

鉛はそれのみにては、餘りに軟質であるが爲めに、鑄貨としては適してゐない、けれどもそれは往々錫との合金、即ち白鐵として貨幣に鑄造せられるのである。

次に錫貨は、Syracuse の Dionysius によつて鑄貨とされたと傳へられ、又錫はその初め英

國の Cornwall より産出されたる所から、英國最初の通貨は、錫によつて造られたものである事は殆ど疑ふ餘地がないとまで斷言されてゐる。それより或は羅馬皇帝により、或は英國の王によつて數代に亘り、各種の錫貨が鑄造された。即ち一六八〇年にはチャルス二世により、一六九〇年より一六九一年まではウィリヤム及びメリーにより、多額の錫貨が世に出されたのである。其の外ジャバに於いて、墨西哥に於いて、又錫貨が使用せられてゐた。この錫貨は美しくしき白色を有してゐて鑄ず、地金としては銅よりも高價である所から、鑄貨として適當であるかの如く考へられる。然しそれは又餘りに軟く、曲り或は割れ勝である所から遂に貨幣としての使用に堪へ得なくなつたのである。

銅貨は銅が乾燥せる空氣中に於いては鑄ず、鑄型によつて圖案をはつきりと鑄出すに適しその硬度及び粘度も亦、通貨として程良きものである所から、廣く金銀貨の補助貨幣として用ゐられてゐる。又上古に於けるヘブライの鑄貨は主として銅貨であり、希臘に於いても亦同様に使用せられ、アテネに於いては西曆紀元前四四〇年にこれを鑄造し、それを *Chalkus*

と呼んでゐたのである。次に羅馬に於いては、西曆紀元前四五〇年に銅貨を造り、これをば *As (Aes)*¹⁷⁾ と呼び、同じく二六九年に銀貨が出来るまでは、本位貨幣の地位を占めてゐたのである。そして露西亞及び瑞典に於いては、今より百五十年前には銅貨が、主要なる貨幣であつたのである。

銀貨は、銀が美しい白い光澤を有してゐて、相當の重さと硬度とを有し、地金としても黄金と銅との間に介在し、相當の價値が認められ、そしてその價値は五十年間或は百年間に就いて考へる時に、餘りに大なる變動を來さない所から、鑄貨として用ゐられる。即ち經濟學者が銀及び黄金が鑄貨として用ゐられる理由として(A)總ての手段を以つてするも殆ど化學的に不蝕性と耐久性を有すること、(B)價値の不變動なること、¹⁸⁾(C)物理的に分割し又は溶解し得ること、(D)等質であること、(E)輕便に運送し得ること、即ち流通に便なること、(F)地金としても有用であり價は高いけれどもダイヤモンドの如く高くないこと(G)比重により、音響により、又は一見して容易にその純不純を試験し、これを見分け得ること、(H)

鑄造の容易なること、¹⁹⁾等を擧げてゐるのである。そしてこの銀貨が希臘及び羅馬等に於いて古くから使用せられたのもこの理由によるものである。

又黄金は以上の諸點に於いて銀より優れてゐる。そして文明國の殆ど總てが金貨本位を採用してゐるのも亦、この理由によるのである。金屬の中で黄金よりも高價なものに白金がある、白金が鑄貨となつたのは、露西亞であつて、一八二八年に、十二留、六留、三留の白金貨を鑄造したが、それは直ちに金融界から隠れて、裝飾用に使用され、且つその硬度の高い爲にそれを鑄造するに大なる經費を要した所から、中止されざるを得なくなつたのである。然し白金作業の技術が進歩するにつれて、その後一八六七年に巴里に開催された國際貨幣會議に、露國委員 M. de Jacobi が五法の白金貨を使用すべく提案したのであるが、それは實の域に達しなかつた。

次にニッケルは、ニッケル一に對して銅三の割合にて、合金として用ゐられ、一八六九年には、英國に於いて白銅貨が鑄造され、それより白耳義、米國、獨逸、日本と次第に廣くそ

れが使用せられるに至つたのである。又亞鉛貨は歐洲大戰後アルミニウム貨と同じく獨逸に使用せられ、前者の鑄造高は五千六百八十萬麻に及び、後者は五千三百三十萬麻と數へられたのである。其の外に、青銅貨、眞鍮貨があり、Narbhundra の王政の初期に於いては銅を六割から七割、亞鉛を二割から二割五分、銀を六分から一割一分、黄金を少量含んだ合金によつて、Silycas と云ふ小額の貨幣が作られ。愛蘭土の James II は古い鐵砲、破れ鐘、古銅器、古眞鍮、白鐵、不用の臺所道具等を手當り次第に掻き集めて鎔解して合金を作り、これより貨幣を鑄造し、又銀貨の代りに白鐵貨を使用せしめんとしたのであつた。

却説、鑄貨は上述の如く殆ど總ての金屬をその資料として來た。そしてそこに淘汰が行はれ、金貨、銀貨、銅貨、白銅貨が貨幣として殘存せしめられて來たのである。この鑄貨はその初め刻印を打つことに始つたのであるが、その刻印を打つと云ふことは、又その金屬塊に封印をほどこすことに於いて始められたのであつた。そしてその封印を施すことは、既に埃及の壁畫に於いても見ることが出来るやうに、その金屬塊の所有者を明にし、その目方を記

憶する爲に外ならなかつた。然しその封印が屢々切れることによつて、その目方を再び秤に問ふ手数を繰返さねばならぬ不便があつた。そこでこの封印をなすよりも、寧ろ金屬塊そのものに、直接刻印を打込むことが、より輕便であることに考付き、その目方を刻印したのである。然るにこの目方の刻印に次いで當然起つて來たものは、やはり所有者の刻印であつた、この所有者の刻印は盜難に對する豫防より變じて、その金屬塊を最初に振出した人に對してその純、不純の責任を負はしむることとなり、それを他面よりすれば、振出人がその純粹と目方を保證することになつて來たのである。

茲にその貨幣を振出した人は自己の振出したものと類似の刻印が施され、而もその質に於いて不純であり、又はその目方に於いて少きものが出現して來るといふこと、即ち贋造貨幣が出現するといふことを恐れねばならなくなつた。又自己より振出したものが、その一部分を切斷され、或は削り取られて、その目方を少くし、自己の責任額に對して損失を招くことを憂慮して來たのであつた、それ故に Lydia 及び Peloponnesus に於ける最初の鑄貨の如く

唯だその表面にのみ刻印せしものは、次の時期に於いて、兩面に刻印せられ、その裏面の削り取れることを防止し、波斯に於ける貨幣 Laris の如く、約六種の針金を二つに曲げ、その一方の足を平たくして、それに刻印せしものは、片方の足の切斷せられざるが爲に、次の時期には穴あき錢と變形して來るのであつた。

斯くして人々は次第にその刻印に重きを置いて來た。従つて鑄貨はその表裏に印せられたる圖案の完全なることに注意が拂はれ、ジュヴオンスの如く、「鑄貨とはその兩面に打印せられた圖案の完全なることに依つて、其の重量及び品質を證明してゐる錠子である」と、定義せられるに至つたのである。²⁰⁾又その圖案は偽造を防遏する爲に、次第に精巧なるものとなり、その鑄造に要する費用も亦嵩んで來た。こゝに拾圓の金貨は拾圓分の地金より、その鑄造費例へば二拾錢を引去りしもの、即ち九圓八拾錢の地金を以つて、鑄造せられる當然の過程に入込んで來たのである。それ故に今若し鑄貨が地金、即ち潰しとして評價せられる時は、拾圓の金貨も九圓八拾錢の價值をさへ保有してゐないことになるのである。

この勢は、他方に於いて貨幣の鑄造が、多くその社會に於ける有力者によつて行はれる結果として強められ、額面だけの價值なき鑄貨も、價值あるものとして、その通用が強制せられて來る。こゝに鑄貨の價值は、その地金の價值よりも、その通用可能性に對する信用に繫つて存するものとなつて來る。斯くして又そこに紙幣の出現すべき世界が、造り出されて來たのである。

註 (1) Spalding, The Functions of Money, P. 2.

(2) 壹圓紙幣を大黒様と云ひ、拾圓紙幣を猪と云ふがやうである。

(3) Coin は羅典語の *Cuneus* から轉じて來たの *クニウス* *Cuneus* は「楔形をした金屬の小片」を意味してゐた。Jevons, Money and The Mechanism of Exchange p. 57; Kinley, Money, p. 29.

(4) Spalding, *ibid* p. 30. *ニヒ* Phidon *ニヒ* Kinley, *ibid*, p. 30; Grote, History of Greece, Vol. III. p. 318; Jevons, *ibid*, p. 56. *ニヒ* Pheidon *ニヒ* Eppich, Geld eine sozialpsychologische Studie. S. 16; Lenormant La Monnaie dans l'antiquité.

(5) H. W. Von Leon, Ancient Man pp. 206-207; 187-192.

(6) Frank Lock, The Nationalisation of Credit, pp. 65-66.

(7) Gide, First Principles of Political. P. 64. (Gide は Herodot に依る者と思ふ。)

(8) Osgood, A History of Industry, pp. 80-82.

(9) この推考は餘りに大膽である。多くの學者の支持する Argos 説、或は Lydia 説に反對するものとして、その無謀が非難される。而も私の推考は、フランク・ロックのいふ銅貨及び金貨に先立つて、錫鑄貨の存在を主張するものであつて、それは當時の經濟的環境から推理されればならぬ結論である。何故ならばフェニキヤ人は、Göttingen 大學教授 R. Pietschman のいふ所によれば、西紀前一千五百年には、既に Cyrus 島に移住し、續いて Rhodes, Cyclades, Samothrace, Thasos に移り、西紀前一千二百年には、西班牙の大西洋岸たる Cadix 及び Tarshish を發見し、又當時錫を Cassiterides の鑛山から掘出して來た。そしてその鑛山は或は Scilly 島であると云はれ、或は西班牙の Vigo であると云はれてゐる。(Historians' History of the World, vol. II, P. 247; Stephenson, The Principles of Commercial History, P. 24) 又彼等はサイプラス島に銅鑛山を拓き、タールスに全鑛山を求め、希臘のヘロドタス

をして、「鑽石を求むるフェニキヤ人の爲に全山を掘り起されむ」と嘆せしめたのであつた。今若し吾々が通俗説である *Lydia* 起原説に左祖するならば、それは西紀前七百年、詳言すれば六百八十七年より六百五十二年までの間であるが故に、フェニキヤ人が錫を *Cassiterides* の嶺山より掘出してより、約五百年後である。そして私は鑄貨の始めは恐らく金貨でもなく、銀貨でもなく、又金と銀との合金でもなく、それは寧ろ錫の鑄貨であつたと推論したい。

錫は美しくしき白色であつて、爪にても容易に刻印し得る程度に軟く、冶金術の未だ知られてゐない時代でも、自然錫として産出し、又金、銀に比して廉價であるから、生活標準の低き古代に於いて、餘りに高價であり過ぎる金、銀貨よりもより通用性を有し必要性を有してゐるのである。そして金銀は寧ろ日本に於けるが如く、朝貢の料となり或は臣下に賜ふの資となり富の貯蔵の具になつてゐたのではないかと思ふ。(佐野英山編「鑄貨圖録」坤一頁参照)或は又大なる取引の際に用ゐられるものであるとするならば、大なる取引は屢々起るものではないから、金、銀に前以つて刻印せずとも、——盜難を防ぐ爲の刻印それは別問題であるが、——その都度計量し得るが、少額の取引は日常屢々行はれるから、それを一々その都度計量することは煩雜

であり、假令その計量に多少の誤りがあつても、大なる損得にならぬ所から、刻印を信用して取引が圓満に行はれる道理である。而も亦今日その錫貨が残存しない、*Jevons* をして、錫貨の開祖を *Syracuse* の *Dionysius* であると述べたのは、(*Money*, P. 44.)それが金銀の如く高價でないから保存されず、又軟く曲り或は割り勝である所からであらう。

- (10) Eppich, Geld, S. 16.
- (11) Frank Lock, *ibid.*, P. 66.
- (12) Helfferich, *Das Geld*, 2. Aufl. S. 210.
- (13) Kinley, *Money*, P. 30.
- (14) *Jevons*, *ibid.*, Pp. 43-52.
- (15) Eppich, *Geld*, S. 15.
- (16) Spalding, *ibid.*, P. 25.
- (17) Spalding, *ibid.*, P. 35 且 *As と銀*、*Jevons*, *ibid.*, P. 45 且 *As と銀*、*ibid.*, P. 116 且 *As と銀*、*ibid.*, P. 117 且 *As と銀*の合金貨である。

(18) 後節に論ずる如くその「不變質」と云ふ可きであると思ふ。

(19) Eppich, Geld S. 16; Jevons, *ibid.*, P. 31.

(20) Jevons, *ibid.*, P. 56. 山崎覺次郎博士は、この定義を以つて「正鵠を得たるものに非ず」としてゐられるが、それは酷評である。シェゾォンスは前後の書方から考へる時に、此定義は現代の鑄貨が如何なるものであるかを云つたもので、寧ろその半面の事實を語るものであると思ふ。

5

ヒルデブランドは、社會進化の過程をば交換の方法を規準として、(1)交換經濟時代、(2)貨幣經濟時代、(3)信用經濟時代の三時代に劃してゐる。けれども吾々が更に進んでその現象を考察する時には、「交換」と云ふ現象それ自身が、如何なる社會的素地の上に立つかを考へねばならぬ。そしてそれは「信用」の素地の上に立つて始めて、可能であると云ふことが、發見せられるのである。然らば信用とは何であるか、信用とは或るもの——それは物品、人

又は神等——に對して價値の享受を豫期する心的狀態であり、そしてこゝに價値とは、欲望を満足する可能性に對する認識及び尊重の感じを意味するのである。それ故に吾々は物品に對して、それが將來自己の欲望を満足し得る可能性或は能力を有するものであることを認識せず、且つそれを必要とするの感じが起らない時には、換言すれば先づその物品に對して信用を有してゐない時には、その信用を有しない物品と自己の有する物品との間に交換を行はない。即ち物々交換も亦物に對する信用に立脚してゐるのであつて、これを吾々は對物信用の時代と云ふことが出来ると思ふ。

次に貨幣が発生し、その貨幣が自然貨幣の時代より、人意貨幣の時代に、即ち牛、羊、穀物等を媒介物としてゐた時代より、金屬秤量制の時代を経て、貨幣の時代に入り込んで來ると、その貨幣に對して、社會の人々がそれによつて、自己の必要とする物品又は勞力と交換することを、拒否しないと云ふ社會的信用が次第に大となり、その貨幣の授受が一般に行はれ、萬一それが拒否せられたる時には、自己の所有する貨幣は、食物として或は地金として

の價値を保有することに安心を求め、その交換が行はれたのである。それ故にこの交換は社會と擔保品とに對する二つの信用を、その條件とするものであつた。そしてこれを吾々は擔保信用の時代と云ふことが出来ると思ふ。

然るにその鑄貨か、次第にその額面と實際そのものゝ價値、即ち地金としての價値との間に開きを生じ、地金の價値が額面のそれに伴はないやうになり、その差違が甚だしくなるや、その刻印、その圖案にのみ重きが置かれ、その刻印あるが故に、その圖案の完全なるが故に、それが社會に流通することになるのである。故にそれはそれ自身として、殆ど無價値なるものであつても、社會がこれを流通せしむると云ふことに對する信用がそこにあるのである。即ちこの時代に至つて、初めて貨幣としての紙幣が、世に行はれて來るのである。そしてそれを吾々は證券信用の時代と云ふのである。この證券信用の時代に、次いでやつて來るものは、個人の人格と不信的行爲に對する社會的制裁とに信頼を置く對人信用の時代である。即ちその一諾を金石よりも重する時代であり、「人様の面前にてお笑下され度候」との一

札をも入れずに武士に「一言は御座らぬ」で通る時代である。故に吾々は、擔保信用の時代より、對人信用の時代に移る過渡期に於いて、證券信用の時代を發見し、この時代に於いて紙幣の流通を見るのである。

却説、紙幣はその古き歴史を *Byzantines* に於ける木製の貨幣に求めることが出来、又 *Antioch* 及び *Alepxandria* に於ける木製の *Talent* (錢の名) に溯ることが出来る。それは單なる木製であつて、その用材そのものには、殆ど何等の價値を認めることが出来ない、けれどもその上に押されたる焼印によつて、貨幣たるの地位を占めてゐたものである。降つて西曆八〇八年伊太利のロンバーデーに於いて、猶太人が初めて銀行を經營し、初めてそれより爲替手形を發行した。そしてそれは鑄貨と同じく貨物の交換を媒介する地位に立つて來たのであつた、然し乍らそれは近世に於ける紙幣制度の母であると云ふことが出来なかつた。

近世の紙幣制度は、西曆一五六年伊太利のベニス市に於いて芽生つて來た。當時ベニス政府は財政窮乏の餘り、同市の富豪より強制的に借財し、それに對して當時の風俗を破つて

利子を認め、それを規則正しく支拂つて居た。然しその元金は到底支拂得ざる有様にあつたのである、そこでこの借用證券は商業上の取引に於いて金銭として役立ち、遂にベニス國內に於ける通貨として認められて來たのである、こゝに一一五七年この證券を基礎として銀行が出来、この證券はやがて紙幣と變じて來たのである、そしてこの銀行は、一七九七年佛國軍の侵入によつて破壊せらるゝまでは、地中海沿岸に於ける金融の中心たるの勢力を有してゐたのである。

斯くして人々は紙幣を發明して來た。そしてこの發明は、歐洲大戰以後の世界に於いて濫發せられたる紙幣の如く社會生活に幾多の利と害とを投込んで來、「金」が社會問題の對象となる直接の原因をなして來たのである。今吾々は更に節を改めて、この「金」の本質に向つてその討究の歩を進めようと思ふ。

註 (1) Hildebrand, Archiv der Wirtschafts 1864 II. S. 1.

(2) Marshall, Money Credit and Commerce P. 265. マーシャルが信用の要素は、過去の助力

に對して勞働或は物品の形に於いて報いられると思ふことであると、考へてゐるのであるが、その關係が必ずしも對人關係に限られる必要はないと思ふ。

(3) 塊國派の如く價值を「物の效用に對する人の認識」とすることは、Carver (The Distribution of wealth, P. 3.) が "Though there can be no value where there is no utility, yet there may be, and often is, utility where there is no value." と云つてゐる如く、即ち空氣は人がその效用を認識してゐるにも拘らず、この價值を有せざることによつて不完全であると云ふことが出来る。

(4) Jevons, Money and the Mechanism of Exchange, P. 29.

(5) Lock, The Nationalisation of Credit. PP. 67, 71, 72.

第二章 「金」の本質に對する理論的研究

1

吾々は遂に金の本質、即ち貨幣の本質は何であるかと云ふ難題に逢着せざるを得なくなつた。そしてそれはヘルフェリツヒの云ふが如く、確に古から理論經濟學に於ける最も困難なる問題であり、又今後も困難なる問題として、その研究者に残される事であらう。

先づ吾々はこの貨幣の本質に關して在來幾多の人々によつて考へられたる學說を討究して見る必要がある。この貨幣の本質は、貨幣の素材に關するものでもなく、又その外形でもない、それは實體 (Das Ding an sich) 即ち物それ自身でもなく、唯だそれは貨幣の職能に關するものでなければならぬと考へられる、そしてその中、最も普通に唱へられてゐるものは、

彼の媒介説である。この媒介説は、言ふまでもなくその流通する範圍内が無限的と有限的とを論ぜず、各種の交換の媒介物を總稱して貨幣となし、或は一つ經濟區域内に於いて、個人間に貨物の移轉を媒介する作用を爲す物件を稱して、貨幣といふのである。そして若し吾々が貨幣の發生史を觀察する時には、貨幣の職能中、一般の交換媒介物としての職能が最も初に現れ來つたものと認めねばならぬ。由來貨幣は、交換する物件の種類が増加するに隨つて生ずる物々交換の困難を、除却するの必要にあるのであつて、一般の交換媒介物たる職能は貨幣の職と能して、歴史上主なる地位を占めてゐるのである。而も近時に於いて經濟社會の組織に就いて見るに交換の媒介物としての職能は甚しく顯著であつて、他の職能は何れも之に従屬してゐるものと考へることが出來ると論ぜられる。

然るにワダナーは、貨幣は交換の媒介物たると共に、又價値の尺度たる職能を有し、この兩者は共に貨幣の原生的職能であると論じてゐる。然しこの二つの職能の原生、派生に就いては、メンガーの駁論するが如く、又はマーシャルの云ふが如く、貨幣は、確然と定める

ことが出来、容易に授受することが出来、一般に受納せられる可能性を有する交換の媒介物であるといふことを、第一義とするのである。そしてその交換の媒介、それは貨幣の第一次的原始的職能であり、又貨幣が価値の標準或は延期支拂の標準として、役立つてゐるのは、その第二次的第三次的派生的職能である⁷⁾と考へねばならぬ。此點に關してアダム・スミスは、金銀の価値の尺度たる結果として、商業の用具即ち交易の媒介となつたと云ふ舊説を翻して貨幣は交易の媒介に役立つが故に価値の尺度——価値の共通の客觀的比較の表示——となつて來たと述べ、山崎覺次郎教授も亦「交易の媒介物たる職能と価値の尺度たる職能との先後に關しては、從來論議の絶えざる所にして、是れ或は西諺の所謂鶏と鶏卵と、何れが先づ發生せるやを争ふの類に屬するが如しと雖も、貨幣の濫觴の實際的原因を今日に於いて明確に知るは殆ど不可能に屬し、演繹的に之を推定せざるべからざるに於いては、交易の媒介物たる職能を以て、原始的と爲し、価値の尺度たる職能は、之に附隨して發生せるものと爲さざるを得ず。即ち貨幣は毎に交易の一方に立ち、若干量の財貨は若干額の貨幣に當るとの比例

は毎回出現するか故に、財貨と貨幣との交易頻繁なるに及んでは財貨の価値は一般に貨幣を以て表示することとなるのである⁹⁾、とその前後に關して言を費されたのである。

今、ヘルフェリツヒの所説を媒介説となす時には、アダム・スミスの舊説は、これを尺度説と云ふことが出来る。若しこの媒介の職能を原生とし、尺度の職能を派生として、共に重視するものをば、媒介説と呼び得るならば、アダム・スミス以後の大多數の經濟學者は、皆此説を奉ずるものと考へねばならぬ。然しながら媒介の職能を充し得る可能性は、その中既に価値を計量し、その尺度となり、又進んで価値をば、蓄藏するものとして役立つて來るのである¹⁰⁾。故にジードは、貨幣を第一に交換の一般的道具であり、第二に価値の蓄藏に役立つものである。そしてより媒介の可能性を有するものは、その価値はより長い年月不變であつて、十字軍時代に地中に埋藏して置いた金銀は、當時の価値に比較して六分の五を失ふけれども他の物より多くの安全率を有してゐる、そしてそれは蓄電池の如く所有者の欲する時に使用され得るものである、又貨幣は第三にその所有者を勞役より免ぜしめる、何故ならば、古典

的樂觀派の Bastiat が既に「貨幣は、それ自身やつた所の仕事を表す」と言つてゐるやうに、貨幣は祖先がなした勞働の結果を遺傳し、自己がなしたそれを蓄藏してゐる、故にそれを支拂ふことによつて仕事を自己より免ぜしめ、賤役より解放せしめて、自由をば保障するのである、そしてその第四に貨幣は價值を測定する道具となり、それによつて料られたる價值は價格をなすのであると述べてゐる。¹¹⁾

却説、吾々は既に考究せしが如く或る物質が、貨幣となる爲には、交換の媒介物たるの可能性を必要條件とすることを否み得ない。これを反對に考へるならば、貨幣は無數の交換行爲が通る所の一つの結び目であり、その結び目となり得る性質が貨幣としての各種の職能を迸發するのであるから、貨幣の本質は、ヘルフェリッヒの如く、その職能であると考へるよりも、寧ろその可能性であると考へ直さなければならぬと思ふ。こゝに貨幣の理論は一轉せざるを得ない。

註 (1) Helfferich, Das Geld, (1923.) S. 259.

- (2) Helfferich, Das Geld, (1923.) S. 259—260.
- (3) 佐野善作博士「貨幣論」六五頁。
- (4) Helfferich, Das Geld (1903.) S. 210—231. (1923) S. 263—273. には「經濟的個の間の容易人の仲介をなすもの」又は「個人の間には價值の移轉を媒介するもの」と云つてゐる。
- (5) Wagner, Sozialökonomische Theorie des Gelds und Geldwessens, S. 119.
- (6) Menger, Handwörterbuch der Staatswissenschaft. 3 Sulb. Bd. IV. S. 601.
- (7) Marshall, Money, Credit and Commerce, Pp. 15—16.
- (8) Adam Smith, Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arms, P. 184; Wealth of Nations, Bk. I. Ch. IV.
- (9) 山崎覺次郎博士「貨幣銀行問題一斑」七頁。
- (10) Jevons, Money and the Mechanism of Exchange, P. 16.
- (11) Gide, First Principles of Political Economy, Pp. 57—63.
- (12) 土方成美教授は、「貨幣は交易の媒介物であるとなす見解は少くとも極めて漠然であるとの金

金の本質に對する理論的考察

非難を免れる事は出来まい。交易の媒介物には種々のものが存在する。汽車や汽船も確に交易の手段乃至媒介物である。」(社會學雜誌第一卷第一號五〇頁)と云はれてゐるが、Menger が Handwörterbuch der Staatswissenschaftan の第一及び第二版には Tauschmittel としてゐるのを、教授の如く誤解せられることを恐れて、第三版には、Tauschvermittel としてゐるのであつて、即ち汽車汽船の如きものは、交易手段であり、貨幣は交易の媒介物であるのに注意せられらぬ。

2

こゝにこの可能性が如何にして發生し、何によつて性質付けられて來たかを考察しなければならぬ。そして吾々は金屬説を考へ、進んで法定説を考へて見る必要がある。この金屬説の有力なる創説者として、吾々はやはりアダム・スミスをあけなければならぬ、アダム・スミスは當時全盛期にあつたマークカンチリズムに反感を抱いてゐた、¹⁾けれども又このマークカンチ

リズムによつて多大に影響されてゐたと云ふことは、否むことは出来ない。このマークカンチリズムは貨幣と貴金屬との間に區別を設けず、貨幣をば價値のシンボル (Wertsymbol) であると考へ、金銀は一國の流通的富の中で、最も確實で最も本質なる部分であり、そして生産力はこの貨幣の中に内在して居ると論じ、金銀は富である、それ故に世界中の金銀を自國に掻き集めることによつてのみ、國富を増大することか出來ると思つてゐた。

然るにアダム・スミスはこの考より一步淨化して、富は貨幣そのものではなく、それが購買し得る財貨である、そして貨幣が價値を有し、購買力を有するのは、それを構成してゐる金屬の價値によるものであつて、兌換紙幣はそれが何時にても金銀貨幣と兌換されると云ふ所にその價値があり、不換紙幣の價値は將來兌換されることがあるかも知れんと云ふ期待によるものであると考へてゐた。²⁾

このアダム・スミスの金屬説より、リカード、ミル及びマルクスの勞働價値説即ち商品説、又はケネーの使用價値説が派生して來た。³⁾この商品説は、貨幣とは他の商品と同じく商品で

あり、價値の體化したものである、それ故に甲と乙との商品の交換が行はれる相互の間に介在して、甲の商品は賣られて貨幣となり、その貨幣によつて乙の商品が買ひ取られるのである。即ちこの交換の媒介をなし得る爲には、對等の價値⁹⁾を有する必要がある、従つて交換媒介の可能性は、價値を體化してゐるといふことにあり、價値の體化は、社會的に必要なる労働時間¹⁰⁾の體化であり、そしてそれは商品でなければならぬ、唯だ貨幣が凡ての他の商品と異なる所は、他の商品に對して等價であるといふことである。そしてこの等價値であると云ふことは、凡ての財貨の商品としての價値を表す共通の尺度となることを得しめるのである。即ち商品はその交換過程に於いて貨幣へと轉化する、然しその商品は新に貨幣としてその價値を附與せられるものではなくつて、唯だ一般的に等價なる價値形態が與へられるに過ぎないのであると論ぜられる。

この商品説は、アダム・スミスが、貨幣は何人も再び賣る爲に買ふ商品であると考へ、メンガーが、貨幣は永久的商品であると述べ、リーフマンが、有形財貨の中で交換の目的に供さ

れるものは、商品である、そして貨幣は最高の意義に於いて商品であり、永久の商品であり、絶えず流通して、總ての他の財貨の交換の媒介をなすものであると論じて居る、とその趣を異にするものである。何故ならばこの三者が論述する所は、貨幣の職能に就いてであり、商品説は、貨幣が他の商品と同じく社會的に必要なる労働時間の體化であり、對等の價値を有する所に、交換媒介の可能性があると、主張するものであるからである。

故に商品説は、此點に於いて、やはり前述の金屬説に相通じてゐる。金屬説は黄金を生産するに要した労働時間の體化によつて、黄金は價値を有してゐる、そして貨幣は、それが貨幣たる前に、それ自身に於いて價値を有してゐなければならぬ、換言すれば、地金の價値が主であつて、貨幣としての價値は従である、故に又支拂の終局は正貨でなければ、決して完済されるものではないと論ずるのである。

然しながら商品は必ずしも體化せられたる労働時間に、相當する價値を有するものではない、成程それは生産者にとつて幾分主觀的にその價値感を繋いでゐるけれども、それは客觀

的にそれを現在又は將來に於いて得るに必要な労働量だけの價值、即ち客觀的社會的評價による價值を有するものと考へねばならぬ。且つ貨幣は、甲の商品と乙の商品との間に立つて、交換の媒介をなすに當つて、甲の商品或は乙の商品の價值に相當するものを、それ自らの中に所有してゐるか？、換言すれば、貨幣は商品の形式にあつて、そしてその價值は、それを造つてゐる財貨の市價であると云ふことを、是認す可きであるか？、それは大なる疑問でなければならぬ。

今茲によし金屬説の云ふが如く、支拂の終局が金貨によつてのみ完済されるとして、金貨に就いて考へても、それは前述の如く、¹¹⁾その地金はそれが表示する所の價值を完全に有してゐない、唯だ金屬秤量制の時代に於いて、それは幾分の妥當性を有してゐるが、金貨はその交換價值に於いて考へられ、地金はその使用價值に於いて考へられる。例へば黄金は美しく、そして他の金屬より幾多の優れる特長を有してゐる、それ故に地金としての黄金は、好んでそれを以つて王冠が造られ、指環、腕環、頸飾、時計、眼鏡、入齒が造られる、そして

それは地金の使用價值である、然しながらそれは金貨の有する限界效用よりも、より極度の限界效用を有してゐる。實際吾々は黄金を以つて鐵を作り、車軸を作り、レールを作ることには出来ない、然るに黄金は貨幣として、吾々が欲する總ての財貨及び労働を供給し、長い間その價值を保有することによつて、價值を有してゐるから、ジードのいふが如く、地金の價值と獨立のものであると考へなくとも、少くとも性質を異にするものであることは明である。

若し亦、吾々が紙幣を日常それが金貨と兌換さる可き可能性があると考へることなく、その上に記入せられてゐる金額を有する財貨と交換してゐるとしても、それはそれ自體に於いて決して對等の價值を有するものではない。だがそれは兌換されることによつて説明される。けれども不換紙幣に至つては、勿論それ自體に於いて、一片の鼻紙に相當する價值さいも有してゐないばかりでなく、將來何とかして兌換される事があるかも知れんと、云ふ萬一の當事によつて、それが價值付けられると云ふが如きは、餘りに牽強附會の過ぎたるものと

して、嘲笑より免れることが出来ないとするれば、金屬説は勿論、商品説も亦貨幣の本質を眞に説明し得るものではないことは明である。

この説明し得ざる所を説明し得るものとして、法定説が唱へられて來た。そして法令によつて租税の一定割合が一定の種類^の紙幣にて納付せられるやうに定められた結果、その紙幣が金銀貨幣より、より高價となることすらあつた事實によつて、その紙幣の價値は法定によるものであると考へられ、進んで貨幣とは國家が法律を以つて支拂の具なりと宣言せる法貨である^のと考へ、貨幣は國家に所屬し國家によつて統制せられる公共の器具である、そして貨幣はそれ自身に於いて價値を有する必要はない、封度や、オンスや、碼や、吋が法定によつてその起原を有すると同じく、貨幣の價値も物質その物によるのではなく、唯だ法定によるものである^のと、論ぜられるに至つたのである。

然るにこの法定説による時は、當然國家の發生せざる以前に於いて、即ち又法律が未だ慣習より分化せざる以前に於いて、貨幣の存在を許容し得ない事になるのである。だが事實は

全くこれと反對であつて、國家發生以前にその起原を有してゐるのであるから、クナップ教授は、更にこれを、支拂の要具は、貨幣概念が從屬してゐる上位概念である。そして支拂の要具とは、社會的に承認された交換財であつて、社會的に承認されたとは最初慣習により、次いで法律により、其の社會に於いて一定の用途を贏ち得ることである、と述べるに至つたのである。それ故にクナップ教授の貨幣國定説は、その名稱によつて恰も國家が法律を以つて貨幣を制定し、それによつて貨幣が流通する可能性が與へられてゐるかの如く考へられる。けれどもそれは寧ろ誤解であつて、獨逸が Sozial と云ふ言葉を好まず、或は又社會と國家とがその概念に於いて混同されてゐた所から、貨幣社會制定説とも云ふべきものを、貨幣國定説と名付けたのではないかと思ふ。何故ならば同教授は、社會的に承認されることを主眼とし、國家又は法律の發生せざる以前に於いても、慣習によつて一定の用途を贏ち得られる時には、そこに貨幣が存立し得ることを主張してゐるからである。茲にクナップ説は一轉して流通説となり得ない事はない、即ち貨幣とは社會公衆の間に自由に流通し支拂を辨濟

する方法に供せらるゝ物件であると考へられる。然しこの説は畢竟するに、貨幣として流通するから貨幣だと説明するに異なるのであつて、吾々が要求する所の説明に満足を與へるものではない。

- 註 (1) Gide, A History of Economic Doctrines, P. 83.
 (2) Wageman, Allgemeine Geldlehre, (1923) S. 13—14
 (3) Adam Smith, Wealth of Nations, PP. 404. 307—308.
 (4) Wageman, Allgemeine Geldlehre, (1923). S. 22.
 (5) Wertäquivalenten.
 (6) 労働時間と云ふよりも労働量と云ふが適當だと思ふ。
 (7) Hillerding, Das Finanzkapital, Kapital I. Die Notwendigkeit des Geldes.
 (8) Marx, Kapital, I. 4. Aufl. S. 56; Zur kritik der Politischen Oekonomie. 2. Aufl. S. 28.
 (9) 山崎覺次郎博士「貨幣問題より見たるアダム・スミス」(經濟學論、第二卷第二號、六一—七頁)。

Adam Smith, Wealth of Nations, Vol. II. P. 55; Menger; Geld. (Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 3. Aufl. Bd. IV. S. 567.); Liefmann, Grundzüge der Volkswirtschaftslehre. Bd. II. S. 103.

- (10) Chevalier, La Monnaie. P. 56.
 (11) 拙稿「金に對する一考察」(經濟及商業、第三卷第四號、六二頁)及び前章第四節三一—三三頁。
 (12) Gide, First Principles of Political Economy, P. 71.
 (13) Langhlin, The Principles of Money, P. 530. そしてそれは不換紙幣のみならず、兌換紙幣と

雖もその大部分は、その實兌換不可能である。何故ならば、現今の文明國は金貨本位であり、一九一九年一月一日現在では

英 國	七億九千八百四十五萬圓
佛 國	二十一億七千七百八十八萬圓
伊 國	三億二千七百九十萬圓
米 國	四十一億四百四十六萬圓
日 本	六億五千四百五十萬圓
合 計	九十三億三千八百二十萬圓

金の本質に對する理論的考察

である。所がこの金貨に對して出されてゐる紙幣は、露西亞や獨逸を例外として、前記の五ヶ國の合計三千九百億萬圓に達し、到底紙幣は金貨に替へ得ない運命にあることは明である。

Lock, The Nationalisation of Credit, P. 15.

- (14) Adam Smith, Wealth of nations. Vol. P. 311. より高價となつた事は、此場合必要とはしない。それは小錢の拂底の時は打歩を以つて交換せられ、小錢が餘り過多である時は、紙幣が打歩を生じて來ると同じ理由に由るものである。

- (15) 佐野善作博士「貨幣論」六六頁。

- (16) A Corder in Gold and our Money Laws, PP. 37-38.

- (17) Knapp, Staatliche Theorie des Geldes. (1921) S. 2—4 又リーフマンは、「國家はその購買力を決定しない。」と非難してゐるが、クナップは何も國家がその購買力を決定するとは論じてゐない。そしてヘルフェリッヒは、「通用方についてであつて貨幣の價值についてはない。」と云つてゐるが、通用力は直ちに價值を意味しないか？ Liefmann, Geld und Gold, S. 114—115. Helferich, Das Geld. S. 544—545.

- (18) 獨帝 William II の國語整理政策の結果、外國語より轉化せしものを排斥された當時である。
- (19) 佐野善作博士「貨幣論」六七頁。

3

前述の法定説と同じく、金屬説によつて説明し得ない所を説明せんとするものに、又債權説がある。債權説とは貨幣が社會に流通されてゐるのは、それが造られてゐる財貨そのものの價值によるものでもなく、又それが國家の法定した所の記號を有してゐるからでもない、それは全く一つの債權であり、それは手形と異つて一般に、即ち社會に對して財貨或は勞力の給付を請求し得る所の權利であると考へるものである。今こゝに勞働者があつて、一日八時間の勞働をなした報酬として四圓を受取つたとするならば、それは嘗つて、ロバート・オーウェンが、失業せる貧民を集めて新しい村を造り、その人々をして彼等自身の生活資料を産出させ、その爲になした勞働に對して勞働時間を以つて、その勞働價值を表す所の紙幣

例へば若し八時間労働をなした者には“Deliver to the Bearer Exchange Stores to the value of two Hours by Order of Robert Owen”（交換倉庫に持参する者には、ロバート・オーウンの命により二時間の価値を交付す）、と記入された、二時間の労働紙幣を四枚與へたと同じ事である。換言すれば彼労働者が資本家に自己の八時間の労働量を賣拂ふならば、その資本家から代償として、八時間の労働量を償ふに必要な生活物資を要求する権利が彼に生ずる。そしてこの権利を表すものが、即ち貸銀として受取つた四圓の貨幣である。故に彼がこの四圓の貨幣を有してゐると云ふことは、何時にても自己がなした、八時間の労働量に相當する価値の物資、又は八時間の労働量を、その貨幣をつきつける——支拂ふ——ことによつて、その資本家に請求し得る債権を、他人に譲渡し得る力を有してゐるといふことを意味してゐるのである。

斯くして人々は自己の労働量を賣り、所有せる物資を賣つて、それに對する貨幣を受取りそれを所有することによつて、その債権の所有者たることを明示するのである。そして社會

が密接なる連帶關係によつて構成されてゐる關係上、その債権は、血球の如く社會を循環しその債権は欲望を満足せしむる殆ど總てのものに對して、等価値となつて來るのである。こゝに又債務に對して貨幣を支拂ひ、それによつて、その間に相殺を行ひ、又その貨幣が支拂はれることによつて、間接に価値の分配が行はれ得るのである。故に人々が貨幣を求むると云ふことは、自己の欲望を満足し得るものを、請求し得る債権を求むることであつて、決してその貨幣を構成してゐる素材を求むるものではない。従つて貨幣の価値は、その請求し得るものの価値によつて定り、又請求權の確實と不確實とによつて、定つて來ると云ふことが出来る。金貨は銀貨に對して、よりその請求權が確實であり、銀貨は銅貨よりもより確實である、然るに兌換紙幣は金銀貨よりも、不確實であり、又不換紙幣は一層不確實である、而も尙それを所有してゐると云ふことは、債権の所有者であることを表示するものであつて、その権利が幾分の価値を繋いでゐると考へられ得るからである。そしてこの債權説は、當然法定説に代り得る合理性を有してゐるのである。それ故にそれは、社會的生産、即ち共同經

濟社會に於いてなされた生産物を、各經濟主體がその分配を請求する權利として貨幣を考へることにより、現代社會に於ける貨幣の職能をよく説明し得るものである、けれどもそれは何故に貨幣が債權を明示するものとさせられて來たかを説明し得るものではない。實際それは貨幣が既に成立し使用されて來た結果、その現象が生じ、これを債權の觀念によつて、説明し得ると云ふ迄である、故にこの債權説は又一般に適用し得るものではないと思ふ。

却説、吾々は最後に信用説を一瞥することにしよう。この信用説を極端に唱へたものに社會學者のガブリエル・タルドがある、彼は云ふ、金の價値は信仰である、實際それは相互信仰による單純なる行動に過ぎない、そしてその信仰によつて、各自はそのものに價値を信ずるのである、何故ならば、他の者がそれを信じてゐるからであると、彼一流の摸倣説によつて、他の者がそれを價値あるものとして通用してゐるから、貨幣を有してゐることが、自己の欲望を充すに最も便利であると信ぜられ、一般に深き省察をなすことなく、摸倣的に唯だ信ぜられ、慣用せられてゐるのであると考へる。若し吾々がアダム・スミスの言葉を借りて

云ふならば、世人が交換を拒絶しやうとしない、一般的に受納せられる確實性に對する信用であつて、それが金屬であらうとも、一葉の紙片であらうとも、亦それが國家によつて制定されたものでも、然らざるものでも、公分母として總ての商品を得ることが出來ると、社會一般に信ぜられてゐる、そのことである。若し又假令それが請求權であらうとも、社會の信用を失ふ時は、直ちにその請求權は消滅せざるを得ない、即ちその請求權によつて、自己の欲する時に、自己の欲する財貨或は勞働量を、請求し得るものであると信ずる、そのことによつて貨幣は存立し得るものであると考へる。¹¹⁾この點に關して山崎覺次郎博士も亦、貨幣と信用とを全然別物と爲すに於いては、貨幣殊に紙幣の價値の如きは、其の説明に苦しまざるを得ないと述べてゐられるのである。¹²⁾

然しながら信用をば貨幣の本質として考ふ可きであるか？ 即ち信用さへあればそれは貨幣として成立し得ると云ふことが出来るか？ 換言すれば、貨幣が存立するにはその素地として信用を必要とし、その信用を有せざる時には、貨幣たることを得ないとしても、その逆

は成立し得るかと思ふことに大なる疑問がある以上、貨幣の本質は單に信用であると言ひ放つことは出来ないと思ふ。何故ならば貨幣の存立に信用が基地をなしてゐると云ふことは、獨り貨幣のみに特有なる現象ではない、それは貨幣が社會制度の一つとして、社會制度の性質を分享してゐるに過ぎないのであつて、社會制度の總てがこの社會的信用の上に建設せられてゐるからである。この貨幣制度と信用との關係に就いては、既に對物信用の時代、擔保信用の時代及び對人信用の時代とに分けて述べた如く、密接なる關係を有してゐる、けれども信用それ自身が貨幣の本質であると云ふことは出来ない。故にその信用は必ず限定せられたる信用である、即ちそれは個人的信用であつてはならぬ、そしてそれは主觀的價値が實體化されて客觀性が與へられたものが貨幣である、¹⁴⁾と云はれたが如く、個人的主觀的信用が實體化されて、社會的客觀性を帯びて來たものでなければならぬ。そしてそれが實體化される爲には、托寓を必要とし、それは實際單に托寓に過ぎないのであるから、貝でも、毛羽でも、牛でも、羊でも、金でも、銀でも、一片の紙切でも差支ない譯である。又その社會的客觀性

を有する信用の中、社會の成員一般が總體的にそれと交換を拒否しないと云ふ信用であり、略言すれば、或る托寓に社會が、交換の可能性を保障してゐると云ふ、社會的信用が貨幣の本質をなすと考へねばならぬ。

以上吾々は貨幣の本質に關する學說等を略述して來た。然しながらこれ等の學說等は、社會制度殊に經濟制度が進化し、貨幣制度もこれに準じて、變化して來たにも拘らず、それ等の一局部に着眼し、或はそれを一括して論斷しやうと云ふ處に、誤解と無理とを含んでゐると考へねばならぬ。従つて貨幣の概念又はその職能の變遷と分化とによつて、本來の使命即ち社會制度の一つとしての使命を裏切り、幾多社會問題の素因をなしてゐるのである、吾々は更にこの方面にその考究の眸を向けねばならぬ。

註 (1) Macleod, The Theory of Credit. Vol. I. P. 75

(2) 河上肇博士「社會問題研究」第二十七冊、ロバート・オウエン(彼れの人物、思想。及び事業) 九頁。

- (3) Schumpeter, Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige,—Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. (1917—1918). 44. Pt. 3. Heft. S. 642.
- (4) Bendixen, Geld und Kapital, Vorwort. (共同體の爲になした給付であり、又この共同體から反對給付を受けると云ふのは、社會の連體關係があり、個人は個人として孤立してゐないからである)。
- (5) Hawtrej, Currency and Credit, P. 18.
- (6) Schumpeter, Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige. S. 643.
- (7) Elster, Die Seele des Geldes. S. 95.
- (8) Gabriel Tarde.
- (9) Walker, Money, P. 24.
- (10) Eppich, Geld. P. 80.
- (11) Macleod, The Theory and Practice of Banking, Vol. I. P. 35.
- (12) 山崎覺次郎博士「貨幣銀行問題一斑」四六頁。

(13) 拙稿「金に對する一考察」(經濟及商業第三卷第四號六一—六三頁。)及び前章五節三四—三六頁。

(14) Steinberg, Das Geldkapital. S. 9.

4

由來人類はその初め環境に適應し、その生活を保障し、更にその生活を發展せしむる爲に殆どその適應の過程が社會制度を形成しつゝあるといふことを、意識することなしに活動してゐるのである。然し乍らその活動の繰返しは自ら制度をなし、進んで組織を構築して來る。そしてそれは永き間、成るがまゝに放置せられ、行くがまゝに放任せられてゐるのを常とする。けれどもその制度なり組織なりが、次第に分化して、遂にその隋性によつて過分化に陥り、又はその極、分化の可能性を失ふて停滯し、そこに硬化を來し頽廢を生じて來るのである。この硬化と頽廢との現象によつて、曾つては社會生活に缺く可からざるものであつ

た、その制度は一變して、反社會的のものとなり、社會生活の能率を阻害し、社會的不安を誘發せしめて、社會苦の素因をなして來る。こゝに人々はその苦痛を通じて、漸くその制度の存在を明確に意識し、如何にして又何故に斯くの如き制度が成立して來たか？ それは如何なる作用を有し、その本質は何であるか？ そして何故にそれが當初の目的に添はざるものに變形し變質したか？ といふ疑問を生じ、その事象をば合理的に説明しやうと試みて來る、そこにこの制度をば一貫して説明し得る所の、理論を求めんとするのである。それ故に吾々が、貨幣に就いてその理論を求めたと云ふことは、貨幣制度が既に社會苦の素因をなし、それによつて惹起されてゐる社會問題があるといふことを、直にその裏面に於いて物語るものである。

却説、吾々が既に述べた如く、貨幣は物と物との交換を圓滑ならしむる爲の媒介物としてその最初の職能を見出して來たのである。そしてそれはやがて、その交換過程に於いて、繼續的に絶えず、他の幾多の商品と、價値の相互比較を繰返すことによつて、共通的價値測定

の尺度として考へられ、商品はこの貨幣に轉化されて、そこに普遍的等價の形態を取り、それによつて社會的の價値標定を獲得して來るのである。これをその反面から考へる時は、ベンディックセンの如く、幾多の財貨の價格が、貨幣となる財貨に反射し、その反射が集積されて作つた所の觀念が、即ち貨幣價値となるのである。そしてそれによつて凡ての財貨の價格が表現せられ、計量せられる所の抽象的價値單位を生じ、貨幣概念の基礎と考へられて來るのである。斯くして貨幣は商品生産の社會關係に於いて、個々の交換過程が必ず通過し密集する所の一つの結び目となり、總ての價値は、皆この貨幣價値單位によつて表價されて來るのである。故に又ジンメルの如く、貨幣は財貨の質的價値を、量的價値に置換するものであるとも考へられる。そしてそれは、科學的研究法の示してゐる特徴の一つに一致するのである。何故ならば、科學が宇宙の現象——それが自然現象であつても、人的現象であつても——を考察するには、その現象に特有なる個性的方面を閑却して、唯だ普遍的共通的方面のみ尊重し、従つて一切の性質をば數量によつて表現し性質に於いて示されたる相互の差異

をば數量上の差等に置換して、比較研究せんとする傾向を有してゐるからである。

今、吾々が、現代社會に於ける貨幣の役目を考察して見る時に、貨幣は又その價值を定量化する尺度であり、總ての事象、總ての財貨、總ての人々をば、悉く貨幣の數量によつて計算し、何錢何厘によつて評價し、その個性も、その特質も、その人格も、一律一様に貨幣價值を以て表し、そして若しそこに交換價值を以つて、表し難きものがあるならば、これを看過することに、決して吝ではないのである。³⁾

こゝに看過されたる價值に對する不平が起り得るではないか？ 又その定性の結果を數量を以つて置換する際に、そこに完全なる置換を期し得るであらうか？ それは到底望むべきでない、それ故に若し貨幣經濟の高調に伴ふて、貨幣萬能觀の擴延する時には、それによつて必然、その弊と不平とを大にして來ずにはゐない、そして今やその弊とその不平とを鳴らすべきその時であると云ふことに就いては、誰しも異論を唱ひ得ないと思ふ。

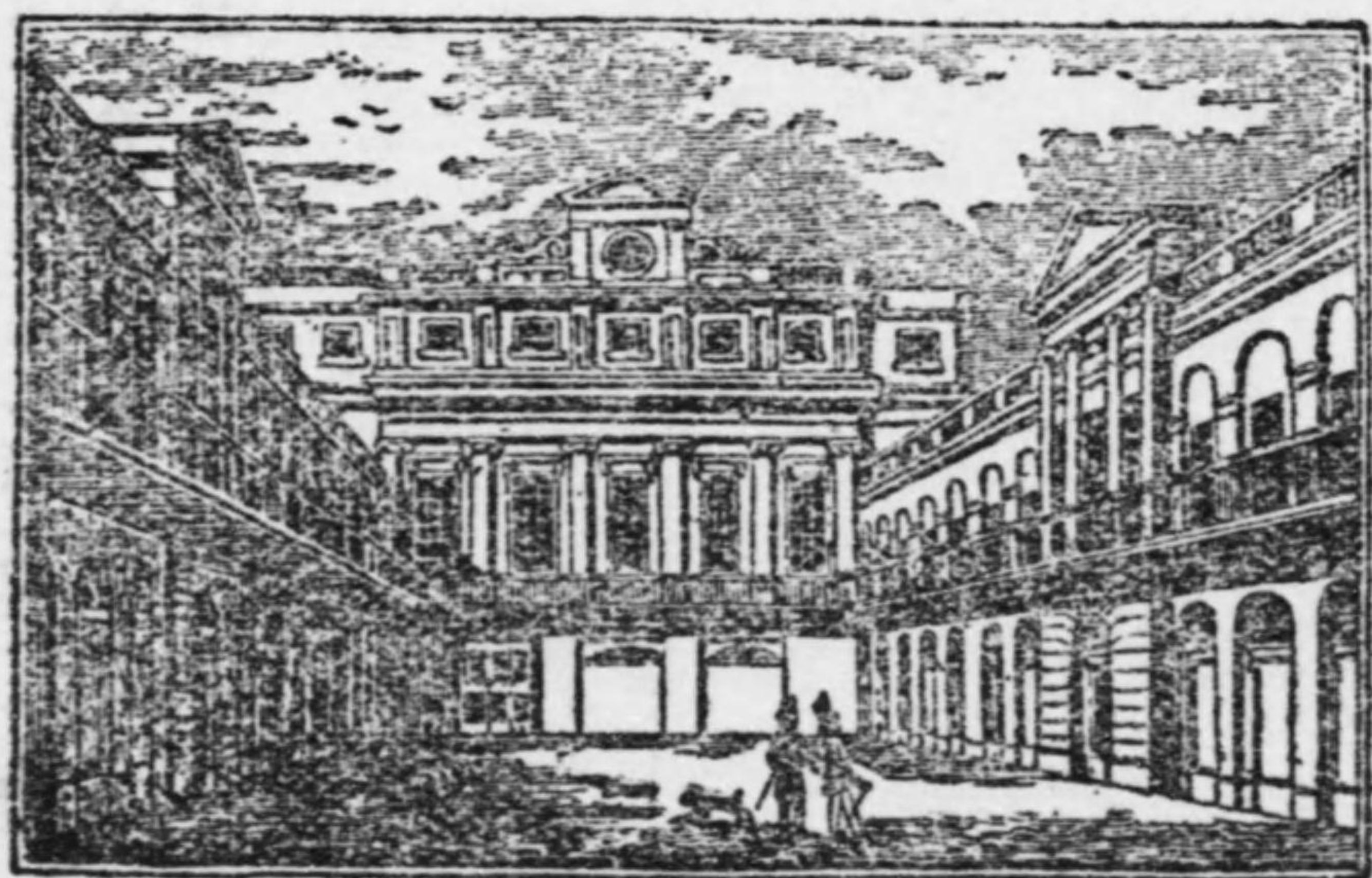
註 (1) Gettell, Introduction to Political Science, Pp. 71—72.

- (2) 拙稿「金に對する一考察」(1) (經濟及商業第三卷第三號三七—三九頁)
- (3) Laughlin, Money and Prices, P. 3; Jevons, Money and The Mechanism of Exchange, P. 14; Marx, Kapital, I. S. 56; Zur Kritik der Politischen Ökonomie, S. 28.
- (4) Bendixen, Geld und Kapital, S. 20.
- (5) Cassel, Theoretische Sozialökonomie, S. 340.
- (6) Heflerding, Das Finanzkapital, Kap. I.
- (7) Simmel, Philosophie des Geld, S. 294.
- (8) Goldstein, Wandlungen: in der Philosophie der Gegenwart, S. 94. Sombart, Der Moderne Kapitalismus, Kap. 15.



— 第二篇 —

究研の説悪罪幣貨



オウインが倫敦のキングス十字街
に近キケライス・イン通に建てし
國民公正労働交換所の中央に立つ
て左右兩端を見たるもの

第一章 オウエン及びその一派の貨幣觀

1

吾々は「金」に對して、即ち貨幣制度に對して、眞面目に猛烈なる不信任案を投げつけ、その罪惡を非難した者として、先づオウエンとブルードンを考へなければならぬ。彼等は單にその理論に於いてそれを主張したのみではなく、その改革の實行をば企圖した者であつたからである。そしてオウエンの運動は、一八〇〇年前後即ちブルードンの生れ出づるに先立つこと約十年であつた、彼はその自叙傳に於いて述べてゐるが如く¹⁾一八〇〇年の一月、ニュー・ラナック紡績會社の支配人となり、彼の言葉そのままを以つてするならば、「その政治に取り掛つた」のであつた。

當時のニュー・ラナックの工場は、ラナックの町から一哩程離れた、クライド河の溪谷に水車

オウエン及びその一派の貨幣觀

を利用する爲に建てられてゐた——現在でもそれは工場と職工の長屋だけであるが——そこには約三千人の職工が働いてゐた。そしてその中約五六百人は六七歳から十二三歳の少年労働者であり、當時の風習に従つてその少年等は、グラスゴーやエジンバラの貧民窟から賣られて來た者であるか、或は各所の孤兒院から賣渡された者であつた。彼等は男も女も子供も共に不潔な薄暗い部屋に雜居せしめられて、豚の如き生活を送り、朝の六時から夜の七八時まで、奴隸の如く鐵の鞭で打たれたり、或は減食で威嚇されたりして、虐使されてゐた。だから彼等の生活は絶望と自棄とにすぎみ、無智と自暴とに墮し、泥酔と喧嘩と、泥棒と偽言と、残忍と怠惰と、不平と饒舌と、放埒と淫猥とが、クライド河の瀧壺の如くその渦を巻いてゐたのであつた。而も彼等の總ては、資本家に對して極度の偏見と反感とを有してゐた、故に若し彼等の爲に新なる施設がなされるならば、それは唯資本家がその金儲をなす爲に過ぎないと考へ、寧ろその改革に反抗するのを常としてゐたのであつた。

この工場に對して彼オーウェンは如何なる見地により、即ち如何なる人生觀によつて、そ

の政治に取り掛つたか？ 彼は考へた、人々が人々を支配するには、二つの方法があると、そしてその一つは總ての人々を惡魔の化身であるかの如く考へ、その者が犯す所の罪過をば如何にして發見するかに努め、その告發に焦り進んではその投獄とその追放とに狂奔するといふことである。その結果、社會は常に不安に襲はれ、而もそれは相互の敵視と反抗との停止することなき連續を以つて、酬いらねばならない。然るに他の方法は、優境主義或は優境主義(Eutechnism)によるものであつて、吾々人間の性質は、二つの環境から化成された結果である、そしてこの二つの環境とは、社會と神又は自然である、今迄人々は自分の力で自分自身の性質や、人格を化成したと考へてゐた、けれどもそれは大なる誤解であつて、人々の性質や人格は、彼が如何なる境遇に生れ、如何なる生活をなし、如何なる仕事をやつてゐるかによつて化成されて來る、實際低劣なる生活條件は低劣なる人物を生み、善良なる境遇は、善良なる品性を創造する、それ故に吾々は先づその環境、その境遇、その雰圍氣を、改造することによつてのみ、人間の性質と品性とを、改善することが出来るのである、若し茲

に罪惡に浸潤してゐる人々があるならば、それは、その人々にとつて、過去の社會と自然とが、宜しきを得なかつた事の總果であらねばならぬと考へるのである。斯く考へて來る時にその罪惡は、主として社會と自然とが、その責を負はねばならなくなる、然しながらそこに又吾々は、より惡き環境を、より善き環境と置換することによつて、その人々の性質と品性を全く造りかへる可能性を認め得ることになるのである。そして人類の幸福は、どうしても人々の性質が、より善く改造せられ、従つて社會が又より善くなり、より楽しくなり、人々をその罪惡から救済して、理智と正義とによつて充されたる合理的判斷に従つて、動くものと變性し、虚偽と詭計とにより、又腕力と恐怖とによる強制から全く自由にされて、人々がその生活を遂げ得るやうにすることによつて招徠されるのである。

斯くの如く思考して來たオーウェンは、先づ人々の環境を改造することを目論み、そしてこの人間性に關する根本原理を證明し、世人の蒙を啓く爲に家長的温情主義によつて、ニコ・ラナックの紡績工場をば經營し始めたのであつた。而も彼はこの環境の及ぼす影響が、

比較的無智であり、所動的である労働者階級に對して、最もその威力を振ふてゐると考へ、そしてこの環境を改善する爲には、先づ富の分配を豊にすることではなければならぬと、その歸結を見出して來たのである。若しこゝに富を有せざる者があるならば、其者の運命は貧窮でなければならぬ、貧窮、それは單にそれ自身に於いて既に劣惡なる境遇であり、無智と不健康と、臆病とその他雑多の罪惡が、それを母體として派生して來るものである。それ故に、彼は滿腔の同情を以つて、この劣惡なる境遇より、彼等労働者を解放し、善良なる品性を陶冶せしめんとするならば、どうしても富の分配の公平を期せねばならぬと信じたのであつた。再言するならば、彼は一八二〇年以前に於いて、既に社會の苦惡は、品性陶冶の缺陷と富の不正なる分配とによるものであり、この富の不正なる分配は、交換の形式及び貨幣制度の缺陷に起因するものであることに氣附いてゐたのである。

然しながらこの問題に對して吾々は、彼がジョン・ベーラー及びトーマス・アットウッドより思想的に大なる影響を受けてゐたと云ふことに就いて、先づ一言する必要があると思

よ。

- 註 (1) Owen, *The Life of Robert Owen*, Vol., I, P. 60.
- (2) Euthenism とは、Euthenics の命ずるところにより、人々の環境を改良することにより、優秀なる人々を養成せんとし、Eutechnism とは、Eutechnics の命ずるところにより、活動形式や職業を改良することにより、優秀なる人々に化成せんとする主義である。
- (3) Owen, *Essays on the Formation of Character*, (1813—1815) *The Life of Robert Owen*, Vol., I, Pp. 257—332.
- (4) 河上肇博士「社會問題研究」六五〇頁。
- (5) Bogardus, *A History of Social Thought*, P. 23.
- (6) Owen, *Observations on the Effect of the Manufacturing System; Report on the Poor; Memorial to the Allied Powers; Report to the County of Lanark.*
- (7) Max Beer, *History of British Socialism*, Vol., I, P. 174.
- (8) John Beller (1655—1725); Thomas Attwood (1783—1856).

2

ジョン・ベラーは、共産主義的貧民法の改革者として有名である。彼は一六九六年に「總ての有用なる職業及び耕作の産業大學を建設する提案」(Proposals for Raising a Colledge of Industry of all Useful Trades and Husbandry) と題するパンフレットを出したのである。そしてそれは、一種の理想郷をば建設せんとする提唱である。

彼は資本家を公然とは非難しない、唯だ彼は資本家に、犯罪と窮困と怠惰と淫蕩との渦中に悶え居る、貧窮労働者の生活状態に、憐憫の情を催し、進んでその状態を改善する爲めに悦んで協働的農業植民地たる莊園を建設するの企圖に賛同し、且つその爲に資金を投與せんことを求めたのである。¹⁾この點に於いては、後佛蘭西のフーリエが「吾れ若し百萬法あらば!!」と叫び、その理想を實驗せんが爲に、理想社會としての労働村を建設せんとした、それに似通ふてゐるのである。

そしてその莊園たるや、勿論貧窮労働者の協働により、割よき仕事をなすことによつて、貧窮者の生活を容易にし、且向上せしめ、若者どもに優良なる教育を與へ、而も亦資本家に高率なる利子をば支拂はんとする自給自足式の共働社會である。それ故に莊園は、農耕に必要なる労働を果すに適切なる人々を選択し、その三百人を以つて一園を構成し、その一園に對して必要な土地其他の設備、價格にして概算一萬八千磅をば、株式によつて募集し、その政治は出資額に應じてなす投票によつて、執行せられるのである。それ故にその外見よりするならば、その政治は投資者の自由に處理せられて、初め彼ペーラーが考へた如く、貧窮者の生活向上及びその子弟の教育をなす事が、不可能であるかの如く考へられる。然しながら、彼は莊園中の二百人にて、全員三百人の衣食住其他の必需品を生産する事が出来、残り百人にて、投資者に分配する利潤を作り出すものと定め、従つてその職業の配置をも、三人の裁縫師、一人のパン焼き、一人の醸造者、四人の料理人、六人の保姆、三人の鋤造り、三人の收畜者、二十人のリンネル織り、二十人の羊毛紡ぎ及び梳綿者と、それぞれ相規定し

その中心地に協働手工場を設け、斯くして生産能率の増昇を計畫したのである。又その投資者が若し希望するならば、その利潤を受取る代りに、莊園内に住み、「共同の食物」によつて生活する事が出来る、そして貧窮者は、そこに働き、そこに富み、そこに必要な總ての物品を享受し、病氣となれる場合には、親切なる療養を受け、又両親を失ひて孤兒となれる者には教育を與へ、幾多の災惡から保育して、そこに完成せる一成員を得んことを期してゐるのである。

この自給自足式の莊園に於ける經濟組織に就いて、注目し値するものは、價値の尺度として、貨幣を排斥してゐることではなからぬ。彼は次の如く考へてゐる、總て必要なものの價値の尺度は、労働即ち労働時間であつて、貨幣ではない、成程貨幣は便利である、けれどもそれは人々の間に、信用の缺乏してゐる時のみ必要である抵當物であつて、而もそれは幾多の禍害を伴ひ、人々をして不正なる拜金宗に、墮落せしむる危険性を有してゐる。若し茲に資本家があつて、假令土地と耕作具とを所有してゐても貨幣を失ふ時には、一人の

労働者と雖もその爲に雇傭することが出来ない、そして土地と器具と労働とが、眞の富であるにも拘らず、それ等が貨幣によつて結び附けられなければ、何等の生産をもそこに爲し得ぬのである。³⁾

今、經濟界に於ける貨幣の職能を、人體に比して考へるならば、それは蹇者の使用する松葉杖でなければならぬ。然しこの松葉杖たるや、完全なる體格を備へてゐる者にとつては、迷惑至極の代物たらざるを得ない、それ故にこの莊園の如く、個人の利益と公共の利益とが一致する社會、即ち完全なる社會に於いては、殆ど貨幣はその用途を有してゐない。又彼は進んで考へた、若し資本家が、貧民と共に労働しないならば、彼等は常に他人の労働の結果によつて生活するの外、途を有してゐない、例へば地主は小作人の労働の結果によつて生活し、工場主は職工の労働より、その生計費を捻出⁴⁾する、それ故に労働者のなす労働は、資本家の使用する貨幣の源泉であり、それによつて彼等の華麗なる生活を、可能ならしめてゐるのである。⁵⁾ 若し資本家が、この因果關係に考へ及ぶならば、貧窮労働者の生活狀態を、最も

健全なる、最も有利なる、最も道徳的なるものに改良して、その社會的地位の向上を計り、そしてその労働の能率を高め得るならば、それによつて自ら自己の利潤を増昇し得ることに氣付き、進んでこの企圖の實行に努力するであらうと信じてゐたのである。

この所説よりオーウェンは次の如く考へて來た、若し吾々の理想とする社會が出現し得るならば、貨幣は大なる役目を有するものではない、のみならずそれは幾多の災厄を人生に齎し、資本家が自ら労働することなしに、即ち眞の富を生産することなしに、労働者の生産せしものによつて、豪華なる生活をなし得ると言ふことは、その間に介在する貨幣制度によつて、容易なる搾取が行はれてゐるからである。⁶⁾ そこに吾々は貨幣制度の最大なる缺陷を見出さねばならぬと。

それ故に彼オーウェンが社會の苦惡の素因の一つとして、貨幣制度に注目したと言ふことは、彼がニュー・ラナークの協働的工場經營に關して、「私はこれ等の原理を理論的に、組合せたといふことに就いて、決して先取特權を要求しない。私の知る範圍に於いては、ジョー

ン・ペーラーによつて、既に一六九六年に提唱され、それを採用し、實行することが巧に勸誘されてゐたからである」と述べてゐる所によつて知られてゐると同じく、又先輩ジョーン・ペーラーに負ふ所が大であると言はねばならぬ。

- 註 (1) Max Beer, *History of British Socialism*, P. 75.
 (2) Podmore, *Robert Owen*, PP. 233—234.
 (3) Max Beer, *ibid.*, P. 175.
 (4) John Beller, *Proposals for Raising a Colledge of Industry of all Useful Trades und Husbandry*, P. 35.
 (5) John Beller, *ibid.*, P. 10.
 (6) Owen, *Life of Robert Owen*, Vol. I, 164.
 (7) Podmore *ibid.*, P. 133.

3

次に吾々は、トーマス・アットウッドの貨幣制度に關する思想をたづね、彼とオーウェンとの思想的關係を辿つて見ようと思ふ。彼はバーミンガムの銀行家の息子に生れ、一八一六年より一八一九年の間に、貨幣制度改革に關する幾多のパンフレットを出したのである。恰も一八一六年は英國に於いて金が遂に銀に對して勝を占めた年であつて、又従つて貨幣制度に就いて、困難なる雜多の問題が発生した年である。この年に彼が出したパンフレットは、「現代の苦痛に對する思想或は救濟手段」(The Remedy, or Thoughts on the Present Distress.) であり、越えて一八一七年には、「貨幣製造に關してバンセットアルト氏に與へたる手紙」(A Letter to Mr. Vansittart on the Creation of Money.) を、一八一九年には更に「金融、人口及び貧窮に關する觀察」(Observation on Currency, Population and Pauperism) と題する小冊子を出したのである¹⁾。そしてこれ等のパンフレットによつて表されてゐる所の貨幣に關する

彼の理論は、大體次の如く概観することが出来ると思ふ。

彼は總ての富は、農業、工業及び商業に於ける労働からやつて来る、そしてこの總ての労働は、人口からやつて来るものと考へた。従つてこの人口の増加に伴ふて生活必需品は増大し、社會の資源及び働きはその必要を満足する、故に人口の増加は財貨及び生産力の増殖を意味してゐなければならぬ、そしてこの進歩は決してその極限を有してゐない。然しながら労働者の雇備と、財貨の生産とは、唯だ流通性を有し、媒介性を有してゐる貨幣の作用を借りることによつてのみ可能である。それ故に貨幣の發明は、社會の進歩に對して、他の如何なる者と雖も、企及し能はざる貢獻を致したと言はねばならない、何故ならばそれは労働を分ち、分業をなすことを容易にした。そしてその分業はアダム・スミスの言ふが如く、生産の量と質とを増進し、他の總ての發明と改良とを誘導し、刺戟して來たのである。

今、上述の關係より推考する時に、人口の増加は、貨幣の増量を必要とし、若しこの兩者がその均衡を失ひ、人口の過剰を來した時には、貨幣は逼迫の狀況を呈し、失業者は續出し

商品は停滯してその結果社會は不景氣と生活難とによつて、壓倒せしめられる。それ故に社會が好都合にやつて行く爲には、資本が容易に産業へと流通し、容易に生産へと消費されねばならぬ、そしてこの容易さを保障するといふことは、どうしても貨幣を適當の數量だけ、保有するのみではなく、人口の増加につれ、富と労働との増大につれて、その貨幣を増量するに充分なる弾力性を、具備せしむるでなければならぬ。³⁾

却説、政府の主要なる職責は、社會の幸福と安寧との増進にあると考へられてゐるにも拘らず、政府の有する通貨は、その弾力性を有してゐない、寧ろその弾力性の代りに化石性を有し、限定と抑壓との首架と足架とに、苦しむの矛盾より、未だ解放されざるの狀況を呈してゐるのである。何故ならば黄金は、英國内に於いて豊富に産出しない、そこに生産に従事する人口の増殖するに伴ふて、必要となり來る貨幣の増量を、何等の故障なく、補足し得ない原因がある。實際黄金は、その産地を海外に於いて有し、容易に増量をなし得ないのみならず、その價額の動搖昂低は、一つに産出國の統制權内に屬し、吾々の如何ともなし得る所

に屬してゐない。茲に吾々が人口の過殖により、金融の逼迫によつて禍され、人口の増殖を絞殺し、産業の不振を醸化し、貿易の凋落を招徠して、遂には複雑にして且つ大なる災厄となり、社會を困惑し窒息せしめて來るのである。⁹⁾

又他方に於いては、英國の産業革命とナポレオン戦争との結果によつて、或は政府のなす補助金の増額農工業の擴張資金、又は戦費の過大により、従つて貴金屬の枯渴を來し、爲に一七九七年には正貨の支出を停止して、紙幣を發行し、⁵⁾その發行高の潤澤となるにつれて産業の隆昌と交易の敏活とを致し、労働者階級の平穩なる生活を造り與へて來たのである。然るに政府が、やがて正貨支拂を復活するや、再び總ての事業は澁滞して、社會全般に亘る不景氣熱を煽動するに至つたのである。⁶⁾殊にそれは一八一九年以後、即ちピール法令⁷⁾の行はれたる以後に於いて、甚だしきものがあることによつて、その災厄は殆ど總べて、ロード・リーベルプール及びサー・ロバート・ピール等によつて案出された、金貨を以つて法定支拂の具となすといふ、法令に起因せねばならぬと、アットウッドは考へ、進んで英國は、ピール

法令の行はれてゐる以上、決して繁榮しないと、信じたのであつた。

これによつてこれを觀る時に、英國を繁榮せしめんとするならば、その國民の生産力を基礎として、紙幣を發行せねばならない、そして假にも金本位制を取ると言ふことは、社會といふ金字塔を倒にして、その頂丈にてそれを立たしむると同等なる、危険を伴ふ所の冒險であらねばならぬ。⁸⁾

加之、法定支拂の具として、金貨が指定せられると言ふことは、農夫にとつても、借財人にとつても、又は納税者にとつても、必然なる物價の甚だしき下落によつて不利を招き、これと反對にナポレオン戦争、當時の物價騰貴せる時代より繼續して、請負をなし、或は公債私債を有してゐる者にとつては、不當なる利得を、意識せざる間に、贏ち得せしめられるのである。⁹⁾故に吾々は、吾々の政治的經濟的肉體に纏り附いてゐる黄金の鎖を寸斷し、金融をより自由にし、より容易にせねばならない、と彼は高調して來たのである。¹⁰⁾

この高調は、オーウェンに多大の影響を與へたのみならず、後節に述べる所のジョーン・グ

レーの貨幣改革説にも、その反影を投與したのである。¹¹⁾吾々は節を改めて、ジョン・ベラー
ー及びトーマス・アットウッドの學説並に一八二六年の金本位制令、一八一九年の金貨法定支
拂令と、それに伴ふて生ぜる社會的變動が、オーウェンの腦裡に如何なる印象を與へて來たか
を、考へて看やうと思ふ。

註 (1) Max Beer, *History of British Socialism*, Vol. P. 157.

(2) Adam Smith, *The Wealth of Nations*, P. 13.

(3) Max Beer, *ibid.*, Vol. P. 157.

(4) Attwood, *The Remedy, or Thoughts on The Present Distress*, PP. 7-10.

(5) Max Beer, *ibid.*, Vol. I. P. 100.

(6) Attwood, *A Letter to Mr. Vansittart on The Creation of Money*, P. 5.

(7) *Peel's Act* 14 Lord Liverpool, Sir Robert Peel 等の案出によつて一八一九年に出された法
令である。

(8) Attwood, *Observations on Currency, Population, and Pauperism*, P. 21.

(9) J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, B. III. Chap. 13. § 4.

(10) Podmore, Robert Owen, PP. 404, 430, 458.

(11) Max Beer, *Allgemeine Geschichte des Sozialismus*, Teil III. S. 80-82.

4

英國に起つた産業革命は、人類社會のなした産業革命の中で殆ど最初の經驗でもあり、且
模範的のものであつた、そしてそれによつて英國社會の富は、總體として急激に増大した。
クロボトキンのいふが如く、人類は富んで來た、未だ曾つて經驗した事のない程に富んで來
た、野に於ける一片の土塊も、路傍の小石も人々の汗と膏とによつて、悉く資本化された、
といふ感じを痛切にして來たのであつた。けれども財産の様式と不正なる金の流れ方とによ
つて、餘剰生産となり、それより生ずる價值の搾取となり、公平ならざる分配となり、その
結果は社會の一小部分にその富を偏積し、そこに大資本を蒐藏するブルジョア階級を、層

化して來るのである。然るにこれと反對に、又必然的に社會の他の大部分は、その大資本によつて壓倒せられ、眩惑せしめられて、プロレタリアの低層に墮ち、こゝに近世的二大階級の對立をなすに至つたのである。そして前者は豪奢の生活と徒食徒事を唯だ能事となしてゐるに反して、後者は恰も人生の苦惡を象徴するが如き、苦役と飢渴との裡に終生し、從つて自暴自棄に流れ、酔を買ひ、淫を嚮き、進んで犯罪に走り、その慘狀到底默視するに堪へざるものとなつたのである。斯くしてそれは畢竟全體社會の各種各方面に、幾多の疾患を續出して、その健全さを弱めて來た、こゝに又オーウェンをして、社會改革の運動に志さしめたる最初の刺戟が、見出されねばならぬ。

却説、吾々は彼オーウェンの涙に潤ひたる眸が、如何に鋭く社會苦の奥底へと放たれ、如何に烈しく社會苦の巢窟へと注がれたかを考へる。彼は「ラナーク郡の報告」(Report of the County of Lanark)の中に、概略次の如く述べてゐる。³⁾

未だ幾多の機械が發明されなかつた十八世紀以前に於いてさへも、人々の勞働は、人々を

充分に養ひ得て餘りがあつた、然るに十九世紀に入つてから、幾多の大發明が續出して、生産力は爲に少くとも五十倍から百倍まで、増大して來たにも拘らず、人々はその食に飢ゑその衣に凍えねばならぬ有様となつて來た。これによつてこれを考へる時に、その貧窮は、富の缺乏してゐる爲でもなければ又生産が過少である爲でもなく生産されたる富の流通そのものに、障礙が發見されねばならない、若し一言を以つてするならば、その原因は、分配の機制の中に、見出されねばならぬ。

今、文明諸國に於ける分配の機制を見るならば、それは最早や物々交換の如く、單純なる過程ではなくなつて、その過程の中に間接的媒介物が誘入せられ、そしてその間接的媒介が、價値の尺度となつて來た、——他の言葉を以つてするならば、それは貨幣である。然し貨幣は尺度として不完全であり、且富の停滯する眞の原因であり、斯くして豊富なる財貨の中に在つて、而も多くの人々が必然的貧困に、煩されねばならぬといふが如き、奇觀を生ぜしめるのである。

何故ならばそれは一七九七年、當時の政府當局が、より弾性の紙幣を以つて、よく金銀貨に代用せし時に發見した如く、金銀は他の商品を測定する尺度として、全く不安定であり、尙又交換の媒介物として、馬鹿らしき程度にまで不適當である。そして假令それは、銀行兌換券によつて、その不足額を補足されてゐるとしても、要するに姑息的方策たるの譏を免れない。

故に吾々が社會の苦惡を改善しやうとするならば、その改善策は一層根本的であり、又過激的でなければならぬ。そしてそれは、先づ第一に價値の尺度を變更することである。この變更は必ず「價値の自然的尺度は、——原則として、——人間の勞働、或は人間の筋肉と智能との合成力によつて、呼起されたる行爲である」といふ原理を奉じ、従つて總ての富、總ての國家的繁榮は、その原因をこの勞働に有するものと考へねばならない。

實際金銀貨は總ての財貨の本質的個性的價値を、人巧的普遍的の價値に置き換へる。そしてそれによつて詐欺的商業を幫助し、投機と空相場とを煽動し、結局、物質的に社會の一般

的改善を澁滞せしめるのである。それ故に吾々は、機械力を計るに「呎封度」或は「馬力」を用ゆる如く、人間の勞働にも一定の單位を定め、その單位によつて總ての商品の價格を表し、それ等を生産するに必要とした人間の勞働の眞實なる分量と、一致せしめなければならぬ。

若し吾々が、この簡單にして自然的なる方法を、採用することが出来るならば、文明國社會が現今患されてゐる總ての苦惡を遠ざけ、且今迄無定見極る市場の評價に委してゐた人間の勞働に、新なる權威を與へ、物價の動搖を防ぎ、總ての商業的制限を廢除して、市場の公開を實現せしめ得るのである。又吾々はそれのみならず事務を圓滑にし、進んで交易通商より總ての不徳を消滅せしめ、富をして水の如く、必ずその水平を保たしめることが出来るのである。

斯く考察を續けて來たオーウェンは、こゝにその貨幣を必要としない經濟組織を考察するか、又その價値の自然的尺度を確立するか、の必要に迫られて來た、前者に對しては、彼は協調村の建設を考へ、後者に對しては、勞働紙幣の發行を考へたのであつた。

先づ協調村の思想は、ジョーン・ペーラーの「産業大學」の思想であり、若しその人々が賢明なる指導者を得て労働をなすならば、彼等は過勞に苦しむことなくして、充分に彼等の生活に必要な物質を生産することが出来る、そしてその村の人員は三百人を以つて最少限度となし、一千人を以つて最大限度とする。勿論、その村の人々には老若男女がある、けれどもその生産物の餘利は、子供と老人と疾病者とを、その村の共同倉庫から養ふて餘りある。斯くして個人の利益と村の利益とが全く一致するならば、そこには私有財産の必要もなければ、又貨幣の必要も存在しないと論ずるのである。單に彼はそれを論ずるばかりではなく、その計畫をば實驗に訴へて證據立てんとしたのあつた。當時米國インディアナ州のウエーバッシュ河の流域に、デューヂ・クラブを中心とする獨逸基督教徒の共產村であつた。オーウェンは一八二四年十二月にその村を實地に視察し、翌年四月三萬磅を出して、その三千エーカーの土地と建物とを買収し、それをニュー・ハアモニーと名づけたのであつた。彼はその村に住む人々をば募集し、九百の同志と共に十月よりその村の生活を始めたのであつた。彼はその村を以

つて個人主義的組織より社會主義的組織へと變革する爲の手段であり、假りの宿りであるとなし、進んでこの共產村の人々は、一つの家族に屬し、その職業の如何によつて尊敬され或は輕蔑されてはならない。又彼等は出來得る限り同様の食物と衣服と教育と住宅と家財とを持ち、最上の勤勞をば村の福祉の爲に致すべきである、と規定したのであつた。そしてその職業は、農業、工業、文學と科學と教育、家庭經濟、一般經濟、商業の六つの部門に分れ、その部門は更に各種の職業に細分され、その一つの職業より一人の監督を選出し、監督はその中より四人の大監督を互選し、執行會議によつてその政治と産業とがなされたのであつた。この共產村は一時有望であり、理想に近づいてゐた、けれども人々の好奇心が薄らいで來るにつれて、彼等はその多くの時間をダンスと音楽と珈琲と茶とに費し、オーウェンの全世界改造の礎石は遂に砂上の樓閣の如く、僅に二ヶ年九ヶ月にして覆滅されて了つたのであつた。

斯くして米國より歸り來つた彼は、第二案たる労働紙幣を一八三二年より一八三四年に亘

つて、彼が管理してゐた所の工業職工組合より發行し、可成り廣き範圍に亘つて流用せられたのである。例へば今労働者が八時間の労働に従事したならば、その労働者は二時間の労働紙幣を平均四枚受取ることが出来る。そしてその労働紙幣によつて、必要とする財貨を、その總量に於いて生産に費されたる労働の八時間分だけを、買取ることが出来るのである。

然るにこの労働紙幣案は、一面に於いて眞理らしきものを含んでゐた。そしてそれによつて彼が狙つてゐた所の不勞所得を、排除し得るが如く考へられた。この不勞所得の排除は、不正なる分配の矯正によつて達成せられ、この不正なる分配は交換に際して行はれ、殊にその交換の媒介物及び價値の尺度の不完全によつて、その容易さを増進する。然るに前にも述べた如く、總ての富は労働と知識とより生じ、その労働と知識とは、一般にそれに従事した時間の割合に準じて償はれる。故にこの「時間」を以つて、富を計量する尺度となす當然の理由がなければならぬ。¹⁰⁾従つてそこに労働紙幣は、合理化されとんしたのである。そののみならず曩にアットウッドの金貨本位制に對して、非難せし如き缺陷を匡濟し、労働紙幣によつて表

される富の増減に伴れて、精密にその紙幣の量を増減することが出来、且又その價値に於いて一定不變であり得ると考へたのである。¹¹⁾そしてそれは、當時レッド・ライオン・スコーパーに本部を有する、倫敦職工共産組合によつても亦發行せられ、一八三三年にその黄金時代を劃したのであつた。然し乍らそれは、オーウエンの確信せし所と、契合する結果を齎らし得たか？ 吾々は次にそれを尋ね見なければならぬ。

註 (1) Kropotkin, *Conquest of Bread*, P. 2.

(2) Kirkup, *History of Socialism*, P. 67.

(3) Podmore, *Robert Owen*, P. 273. Owen, *A New View of Society* etc. P. 261.

(4) 一七九七年に *Pank Restriction* が、英國人に金銀貨が最早や富の増大を表すものではない事を、教へたのであつた。

(5) "The natural standard of value is, in principle, human labour, or the combined manual and mental powers of men called into action."

- (6) Max Beer, History of British Socialism Vol. I, P. 176.
- (7) Podmore, *ibid.*, P. 274.
- (8) Owen, *ibid.*, PP. 264, 256, 280; Podmore, *ibid.*, Chap. XIII.
- (9) Podmore, *ibid.*, P. 418; 經濟世界地理臨時増刷「勞働政策」巻頭挿畫。
- (10) Robert Owen, Crisis, Vol. I, PP. 59—60.
- (11) Podmore, *ibid.*, P. 406.

5

この勞働紙幣は、それと物品とを交換することが、市中の商人に對して、却つて利益であつた所から、一時その授受が歓迎せられ、敏活に流通したのであつた。けれども次第にその流通高が増加するにつれて、自然その市價が低落し、その初め二時間勞働紙幣は、一志と評せられてゐるにも拘らず、遂にはその二分の一たる六片となり、その發行を停止するの已む

なきに立到つたのである。

そしてそれは當然の歸結でなければならなかつたと思ふ。何故ならば彼オーウェンは、その中心に於いて共產主義者である、然し乍ら彼は餘り私有財産制に觸れなかつた如く、その思想に於いて徹底してゐなかつた、従つて不用意にも彼はその勞働紙幣を金銀貨幣の流通圏内に流入せしめたのである。こゝに又彼が排斥してゐた所の現象が起らざるを得ない、即ち勞働紙幣は、金銀貨幣によつて、その價値を再び評定せられ、一時間に對して六片となり、遂には三片となつて、兌換紙幣と同程度の機能さへも保障し得なくなつたのである。而もその發行高の巨額となるに従つて、それを發行する組合の信用如何により、果してこの巨額の支拂をば、なし得る能力ありや否やが危ぶまるゝにつれて、次第に金銀貨幣に比し或は政府が保證せる大銀行の兌換券に比して劣悪なる貨幣となり、グレシアムの法則による現象を見、その結果彼の期待を裏切るに至つたのである。

又この勞働紙幣は、彼が社會的及び經濟的配列の直接全體的改造を考へずして單に新なる

尺度を、現存せる市場に調和せしめんとした大過失の外に、閑却し得ざる他の問題を有してゐる。先づ一般市場に於いて、各種の割合を以つて、その報酬が支拂はれてゐる、各種の労働の間に於ける差異を、如何にてしその公分母たる労働時間に對して、減少せしめるか？といふことは、確に一つの問題とされねばならない。又その原料品の中に、或は生産器具及び機械中のに、含まれてゐる労働の時間價値を、如何にして測定するかといふ問題を、考へる必要に迫られて來るのである。

前者に對してオーウェンは次の如く考へた。成程人間の労働は、各自にその特質を有してゐて、容易にその差異を一樣の尺度に、換算し得ざるものがある、けれどもそれは機械力の尺度である馬力に於いても同様であつて、馬の力はその馬の強弱によつて不等である、然し馬力は機械力を測定するに、何等の不便をも感じない、それ故に若し、人々の平均労働力が見出されるならば、それによつて總ての富の價値をば計量し、交換に際して、他の一方がなす不當利得を、防止することか出来るのである。又後者に對しては、公正労働交換所によつ

て、その非難を救済しやうと考へた。この公正労働交換所はオーウェンによつて、倫敦のキングス十字街に近きグライス・イン通りに國民公正労働交換所として一八三二年九月十七日の日曜日から開設されたのである。この交換所は可成の大きさを有し、古風の居酒屋式建築物であつて、中央は廣庭であり、その廣庭に面して廻り廊下が造られてゐる、商品陳列場や倉庫に適してゐるものであつた。

今そこにある製作品を持つて行くなれば、交換所は先づ原料品の價値を、普通商人の如く磅、志、片の尺度を以つて評價し、次にその原料品に新に加へられたる労働の價値を、矢張り磅、志、片の尺度によつて評價し、この兩者の價値を合計し、それを六片にて除し、その商に相當する労働時間紙幣を與へることとしたのである。そしてこの六片は、人々が一日十時間の労働をなすと考へ、最も良き賃金と最も悪きものとの平均額が、一時間六片に當ると計算し出されたからである。又この外に交換所は、一志に付いて、一片の委託手数料を、徴收することになつてゐるのである。成程この交換所は、當時倫敦の風評の中心となり、從つ

てその供託品を以つて、山を築くに至つたのである。そして木曜日には、早くも供託品整理の爲に向ふ三日間、交換所を閉鎖するの已むなき盛況を呈し、同年十二月二十二日までは供託物品の労働時間は、總計四十四萬五千五百一時間であり、交換せられたるものの總時間数は、三十七萬六千六百六十六時間であつて、差引残れるものの時間数は、僅に六萬九千三百三十五時間の好成绩を、擧げ得たのである。そしてその労働紙幣は、ウォーターロー橋の橋錢として通用し、バーミングハムの鐵工所では、その賃銀の半額だけは、労働紙幣で受取られるまでに進展した。然しこの交換所に供託せられ得る物品は、耐久性のものでなければならぬ。その結果として、總ての必需品を備へ置くことは不可能であり、唯だ家具類、靴、畫、硝子細工、帽子、着物等を陳列し得るに過ぎなかつた。

この公正労働交換所の設置を以つて、吾々が曩になした非難を、オーウェンは救済し得たと考へたとしても、吾々は容易にそれを是認することとは出来ない。オーウェンの考へた如く馬力は、機械力を測定するに、何等の不便をも感じない、それはその通りである、然し

それによつて人々の平均労働力が、直ちに富の價值を計量し得る尺度となると、断定するならば、それは吾々の到底肯定し得ざる所である。何故ならば馬力、それは馬の力の平均から算定されたとしても、更にそれを計量する所の、他の單位を有してゐるのであつて、一馬力は、一分間に三萬三千ポンドの重さを、一呎だけ擧げ得る力、即ち一分間に四千三百キログラムの重さを一メートルの高さに擧げ得る工率を有する力を意味するのである。そして一分間、一キログラム、一メートルは、それ〴〵不變であり、客觀的に又精確に測定し得るのである。然るに労働時間を價值の尺度となす場合に於いては、一分間それは、一分間と同じく不變である、けれども各自の労働力は、内在的に差等を有し、その力が流れる過程に、技術の差異を有してゐる。故に若しオーウェンの如く、この差異と差等とを、磅、志、片の尺度によつて、主觀的に評價するならば、その換算に過不及がないといふことは、否定し得ない、加之最良の賃金と最惡の賃金との、一時間の平均額を六片となす時には、最惡の労働に對しては、それは過大となり、最良の労働に對しては、過少となるといふことは明白である。

それ故に原料品と労働との價値の換算に際して、交換所は、この二重の尺度を用ゆることに據り、却つてその當を失ふのみならず、更に委託手数料の形式に於いて、中間者の不勞所得を構成する虞を、差挾むのである。故に若し吾々が、労働を價値の尺度となさんとする説を、支持せんとするならば、必ずこの非難に對して更に工夫を重ねる必要があると思ふ。

- 註 (1) Max Beer, *History of British Socialism*, Vol. PP. 178, 189.
 (2) Podmore, Robert Owen, PP. 406—407.
 (3) Max Beer, *ibid.*, P. 176.
 (4) *The Equitable Labour Exchange*—Robert Owen, *The Crisis*, Vol. 1.
 (5) Podmore, *ibid.*, P. 407.
 (6) Robert Owen, *The Crisis*, Vol. II. P. 139.

9

今、オーウエンの思想的傳統を、直接續いでゐる人々を考へるならば、

George Mudie.

Afram Comde. (1785—1827)

John Gray. (1799—1850?)

William Thompson. (—1833)

John Minter Morgan. (1782—1854)

Thomans Rows Edmonds. (1803—1889)

John Francis Bray. [*Labour's Wrongs and Labour's Remedy*. (1839)の著者]

等を擧げることが出来る。そして吾々はその中、最も貨幣に關する考究をば、進めてゐる者として、先づその指をジョン・グレイに屈しなければならぬと思ふ。

彼グレーはオーウェンと同じく、リカード派の考へ方により、労働は富の基礎であり、従つて又價値の尺度である。それ故に労働者のみが、眞に國富を生産する者であると信じ、餘他の者は、この労働者によつて生産されたる國富に寄生する者でなければならぬ。然るに英國に於ける一八一二年の人口は、一千七百九萬六千八百三人であつて、その年の中に新に生産されたる富の總額は、四億三千五十二萬一千三百七十二磅であつた、そしてその富は、僅に七百八十九萬七千五百三十一人の労働者によつて、生産されたのである。それ故に若し公平なる交換の原理が行はれるならば、平均一人の労働者は、各々五十四磅づゝを受取る可きである、けれども反對にその五分の一である十一磅しか受取つてゐない、言葉を換へていふならば、八百萬の生産者が九千五十萬磅を、九百萬の非生産者が、三億四千萬磅を、受取つてゐる計算となつてゐるのである。若しこれを更に換言するならば、金持連は何もやらないが、總てのものを享けてゐる、然るに貧乏人は、總ての事をやつてゐるが、何も受取つてゐないといふことが出来る。そして正直である人々は、社會のこの状態を、平然として持續すべきものと考へ得るであらうか？

進んで彼は考へた。この商業の體系は、自然の全體系と杆格してゐる、然し神は、その造り賜へる人々をば、相互に邪魔物となし、相互に敵視せしむる意志を、抱かるゝ筈はあり得ない。³³⁾そして社會は自然的現象であり、自然は人々の心に、各自がその同僚と協同せんとする欲望を植付け、又それと同じく人々の心の内に幸福を追及せんとする欲望を植付けたのである。然るに社會の状態は殆どそれと正反對であつて、斯く貧富の大なる差を生じ、斯く多くの罪惡、斯く多くの不幸、斯く多くの不徳によつて、社會は煩はされ苦しめられてゐる。何故にそれは、神の意志から、斯く甚しく背反して來たか？

彼は考へた。それは人々の協同が、基礎づけられる所の原理が、誤つて作用されたからである、吾々が以つて、眞の原理となすに足るものは、社會に生活する人々の自然的欲望を満足する原理である。そしてそれは物々交換でなければならぬ。物々交換——この物々交換のみが、社會の眞の基礎であり、他の總ての制度が其の上のみ全部建設さるべきである。

人々はこの原理を、正しく適應することによつて、労働の相等しき量を、相互に交換することが出来る。故にこの根本的原理が、支配してゐる社會は幸福である。然るに現在の社會はその原理によつてゐない。従つて前述の如く、労働者は自己の生産の五分の四を掠奪され、そして社會に對して、等價值のものを何等與へることなき、非生産者の中に、それが分配せられるから、その交換の全原理は虚偽であり、社會の基礎は全く不健全である。⁴⁾

然し吾々が彼等非生産者に、その不正を攻めるならば、彼等は自己の財産によつて、生活すると誇稱する。けれどもそれは反對に、寧ろ他人の財産によつて、生活する者である。

何故ならば彼等の収益は、他人の労働を安く買収して、それより高く賣ることによつて、殘留せしめたる價值であるからであり、十磅を他人に貸與して、十二磅を受取るからである。⁵⁾ さりながら若し吾々が、この交換現象を排斥するならば、吾々は無智なる野蠻の状態より這出て、文化の光に浴することは不可能である。故に唯だ吾々の非難せんとするものは、交換の原理の誤れる適用と、其適用より生ずる罪惡が、自由競争主義によつて、更にその惡性を

倍加して來たことである。そしてこの社會的罪惡によつて、思想は益々紛糾し、その罪惡を排除する爲に、議會の改造が企圖せられ、普通選舉制が高調され、進んで議員任期の一年制と無記名投票制とが要望され、自由貿易、國債の支拂拒絶、租税の減少、組合の廢止、それからそれへと幾多の改革案が提唱され、議論百出して停止する所がないのである。今假にこの總ての改革案が、實現せられたとしても、交換の原理が變更されない時には、社會的罪惡は到底根絶し得ない。従つて又思想の紛糾は、その解決を得るに至らぬのである。

却説、交換の媒介物、それは貨幣である。それ故に貨幣は重さ、長さ、及び高さと同じく與へる物と受取る物との價值を、同等にし得るものでなければならぬ。又それは交換すべき何等かの物を有する人々に、秤の如く、物差の如く、樹の如く、手近に、安値に、容易に獲得し得るものでなければならぬ。果して然らば、金貨は全くこの目的に添ふものではない、のみならずそれは、自身の價值に變動を有し、而も獲得するに決して容易ではない。故に若し貨幣が、金本位制に據つてゐる時には交換は困難であり、需要を減少し、次いで生産を抑

制する。この點に關して正貨準備を必要とする銀行兌換券も亦、その效果に於いて、金貨と大差を有するものではない。これを以つて國民は絶えず貨幣の不足によつて煩され、その不足によつて交換をなし得ざる多くの滯貨を生じ、誰れでも彼が要望する物品と、何時でも彼が有する、如何なる價値の如何なる種類の物品とでも、公平に交換せしむる所の、貨幣の眞の目的を裏切つて來たのである。

然らば吾々が要求して止まざる貨幣は、如何なるものでなければならぬか？ とグレーはその思索を、更に進めて來た。貨幣それは單なる受取證であり、それを持參してゐる者が、富の社會的蓄積に對して或る貢獻をなしたといふ證據である。従つて、この受取證は、それを持參する者をして、それに對して與へた所の價値を、何時でも亦如何なる形態に於いてでも、再び手に入れしむるものである、そしてこの貨幣は内在的に、有價値のものであつてはならぬ。故にこれ等の條件に、適合するものを求める爲には、どうしても紙幣發行の一元的力量を有する、國民銀行を創設せねばならぬ。そして人々は、各自の製造工場等に於いて、生

産したる總ての財貨を先づ國民倉庫に運ばねばならぬ。この倉庫は直にそれに費されたる材料と勞働との原價をば評定し、又商務省によつて定められたる率の利益をそれに加へ、そして利子、賃借料、倉敷料、手数料、保険料及び租税を差引いて、そこにその財貨の小賣價段が算定されるのである。そしてその信託受取證が振出され、生産者はその受取證に従つて、國民銀行より紙幣を受取ることが出来る。斯くして紙幣の高を財貨の高と、精確に一致せしめ、又生産者は自己の生産せしものの價値を、過不及なく受取り、それによつて國民倉庫から彼が好むものを買取ることが出来る、彼は案出したのである。

そしてこの案出せられたることが、實現せられるならば、交換は公平に且圓滿に行はれ、賣るにも買ふにもより容易に、より多く生産され、より多く消費され、而も尙過剩せられたる價値は、悉くこの國民倉庫の内に蓄藏し得るのである、と彼は其確信を述べてゐるのである。

然し吾々は一讀して、彼の提案が複雑なる大社會、殊にその産業の形式が大規模となり、

國際市場に向つて、生産をなすが如き經濟關係に於いて、その實行は殆ど空想に類するものとならなければならぬのを、彼の爲に悲しまざるを得ない。けれども人類の歴史が、悲みと失敗とであるのに反して、その將來は恒に希望と光明とである。故に彼等がなした失敗の記録は、如何なる希望を、その後人に齎すであらうか？ そは又吾々に残されたる研究であらねばならぬ。

註 (1) Max Beer, History of British Socialism, P. 210.

(2) John Gray, Lecture on Human Happiness, PP. 15—20.

(3) John Gray, Social System, P. 340.

(4) Max Beer, *ibid.*, P. 213.

(5) John Gray, Lecture, PP. 69, 34—35.

(6) Max Beer, *ibid.*, P. 217.

(7) John Gray, Social System, Chap. 5.

第二章 ブルードンの貨幣説及び交換銀行法

1

吾々は又貨幣制度に對してこの意味の不信任案を投げつけた者として、ブルードンを考へなければならぬ¹⁾。彼は單にその理論に於いて、それを主張したばかりではなく、その實行をば議會を介し、民衆銀行法案²⁾によつて實現せんと熱中し、オーウェンが彼の經營した均等勞働交換所³⁾(The Equitable Labour Exchange)に於いて、その實行を企圖したと同じく、社會に起る總ての罪惡は、直接間接この貨幣制度の必然的屬性から分化されるものであるといふ思想に立脚し、その思想を後の社會主義者、共產主義者に遺傳せしめて來たのであつた⁴⁾。

ブルードン彼はその思想的影響を大ならしめる爲に、最も有利なる社會的歴史的地位に置

かれてあつたのである、何故ならば當時の佛蘭西巴里は、若き歐洲の總ての革命的思想家にとつて、一種の大學であり、且つ實驗所であつた。⁵⁾そこにサン・シモンは、該博なる智識をもつて、産業組織の諸問題を論じ、チャルス・フリーリエは、産業上及び社會上の新組織としての Phalanx ^{フアラックス} を構想し、「吾若し百萬フランの金あらば!!」それを實行せんと狂奔し、ルイ・ブランは、「労働の組織」を公にして、國家の本質は、貧民に對して銀行家となることであり、社會的工場を新設することであると、その雄渾なる論陣を張つてゐたのであつた。⁶⁾然るに他方、一七八九年七月十四日 Bastille ^{バステイル} 獄の破壊となり、一七九二年八月十日 ^{ナポレオン} 王政の復古となり、一八三〇年の七月革命となり、一八四八年二月二十四日の革命によつて、ルイ・ヒリボーの無能政治は顛覆して、佛蘭西は再び共和政體に歸り、ルイ・ブランの國民工場の出現となり、その間走馬燈の如き社會的變動と改革とが續出して、彼等に活動の分野とその觀察研究の資料とを與へてゐたからであつた。⁹⁾

斯くの如き思想的環境と社會的雰圍氣とに包まれてゐたブルードンは、先づその私有財産論に於いて明快に結論を「私有財産とは贓品なり」(La propriété c'est le vol) と下すことによつて、青年思想家等の驚異と崇敬とを、その一身に集めざるを得なかつた。そして吾々は彼の下に走つてその教を乞ふた所の青年の群の中に、將來獨逸に於ける國家社會主義の建設者となつた、フイルヂナンド・ラーサルを見出し、科學的國際的社會主義者の巨魁となり、第一人者となつたカール・マルクスを發見し、無神論的無政府主義の父となり、世界に於ける破壊の使徒となつた、ミカイル・バクーニンを求めることが出来るのであつた。¹⁰⁾

註 (1) Pierre Joseph Proudhon, Qu'est-ce que la Propriété?; Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère; Robert Owen, The book of The New moral world; A New View of Society.

(2) P.—J. Proudhon, Solution du problème social: Organisation du credit et de la circulation. —Banque d'échange. —Banque du couple.

ブルードンの貨幣説及び交換銀行法

- (3) Max Beer. Allgemeine Geschichte es Sozialismus, Vierter Teil. S. 105-106; Podmore, Report Owen, P. 3. 8—411.
- (4) Guyot, Principles of Social Economy. P. 77; Collier, Economic Justice P. 229.
- (5) Kirkup: History of Socialism, P. 42.
- (6) Saint-Simon (1760—1825): Le systeme industriel (1821); Catéchisme des industriels (1823).
- (7) Charles Fourier, (1772—1837): Théorie des quatre mouvements. (1808); Traite de l'unité universelle. (1821); Le nouveau monde industriel ou societaire (1829); Pièges et charlatanisme des sectes Saint-Simon et Owen qui promettent l'association et le progrès. (1831).
- (8) Louis Blancs, (1811-1882): Organisation du travail. (1839).
- (9) Hazen, Modern European History. P. 314.
- (10) Zenker: Der Anarchismus, S. 28—65; Kirkup, *ibid.*, P. 42.

2

却説ブルードンはその中心に於いて如何なる思想を持つてゐたか？。彼は人の本性と才能とその相互關係とに、厳正に且つ絶對的に基礎を置いた科學を發見し、それに則して總ての現制度を解剖し、討議することによつて、優秀なる政治的經濟的法則を掴まうと努力してゐた¹⁾、そして彼はこの研究によつて、社會の真相は社會主義的であり、そこには正義と自由と平等とがあつた、それ故に吾々も亦この正義と自由と平等とを、道德的理想とし、確實不動の絶對的眞理と信じ、それに従つて社會の改造を目論まねばならぬと考へたのであつた。

今、社會に於ける不正義、不自由、不平等を考究する時には、それ等は皆直接間接、私有財産制の存在によるものであつて、それは暴政の母であり、搾取の素因であり、社會性を阻害する張本人である²⁾。そしてこの私有財産、それは贖品である、何故ならば、泥棒とは羅典語で *fur* 又は *latro* と呼び、*fur* は希臘語の *φύρα* から變じて來たのであつて、それと語源を同じくする *φύρα* から、羅典語の *fero* が生れて來た。そして *fero* は「私は持つて行く」と云ふことを意味してゐる。又 *latro* は希臘語の *λατρός* からやつて來たものであつ

た。それは「私は山賊を飾する」と云ふことを意味し、又この *κρυπτα* より羅典語の *lateo* が分化し、そしてそれは「私は私自身を隠す」といふことを意味してゐる。尙希臘語に *κρυπτο* といふ言葉があり、それから *κρυπτος* 或は *κρυπτην* が生じて來、そしてそれは「私がカツバラふ」とか「私が隠す」とかいふことを意味してゐる。又ヘブライ語に於いても、盜賊といふ名詞は *saper* といふ動詞から變じて、それは「傍へ押しやる」といふことを意味し、佛蘭西語の *voler* は羅典語の *volare* 即ち「手の掌」から變じて來たのであつて、掴み取ることを意味するものに外ならない。それ故にこれ等の言葉は既にその中に於いて泥棒とは、自分に屬してゐない物を隠したり、運び去つたり、或は掠奪し去つたりする者を意味してゐる。

そして人々は色々の方法でそれを盗む、或る者は大道で切取強盜追剥をやる、一人でやり又は徒黨を組んでやる、或る者は家を打壊したり塀に梯子をかけたりにして押し込む、又或る者は剽竊をやり、詐欺破産をやり、公私の文書偽造をやり、法貨の贋造をやり、詐欺をや

る。更に又或る者は他人に偽物を掴ますことにより、信用を濫用することにより、賭博や籤をやることにより、高利を貸し、地代や家賃やその他總ての貸借により、商業により、生産によつて、他人から盗み、社會から竊む。百姓はその穀物を賣る時に、樹の中に指を入れて量る、そこに竊が行はれる。大學教授は講義をする爲に國家から俸給を受けてゐる、けれども彼は、その講義を書物にすることによつて、再び公衆に賣りつける、そこに又竊が行はれる。斯くしてそこに竊み得たる所のものが所謂私有財産であり、そしてこの斷言はルイ・フィリップの治下に於ける最も重大の出來事であると切言してゐる。

又例へば資本家は労働者の労働力を、その實價より安く買取り、その生産物をば賣れるだけ高く賣捌く、そこにどうしても二重の竊が介在する。この「私有財産論」の出版者及び私は、それを實費及びその價值以上に賣ることによつて又竊をやる、と彼はその思索の連鎖を進めて來た。何故そこに容易に竊が行はれるか？、それは現在の社會に於いて、その報酬關係が完全に平等でないからである。何故にそれは完全に平等でないか？、それはその報酬關係

が貨幣によつて行はれてゐて、服役に對して服役を以つて支拂はれ、一日の勞働に對して一日の勞働を以つて、酬いられてゐないからである、而も兩者を比較し計量する尺度となるものは、どうしても兩者に共通なるものでなければならぬ。成程勞働はその種類によつて、或は又その人の才能により能力によつて、それを單に勞働時間で計ると云ふことは、その間に不公平が起らねばならぬ。けれども人類が次第に進歩するにつれて、それは最小限度にまで減退するものであると考へられない譯はないと主張してゐた。

この理論に基いて彼は、一八四八年「社會問題の解決」を論じ、「信用及び通貨の組織」を説き、⁸⁾ 利子、利潤、賃賃料、租税及び賃銀等によつて、今迄の進歩がなされて來たが、それは次第に値引して遂に消滅せしめねばならない、若しこの制度によつて勞働者が唯だ名のみ賃銀増加を求め、それによつて満足してゐるならば、それは知らず知らずの間に却つて、彼等の總ての利益を裏切ることになるのである。故にその匡濟策として、吾々は交換銀行を建設せねばならぬと考へた。交換銀行それは、利潤を生じない、故にそれは株主を有してゐ

ない。又それは手数料のみで利子を算入せずして手形を割引き、⁹⁾ 勞働時間による債權券即ち勞働時間紙幣を發行して、生産物とそれを作成するに要した所の時間數に相當する債權券とを何等の手数料なしに交換する所のものである。¹⁰⁾ 故にこの交換銀行は、その本質に於いて必ず國立銀行制によらねばならぬといふのである。

彼は一八四八年四月の總選舉に於いて、ルクゼンブルグから立候補し、不幸にして落選した。けれども六月更に補缺選舉に於いて、七萬七千票の大多數を以つて、巴里から選出せしめられ、先づその議員生活の第一歩として、この交換銀行法案を提出したのであつた。然るにこの法案は、彼の熱烈なる説明と、必要缺く可からざるものであるといふ力説によつて、支持せられたにも關らず、賛意を表した者は、僅に彼と彼の影との二人のみであり、難なくそれは葬り去られて了つたのである。¹¹⁾ 茲に彼は世人の愚劣なるに呆れざるを得なかつた、彼は獨力即ち國家の力によらずして、社會の有識者或は同志の者に訴へて、その計畫を實現しようと決心し、それを民衆銀行と改稱した。¹²⁾ そして巨億の資本の代りに、彼は彼の説

に歸依する多くの商人及び製造業者を求め、殊に二月革命の結果出来た所の多數の勞働者組合をその銀行の周圍に集中し、その運用の完全を期したのであつた。斯くしてそこに幾多の寄附者が現れ、又それに加せんとする三萬七千の人々を得て來たのであつた。然しそれは再び不幸にして彼が筆禍事件によつて受けし、三箇年の禁錮と五千法の罰金とから遁れる爲に、白耳義に出奔したことによつて、全く畫餅に歸して了つたのであつた。

註 (1) Kirkup, *ibid.*, P. 55.

(2) Proudhon, *What is Property*, Vol. I, Pp. 241--248.

(3) Proudhon, *ibid.*, Pp. 204—231.

(4) By commerce, when the profit of the merchant exceeds his legitimate salary.

(5) By making profit on our product, by accepting sinecurs, and by exacting exorbitant wages.

(6) Proudhon: *ibid.*, Vol. II. Pp. 251 257.

(7) Kirkup; *ibid.*, P. 54

(8) Proudhon, *Solution du probleme social; Organisation du credit and circulation* (1842),

(9) Langlois, Proudhon, *His Life and Works*. P. 15.

(10) Max Peer, *Allgemeine Geschichte des Sozialismus*. S. 105.

(11) Langlois, *ibid.*, P. 18. 法案は七月三十一日に提出され六九一票の反對で否決された。

(12) Proudhon, *Banque du peuple*, (1849)

3

吾々は更に今一度ブルードンの中心思想を通り抜けることによつて、よりよくその貨幣罪惡説とその對策とを考究せねばならない。ブルードンは彼自らを社會主義者なりと主張してゐる¹⁾、けれども彼はその思想の本質に於いて、ゴッドキンの如く²⁾、極端なる自由主義者より進展した、無政府主義者であるといふことは、後世彼が「無政府主義の父」と呼ばれてゐるが如く、明にマルキシズムとしての社會主義即ち近世的意義に於ける社會主義の先驅者とし

て、ローバート・オーウェン、サン・シモン、フーリエと同列に、彼を数へることは出来ない。彼の思想の重心は飽迄も「自由」にあつたのであつて、従つて彼の抱いてゐた「平等」の概念は、普通の社會主義に於いて高調せられてゐる平等のそれと異つてゐた、即ち後者は唯人間として個人と個人とを等しい關係に立たしめ、均等に報酬し待遇せんとする無差別的平等であり、一個人を一個人として計算し、如何なる人と雖も一個人以上に計算せざること、眞の平等であるといふ、佛教の所謂惡平等であるのに、彼の所謂「平等」はこれと反對に、プラトリーの考ふる所と同じく、個人のなしたる社會的貢獻とその報酬及び待遇との平衡が眞の平等であり、一方が搾取され、他方がそれによつて不當の利得を得るといふが如き惡平等を排斥し、差別的なる良平等を主張したのであつた。そしてこの良平等こそ眞の社會正義であり、生産と賃銀との間の均等よつてのみ、社會はその安定に近づき得るのであると考へた。

それ故に彼は先づ惡平等と自由との間に於いて、相調和すべからざる矛盾を指摘し、各個

人は夫々その天賦の才に於いて均等ではなく、先天的に不平等であるのである。然るにそれをば人爲的に平等となさんとするならば、恰もそれは恐怖時代に於いて、當時佛蘭西が世界に誇つてゐた化學者ラボーイヂールを、「革命の精神は平等である、彼はこの平等であり得るには餘りに偉大であり、餘りに有名であり過ぎる」といふ理由の下に、ギロチンにかけたと同じく、それは虐殺と牢獄によつてのみ可能である。然らば吾々の要望して止まざる「自由」は、獄吏と警官によつて壓倒され、葬り去られねばならない。自由なくして吾人の生命は、唯單に長に苦惱の連鎖であり、その墓穴にまで鐵鎖をひきづり行く所の奴隸の過程に過ぎない。斯く虐げ、斯く虐げらるる人々の間に於いて、又吾々の標語とする「友愛」は、滿身の槍痕によつて踰越かねばならない。人間はその本性に於いて決して善良ではなく、寧ろそれはカントの言ふが如く惡であらねばならない、故に吾々がその友愛を永遠に支持せんとするならば、極めて嚴格なる基礎の上に、その關係を構築しなければならぬ、そしてその嚴格なる基礎とは何であるか？、それは社會正義であり、良平等であらねばならない。この

良平等の上に立つて、始めて永久に變らざる友愛があり、眞の自由があるのである。それ故にこの社會正義が支配してゐる状態は、共產のそれでもなく、又勿論專制獨裁のそれでもない、フリーエの主張するが如き地方分權の状態でもなく、又無秩序無政府の状態でもない、それは秩序と獨立との中に於ける自由である。こゝに自由、平等、友愛は、相調和したる一貫の革命原理となつて來たのである、そして又この良平等の原理から、不勞所得の非難が發生し、全勞働收益權の主張が、分化されて來たのである。

彼フルードンは、その初め極度に私有財産制を非難し、それは贖品であり、社會に於いて富める者、過分に有してゐる者は、それを社會の他の人々より、盜奪せる者であると論じたのであつて、恰もそれは如何なる正しき手段を持つてしたる私有財産をも許すべからざる罪惡なりと非難するが如く考へられた。けれども彼が眞に攻撃した所は、その不勞所得である、働くことなくして、即ちその分前を受けるに正當なる資格なくして、言ひ換れば何等の社會的貢獻をなさずして、受け又に強奪する所の分前であり、その集積たる私有財産である

のであつた。故に彼の攻撃は、正當なる私有財産に向ふものではなくつて、不正當なる財源による私有財産に向ふものであつた。そしてその不正當なる財源とは何であるか？、それは利子であり、小作料であり、家賃であり、一言にしていふならばそれは賃子による盜奪である。この盜奪こそ彼の所謂社會正義を蹂躪するものであり、従つて總ての社會問題の中核をなすものである、と彼は考へたのであつた。

註 (1) Proudhon, Correspondance, Vol., VII. として彼は社會主義とは 社會理論或は社會科學を 教ゆる哲學であると考へてゐた

(2) William Godwin 氏 An Enquiry Concerning Political Justice, and its Influence on General Virtue and Happiness. の著者として有名であり その著書はその頁數僅に百五十頁内外たるに その價が三ギニー(三十三圓)であつたことでも有名であつた。

(3) Stein, Die Soziale Frage, S. 276; Rapoport, Dictionary of Socialism, P. 209.

(4) 拙稿「革命の原理としての社會正義に就いて」(經濟及商業、第一卷第八號、二七一―二八頁) フルードンの貨幣説及び交換銀行法

「宗教問題の社會學的考察」(社會學研究)第二卷第一號、六七—六八頁)「各階級の待遇問題」(現代第九卷第六號、九—一一頁)。

- (5) Proudhon, Qu'est-ce que la propriété? P. 274; Lettre à Blanqui, P. 106; De la justice dans la révolution et dans l'église, Tom 1, PP. 280-5; Théorie de la propriété, PP. 199, 219.
- (6) Proudhon, Célébration du dimanche, P. 151; Bouglé, La sociologie de Proudhon, P. 17.
- (7) Proudhon, Oeuvres Complètes, Tome 1, P. 91; Menger, Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung, Kap. 7, § 1.
- (8) Stein, Die Soziale Frage im Lichte der Philosophie, S. 277.
- (9) Stein, *ibid.*, S. 278; Diehl, Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, S. 85-6.

4

この社會問題の中核たる不勞所得を排除し、搾取關係のなき理想的社會に到達せんとする

ならば、先づ社會の全成員をして、各々その生計の爲に勞働せしめねばならない。若し斯くしてその勞働を社會の全員に分散せしめ得るならば、今迄の如くその全勞働をば少數の人々にて分擔し來りし場合と反對に、その仕事は、堪え難き苦痛を伴はざるものとなることである¹⁾。今、到底堪え難き勞働苦を以つて、人々を虐げるといふことは、確にそれは許すべからざる罪惡である。そののみならず又何等の勞働をもなさざる者は、他人の勞働の結果を搾取し、或はそれに寄生してゐるといふ不徳の外に、その閑居の徒然のために、奢侈に流れ、その富を更に浪費するの罪惡を重ねねばならない。

それ故に彼ブルードンは考へた、吾々は凡ての人々に、各々その生活の爲にするだけの勞働を強制するといふことは、理想社會の現實の爲に必要缺くべからざることであるばかりでなく、それによつて人々は自らを神聖にすることが出來、その道徳を向上せしめることが出來るのである。適度の生産行爲は、決して無爲無聊のそれよりも苦痛ではなく、寧ろそれは快感を伴ふものである。そしてその仕事は邪念と妄想とを自然に轉換せしめるが故に、閑

散階級の人々も、一度この適度の労働に慣習づけられるならば、その残餘の時間を高尚にして愉快に銷暇し得るのである、故に彼等は必ずその労働の眞價を見出すであろう。又今迄少數閑散階級の安逸の爲めに、その背骨は絶えず彎曲せしめられ、不良なる營養と借越されたる疲勞とによつて、日に困憊し行く労働者階級も、その過重なる労働の部分だけを、閑散階級に譲渡することによつて、人生の快樂に逢着して來ることであろう。斯くして全成員の愉快なる社會を創造すると同時に、文化の向上するに従つて増大し行く労働量の必要に、吾々は適應せねばならない。

ブルードンの考ふる所によれば、文化の向上するに従つて幾多の機械が發明される、けれどもそれは普通に考へられてゐるが如く、人間の勞力を節約するものではなく、却つて必要なる労働の量を増加して來るのである。何故ならば機械は不斷に活動するのであつて、間斷なくそれを監督すべき人員を要するからである。又新しき機械の出づる毎に、新しき勤勉なる労働者を必要とし、文化の進展と機械の進歩とは、又新なる欲望を誘發して、その労働の

總量を、決して以前の時代よりも減少するものではない。故に吾々は過去の時代の如く、その労働を輕蔑してはならない、若しその労働に不足を來す時には、機械は全く魂のなき一塊の古鐵としての外、價値なきのものとなり、人間文化の全機制は、錆び着いて了はねばならなくなる。この意味に於いて吾々は労働を神聖視する、そして眞に労働が神聖視されるならば、閑散階級は自ら消滅するであろう。そして閑散なるが故の不徳と罪惡とは、労働によつて淨化され、利子、小作料、賃貸料等の不勞所得によつて生活する必要がなくなつて來ることであろう。又反對の端よりその論理を押し進めるならば、吾々はその不勞所得を絶滅して、各自をして各自の労働を餘儀なくせしめ、それによつて労働の神聖を知らしめねばならない。故に吾々 敵視する物は、利子を生む所の財産であり、資本であり、端的にいふならば、貨幣及び利子である。

然らばブルードンの眞に敵視したるものは、財産そのものではなく、それが不勞所得を生み出す口實となり、手段となることであり、又それが不勞所得の集積である場合の不平等で

あり、不正義であるのである。故に彼はその對策として多くの人々の如く、共產主義に左袒したであろうか、否既に述べしが如く共產主義は彼の主張してやまざる良平等の原理と杆格し自由の原理と背馳するの故を以つて、彼はそれを排斥したのであつた。勿論彼は政治的の改革は、畢意何等の効果をも齎すものではなく、必ずそれは社會的即ち經濟的の改革によらねばならないと考へてゐた。けれども彼の社會的即ち經濟的の改革とは、要するに貨幣と利子とを廢止することに外ならなかつた。

今、彼が新にその學説を構築する論程を見るに、必ず在來の主義主張を批判し、それ等の中に自家撞着のあることを指摘し、その廢墟の上に嶄新なる學説をば打立つることを常としてゐたのであつて、この貨幣及び利子の廢止に對する方策に就いても、亦彼は先づ在來の方策たる共產主義を、その血祭にあけんとしたのであつた。

彼は言ふ、共產主義は洵に不徹底にして全然その實行は不可能であると。何故ならば共產主義はユートピアであり、それは科學ではなくつて、寧ろそれは科學の全滅であるからであ

る。彼のカペーは同胞愛をその理想社會の基調に擬して、「吾が原理それは同胞愛であり、吾が理論それは同胞愛であり、吾が體系それは同胞愛であり、吾が科學それは同胞愛である」と、その同胞愛を高調したのであつた。けれどもブルードンはそれを非難し、萬人が悉く同胞となるならば、それはその反對に、吾々をして眞の兄弟を失はしむるものであり、それによつて最も崇高なる人生の羈絆である家族の關係を支離滅裂とならしめ、人は萬人の同胞の中にあつて、而も尙孤獨を味はねばならない、彼等は實に未だその思想に於いて夢想郷的分野から、爬出で切れざるものであるとなし、又フリーエの考ふる所を難じて、若しフリーエの計畫通りとなるならば、仕事は遊戯となり、苦痛の伴ふ所の仕事即ち勞働は消滅して全く享樂的なる懶惰の社會を招徠することとなり、その結果は却つて、フリーエが理想の社會なりとするフランクスの行詰りを自ら醸すに至るのである、今、フリーエの主張するが如く、人々をして一日七回の食事に滋養物を飽食せしめるならば、人々はその生理的必然に従つて、食事後その食物を消化せんが爲に血液を胃腸に集中し、その結果は勞働を惡し懶惰と

ならねばならない。一日七回この勞働忌避の原因を有するならば、人々は何時その生産に従事し得るや、よし生産に従事し得るの少時間があつたとしても、遊戯化されたる仕事によつて、この一日七回の享樂財を生産することは、到底不可能であるばかりでなく、フリーエは全く勞働の教育的價値を無視する者であり、甚しき危険を伴はねばならぬ思想であると論評するのである。¹⁰⁾

然しながらフリーエの思想は、私有財産及び相續の廢止を期するものではない、この點に於いてフリーエの思想は、眞の共產主義であるといふことは出来ない、眞の共產主義は絶對にして完全なる惡平等の原理を適用せんとするものであり、その生産手段は總てを共有となし、それによつて生産されたる物をば、各自がなしたる仕事の量によつて分配するものではなくつて、各自の必要に應じて分配するものであり、斯くして受けし分配物は、その必要に對して何等の過剰を有してゐないが故に、そこには私有財産制度の介在を許容し得ない、そして私有財産制度が介在しないならば、又そこに個人對個人の均等なる理想社會を實現せし

めることが出来るかと考へるものである。

然しながら、前述の如く、この分配に於ける惡平等は、良平等を持するブルードンの決して認容し得ざる所であり、彼は言ふ、現在の社會制度即ち資本主義的社會制度の裡に於いては、強者が弱者を搾取し、共產主義的社會制度の下に於いては、反對に弱者が強者を搾取し、強者の所産に弱者が寄食するの現象を呈するのである。今、強者が弱者から搾取する不勞所得が許すべからざる罪惡であるならば、又弱者がその共產制度を介して、強者の所産を搾取するといふことも、亦同様に許すべからざる罪惡であり、良平等に反し、正義に悖るものでなければならぬ、¹²⁾と主張するのである。

註 (1) 拙稿「遊戯化の研究」(『經濟及商業』第三卷第一號)一五三—一五五頁、Russian Socialist

Federal Soviet Republic Labour Law, Ch. I.

(2) Proudhon, Des réformes à opérer dans l'exploitation des chemins de fer, PP. 262—278.

(3) Veblen, The Theory of the Leisure Class, PP. 22—23.

ブルードンの貨幣説及び交換銀行治

- (4) Karl Diehl, Proudhon, Handwörterb. d. Staatswiss. Vol V. S. 308; Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, S. 83—4.
- (5) Karl Diehl, *ibid.*, P. 85; Paul Louis, Histoire du socialisme en France, P. 149.
- (6) Proudhon, Système des contradictions économiques ou philosophie de la Misère, Vol. II. P. 281.
- (7) “Mon principe, c’est la fraternité.”
 “Ma Théorie, c’est la fraternité.”
 “Mon système, c’est la fraternité.”
 “Ma science, c’est la fraternité.”—Proudhon, *ibid.*, P. 266.
- (8) Proudhon, Du la célébration du dimanche, P. 128; De la création de l’ordre, P. 134; Bouglé, La sociologie de Proudhon, P. 227.
- (9) Fourier, Théorie des quatre mouvements (1808); Théorie de l’unité universelle, Vol III, PP. 311—22; A. Alhaiza, Charles Fourier et sa sociologie sociétaire, P. 47; Max Beer, Allgemeine Geschichte des Sozialismus, 4 Teil, S. 56—60; 彼の説く所によれば、宇宙は法則

によつて支配されてゐる、そしてその法則を人間は発見することが出来る。発見してそれを社會生活に適用するならば、社會は完全に調和し、幸福にして繁榮なる時代が實現される。斯く社會が調和する爲には、人々は各自が自由に活動し得るに適してゐる集團をなして、生活せねばならない、そしてその集團は二千人を以つて適當とする。この二千人の集團をフランクス (Phalanx) と呼び、一つの建築物即ちフランクステリー (Phalanstery) の中に生活し、農業、製造業、商業、美術、科學、政府等の職に就く、又このフランクスは更に小さな群の約四百の家族に分けられ、各個人はその欲する所に従つて、一つの家族から他の家族へと替へることが許されてゐる。斯くして仕事は愉快なるものとなり、勞働するといふことは消滅して了ふ、この社會組織によつて始めて社會の調和を造出することが出来、從來の社會問題を解決することが出来るのである、然し彼は私有財産や相續の廢止をば考へる者ではなかつた。J. S. Mill, Political Economy, B. II. ch. I, §. 4.

(10) Stein, Die Soziale Frage, S. 279—280.

(11) Karl Diehl, Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, S. 7; Rappoport, Dictionary
 ノルードンの貨幣説及び交換銀行法

of Socialism P. 29.

(12) Proudhon, *Système des contradictions économiques*, Pp. 284, 288; *Théorie de la propriété*, Pp. 76—81.

5

然らばブルードンの所謂正義によつて支持せらるゝ方策とは如何なるものであるか？、それはその生産の手段の共有であり、否、それは共有といふよりも、その生産手段をその生産に従事してゐる間だけ機會均等に利用せしめ、それによつて生産されたる貨物を、その生産に貢献したる勞働の差異に従ふて、その果實を過不及なく分配せんとするものである、そしてそこに彼の良平等の原理があり、正義の主張があるのである。それ故に一言を以つてすれば、ブルードンの主張は、集産主義に相似たるものであるといふことが出来る、即ちその生産に於いて共產主義であり、その消費に於いて個人主義であるのである。再言すればそれは

全勞働收益權を主張することによつて、不勞所得を撲滅せんと企圖するものである。

而も彼は近代的社會主義者共產主義者のそれと反對に、その社會の改造を革命によつて遂行しやうとは考へてゐなかつた。一八四六年彼は社會改革をなす手段として、如何なる種類の革命的行動にも訴へることに反對する旨をば、マルクスに宛たる手紙の中に述べ、「多分吾々は如何なる改革も、吾々が革命と呼ぶ所のものゝ助力なくしては、不可能であると考へる、そしてそれは唯一搖りである、私はこの決定を理解し、それを許容してゐた、而も私は長い間私自身でそう考へてゐた。然し私の最近の研究によれば、私はその考を全く捨てねばならぬことを白狀する。私は吾々が効果を收める爲には、そんな事をば必要としないと信ずる、それ故に又吾々は社會改革の手段として革命的行動を敢て懸望するには當らない。そして革命的手段は力即ち暴力に訴へることに外ならないが故に、それは寧ろ自家撞着であらねばならない。要するにこの問題は、他の經濟的組合せによつて社會から盜奪せられてゐた富を、社會に復歸することである」と附言したのであつた。

然らば彼がそれによつて社會の改革をなさんとした「或る經濟的組合せ」とは何であるか？吾々は更に進んでそれをば考へねばならない。彼がいふ所の社會より富を盜奪する「他の經濟的組合せ」とは、それは勿論私有經濟的生產を意味するものに外ならない。そしてその組合せによつて、社會は甚しく煩はされ、

「その事業は行詰りを告げてゐる——吾々はそれを切開せねばならない、

その信用は全く死滅してゐる——吾々はそれを蘇生せしめねばならない、

その金融は澁滯し停頓してゐる——吾々はそれを建直さねばならない、

その市場は閉鎖されてゐる——吾々はそれを再開せねばならない、

その租税は又決して充分ではない——吾々はそれを廢止せしめねばならない、

その貨幣はその姿を隠してゐる——吾々はそれを破棄せねばならない」

そして斯くの如き時弊は、悉く私有經濟的生產の共に生産し出す所であり、而もそれはこの私有經濟的生產に避く可からざる隨伴現象たる貨幣と利子との機能によつて招徠されてゐる

るものである。故に先づ吾々は、總ての商品を流通する所の貨幣となすことによつて、黄金に對する忠誠を裏切らねばならない。實に黄金は吾々にとつて生産の原理であり、通商の髓であり、信用の本體であり、勞働の帝王である。そしてそれは餘りに吾々が、黄金を崇拜し過ぎるからである、寧ろ黄金は無能であり有害である、吾々は「生産品は生産品と交換される」といふ吾々の公式を、その經濟生活の中に確立せねばならない、そして又その爲には「信用の組織」を必要とし、この「信用の組織」は、彼ブルードンの所謂「或る組合せ」をなすものである。

却説、然らば「信用の組織」とは何であるか？、「生産品は生産品と交換される」といふ公式は、如何にして具體化され得るであらうか？ 彼はこの具體案として、先づ「交換銀行法案」を提示するのである。

註 (1) Rappoport, Dictionary of Socialism, P. 27.

(2) Proudhon, Oeuvres complètes, Vol. 1, P. 91.

- (3) Proudhon, *Correspondence*, Vol. II, P. 198. この外に不正なる抑壓を避けんとしてなす社會改革が、その手段として革命に出て、その革命が暴力を用ゆるといふことは、「自由」を高調して、「自由は秩序の娘に非ずして、實にその母なり」としてゐるプルードンにとつては、明にそれは自家撞着である、然し單なる革命といふ概念は必ずしも暴力を隨伴條件とするものではないが、マルクス主義者といふ共產革命は、プロレタリアの獨裁をその必然的過程としてゐるから、この點に於いてもプルードンの共產主義に對する反對があるのである。Proudhon, *Proudhon's Solution of the Social Problem*, P. 45; Karl Marx, *Neue Zeit*, IX, 1, S. 502; Kautsky, *Die Diktatur des Proletariats*, S. 20.
- (4) Proudhon, *Solution de probleme social*, P. 90.
- (5) Karl Diehl, *Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus*, S. 111.
- (6) Proudhon, *ibid.*, P. 93; "Les produits s'échangent contre des produits."

6

この交換銀行法案は、第一に正貨を排斥する、何故ならば吾々は金銀貨幣の暴壓に對して先づ叛逆を試みねばならぬ、と彼は考へたからである。彼はその金銀貨幣の缺點と罪惡とを攻撃していふ、(1)金銀は商品であると同時に代表的貨幣である、然るに價値の代表は他の性質を持つてゐてはならない、そして又他の目的の爲に役立つてはならない。(2)金銀の量は、それによつて代表され流通される生産品の量とその比例を保つことは容易に出來難い、而もそれなくしては流通を完了せしむることは不可能である、それ故に世界の正貨を統制することの出来る者は、專制的なるその手によつて、又市場を支配することが出来る、そして彼はその意志を社會及び國家に働かしめ得るのである。それ故に流通の媒介物を獨占することとは、一般に使用される他の貨物を獨占するよりも、殆ど計り知るべからざる大規模の影響を容易に與へることが出来る、のみならずこの正貨は、流通に好都合なる媒介物であることによつて、世界の生産及び消費のタイラントとなるのである。(3)この壓制によつて勞働は又征服せられ、財政的投機、買占、高利の犯罪は行はれ、暴利が食られて來るのである。然

るにこの金銀は、それを直接食ひ、或は着、或は住むことは出来ない、唯單にそれは衣食住の物資と交換され得るが故に、人々にとつて有益であるといふに過ぎない。それ故に若し吾々が、茲にこの金銀貨幣の代りに、何處に於いても、如何なる總ての生産物に對しても、喜んで交換され、而も帶携により輕便であり、獨占され得ない或る物を發見するならば、それは偉大なる發見であり、そして金銀はその本來の用途に歸り、その用途以外には使用されなくなるであらう、と彼は考へたのであつた。再言すれば社會の生活を硬化し、その勞働と信用とを絞殺して、お互をば奴隷と化し合つてゐた黄金を抹殺し、そしてその正貨を共和化し、勞働によつて生産されたる總ての貨物をば、貨幣とするの道を發見せねばならない。この手段として彼ブルードンは、交換切手 (Des bons d'échange) の制度を考へ、この切手をば發行する爲の機關として、即ち信用、交換、流通の機關として、交換銀行の建設を構想したのであつた。

そしてこの交換銀行は、その本質に於いて相互信用組合の制度であり、國立の佛蘭西銀行を以つてそれに宛て、國家の監督の下に立つたのである、而もそれは國家の機關ではなく獨立せるものであつて、國家と雖も總ての組合と同じく、一組合員としてそれに加入するものであり、この組合員は正貨の助けなくして、總ての生産物即ち商品或は服役を獲得することが出来るのである。又この銀行は一般的であつて、總ての國民をば例外なくその組合員とするものである、故に銀行はその基金或は資本金を必要としない。それは永遠に存續して、交換の良平等を確保し、斯くして勞働の平等と眞の連帶と個人の責任及び絶對の自由とを確立するの礎石を供して來るのである。又この銀行は、交換切手の發行、滿期裏書附手形の割引、及び引受濟手形の割引、委託物の賣買、金額未定勘定の保證、地主及び百姓に對する抵當貸、無報酬の取立及び支拂、合資會社の獎勵等をその事業となし、そしてその交換切手は、銀行券の如く或は正貨の如く商業界に通用し、國家も亦その公の支拂と收納とに、その切手の受授をなすべきであると規定するものである。然しながらそれは勿論正貨でもなく紙幣でもない、それは政府の發行する小切手でもなく銀行券でもない、又それは正貨の不足をば補ふ爲

に今日まで発見された如何なる種類のものでもない、それは一般化されたる交換證券であり、貨物そのものをば表現するものである。普通の交換證券は一つの場所から他の場所へ振出されることによつてその交換をなし、それに記載されたる物品と眞に同等なる價值を表すことによつて價值の蓄積に役立つ、その宛名人が完全に支拂をなすことによつてその受領がなされるのである。けれども一般化されたる交換證券即ちこの交換切手は、全組合員即ち國民に對して、記載されたる分量の商品或は勞役を給付せしむる所の指圖證券であつて、この切手に對し、交換銀行は預つて置いた價值と等しきものを、その組合員の有する商品、生産物又は勤勞を以つて即刻支拂ふべきことを約するものである。

そして人々が貨物を生産して、巴里に本店を有し各地にその支店を有する交換銀行にそれを持參するならば、銀行は「生産物に對して生産物」「一日の勞働に對して一日の勞働」といふ原則に基いて、その貨物の價值に相當する勞働時間を記載した交換切手を發行するであらう、そしてその切手を持參する人々は、又それによつてその勞働時間に相當する他の貨物を

要求することが出来るのである。従つてそこに一つの生産物が他の生産物と交換せらるゝ場合に、兩者の勞働量の間について何等の過不及なく、その公正を期することが出来る。斯くすることによつて吾々は、貨幣をその媒介としてゐた時代の不正なる搾取の關係から免れ得るのである、と彼ブルードンは考へたのであつた。又彼はこの交換切手を、勞働者に無利息にて貸し與へ、それによつて勞働者は又無利息にその資本と生産手段とを具備し得るに至り、従つて在來の貸子即ち不勞所得の罪惡をば、全く没落せしめ得ると信じたのであつた。そして彼は考へた、近世の趨勢は次第にその利子が低下することであり、遂にはそれが皆無となるであらう、吾々は先づ大勢に先んじて、世界を指導し誘導せねばならない。實に彼はこの交換切手とその發行所たる交換銀行とによつて、その理想社會に邁進せんとしたのであつた。

註 (1) Proudhon, Solution du problème social, P. 112.

(2) Charles A. Dana, Proudhon and his Bank of the People, 2. Iv; Proudhon, Philosophie de la

misère, PP. 88—95.

ブルードンの貨幣説及び交換銀行法

- (3) Proudhon, *Solution de problème social*, PP. 136.—137.
(4) Proudhon, *ibid.*, P. 188.
(5) Proudhon, *Oeuvres complètes*, Vol. VI, P. 209.
(6) Proudhon, *Les confessions d'un révolutionnaire*, P. 240; *Intérêt et principal*, P. 109;
ブルードンの思想は、多分にキリスト教的であり、従つて又教會の利子禁壓思想の影響を有してゐたのであつた。アリストテレスも既に、「金錢は金錢を生まず」と論じ、(Aristoteles, *Politik*, I. ix. "pecunia pecuniam parere non potest.") スコラ哲學も亦この利子禁止の哲理を提供してゐたのであつた。Erdmann, *Studien in der Romanisch-Kanonistischen Wirtschafts und Rechtslehre*, B. I, S. 12—17.

7

次にブルードンは、その交換銀行法案が七月三十一日議會に於いて、六百九十一票の反對

によつて葬り去らるゝや、その交換銀行法案に多少の修正を加へ、民衆の組合力によつて、それを實現せんとし、民衆銀行の創案を作成したのであつた。そして彼のいふ所によれば、この民衆銀行法案は、經濟的言葉によつて書替へられた、近代民主主義の財政的公式であり、人民の經濟的主權であり、共和の標語たる自由と平等と友愛との支配を、經濟的に具體化せんとするものに外ならなかつた。そしてそれは一つの商事會社であり、各人に對して土地及び勤勞を、最も安く出來得るだけよりよき條件にて得しむることにより、又彼等の生産物と勞働とを、最も有利なる條件の下に處理することによつて、信用の民主的組織を樹立せんとするものであつた。

ブルードンはその會社に於いて總支配人となり、その會社を代表する。先づ彼はその創立事務所を、巴里のフォブルグ・サンテ・アントニー街の二十五番地に置いて、五百萬法の資本金をば集むることに狂奔したのであつた。尤も彼の持説によれば、總ての原マテール・ラ・レミエ料は自然が人間に與ふるものであり、従つて總ての生産は勞働によるものである。故に又總ての資本は

不生産的であり、生産者と消費者との相互協約によつて、その信用と交換とが保障されてゐる場合に於いては、それは全然不必要となるのである。けれどもこの民衆銀行は、在來の法律に適合する爲に、一株五法の百萬株によつて、その資本金を募集せんとしたのであつた。又この銀行は、その正金の増加につれて流通切手を發行すること、裏書ある商業手形の割引、爲替及び引受濟手形の割引、委託の立替、保證による金額未定勘定、年金及び抵當による立替、支拂及び取立の代理、爲替送金、貯蓄及び相互扶助的の銀行事務、保險、委託及び物品の供託等をその事業とし、五法、二十法、五十法及び百法の「流通切手」(Bon de circulation)を發行し、それはその銀行團員、即ち銀行を中心とする組合員の總てに、宛てられたる指圖證券であり、制定法による強制通用の代りに、組合員がそれを受取るべき契約上の責務によつて流通するものである。そしてこの流通切手は、正貨に對し、裏書附商業手形に對し、又は商品の委託、労働者組合或は法人の共同責任、年金及び抵當等に對して、發行せらるゝものである。ブルードンはこの流通切手の貸付けに當つて、最初は——その過渡期として——

二パーセントの利子を取り、後には唯その經營費としてのみ足る僅々四分の一パーセントに、その利子を減率せんと考へてゐたのであつた。この民衆銀行進んでは交換銀行は彼にとつて洵に卓越したる識見の總果であつたに違ひない。そしてそれは今猶幾多の暗示と眞理とを含んでゐる、けれども吾々はそこに悲しむべき幾多の缺陷と不完全さとを有してゐることをも亦閑却してはならない。

吾々はこの銀行法案に對して、少くとも三つの非難を聞かねばならない。そしてその第一の非難は、曾つてブルードンの弟子であり友であつた、カール・マルクスによつて發せられたものである。由來ブルードンとマルクスとは、その思想の根本に於いて相反してゐた、前者はそれを簡單に言ふならば、ギルド社會主義的であり、百姓社會主義的であり、又地方分權主義的であつたのに、マルクスは新に起り來つた所の工業或は工場制度の傾向を早くも洞察してその社會主義を立て、所謂それは新産業主義であり、又中央集權をその實行の要件と考へたのであつた。そしてこの避く可からざる兩者の衝突は、ブルードンの著したる「貧乏

の哲學」に對して、マルクスが一八四七年「哲學の貧乏」を著すことに依つて、遂にその火蓋を打切つたのであつた。この「哲學の貧乏」の中に於いて、マルクスはブルードンを嘲笑し罵倒し諷刺し、ブルードンが彼の經濟學に適用した所のヘーゲル哲學に於いてさいも、全く無智であることを攻撃し、ブルードンは實に「惡經濟學者であり、惡哲學者である」と、その斷定を下し、その構成價值説の誤謬を指適して、斯くの如き思想は決して、ブルードンの創説ではない、既にリカルドに發し、ホブキンス、タムソン、エドモンド及びブレイ等によつて繰返されてゐる學説である、彼のブレイは、「價值を作る所のものは單に勞働のみである、……そして各個人は、彼の尊敬すべき勞働が彼に供し得る總ての物に對し、疑ふ可からざる權利を有してゐる、斯くして彼が彼の勞働の果實を收得する時は、彼は他の人々に對して何等の不正を行はない」と述べ、又「交換に於ける平等は、富を次第に現代資本家の手より、勞働者階級の手に移動せしめるであらう」、然らずして「交換の不平等が存續する限りに於いては、假令總ての賦課、總ての租税が徹廢されたとしても、生産者は常に今日の如く貧

乏であり、無智であり、過勞である、……唯この制度の全部的變化、即ち勞働並に交換の平等の實施のみが事物のこの状態を匡正し、人々に對し眞に平等の權利を保證することが出來ると論じてゐるのであつて、それは全くブルードンの所説とその類を同じくするものであるとなし、更に彼は一八五九年、「經濟學批判」に於いて、リカルドの貨幣數量説を批評し、進んで又ブレイ及びブルードンの勞働紙幣をば論破して、等しき勞働量を他の生産者より得ることが出來るやうに、彼を權利づける所の證券を、國家から或る量の勞働を爲した生産者のみを受取ると言ふ計畫、言ひ換へれば或る一つの仕事を爲したものが、それと同じ所の分量を他の生産者から國家の手を経て受取ると言ふ遺方は、個人主義的經濟に内在する色々の條件と一致するものではない、故に此條件に對する知識をブルードンが全く持合せてゐなかつたが爲の所説でそれがあると非難し、若しそれが實行せられたならば、誰からでも買取られない物を生産した者が、その勞働紙幣によつて、誰からでも買取られ得る所の物をば買取り、誰からでも買取られる物を生産した者は、その勞働紙幣によつて、遂に買取らるべき何

物も發見し得なくなるであらう、例へば私が自分の戀人の大理石像を作り、そしてそれを交換銀行に持つて行き、それによつて十時間の労働紙幣を受取り、直に他の者が生産したパンを十時間分だけ買取つたならば、そのパンを作り、そしてそれによつて十時間分の労働紙幣を受取つた所の者は、其交換銀行から何を買取ることが出来るであらうか、そこには唯私の作つた私の戀人の彫刻だけしかないとするならば、そのパンを作つた者は、その彫刻に果して十時間の労働價值を認めるであらうか、否、到底それをば認め得ないであらう、それ故に結局交換銀行に残留する所の物は、一般に通用しない、普通の價值判斷に於いて無價値なる物許りとなるのである。故に若のこの労働紙幣を通用せしめやうとするならば、どうしても總ての生産を社會化しなければならぬ、即ちそれを國有化し共產化しなければ、ブルードンの言ふが如き労働紙幣は何等の合理性を持つて來ない。社會或は國家が個人の生産する所の商品の性質と分量とを決定し、さうして其生産を強制する、従つて又その消費者はその消費に於いて強制せられて來る、そこに始めて労働紙幣は合理化され得るのである。

けれども又國立交換銀行に於いて、その需要量を、供給する所の分量と釣り合せようと言ふ計畫は、小ブルジョア的思想であり、それは小規模の經濟圈内に於いてのみ可能である、即ち需要量が常に供給量を支配し、消費量が常に生産量を監督してゐる時代に於いてのみ可能の事である。然るに現代は大資本主義的大工業の時代であり大量生産の時代である、必要な量と、消費される所の量とが常に上下の關係に立ち、平衡¹⁰⁾の關係をなして、不景氣時代と好景氣の時代とが交互にやつて來、而もその經濟分野は國際の關係にあるのである。斯くの如き時代に於いて國立交換銀行を打建んとするといふことは、全くブルジョアの幻想であり、それは疑もなく空想社會主義的であると、マルクスは非難したのである¹⁰⁾。

又吾々は第二の非難を、アントン・メンガーに聽くことが出来る。彼はブルードンがその銀行をして交換切手を發行せしめ、それをば無利子にて信用貸附となし、それによつてその不勞所得の搾取を廢除せんとしたる企圖¹²⁾に、多大の疑惑を抱くのであつた。何故ならば若しブルードンの考ふるが如く、不勞所得を廢除せんとするならば、そこに莫大なる交換切手を

發行するの必要があり、そして銀行をしてそれを勝手に増發せしめねばならない¹³⁾。然るに民衆銀行の定款によれば¹⁴⁾、その信用貨附を受くる所のものは、それを支拂得る能力を有する者、即ち有産者階級に屬してゐる者でなければならぬ。又それは原則として無利子であるけれども、當分は二分の利子を取り、遂には單なる手数料として二厘五毛を差引くのである。それ故にこの交換切手は非常に局限されたる流通圏内を出づることが不可能であり、而もその無償の信用によつて、支拂能力ありと考へられる有産者階級は、益々その經濟的優越を高め、その不勞所得を却つて大ならしめて來るのである。若し又銀行がその最初の希望を飽迄も實現せんが爲に、巨額の交換切手を發行する時には、その切手は際限なき價值の下落を來さねばならない。それ故に畢竟するに彼ブルードンは彼が斷々乎として論破せんとした所の共產主義的空想の代りに、粗雑にして到底實行なし難き私經濟的空想を提唱したものである、とメンガーは論定してゐるのであつた。

シュタインも亦メンガーと相似たる非難をブルードンに投げかけて、¹⁵⁾ かゝる物品貨幣は、

莫大なる資本を以つて計畫實行したるオーウエンの場合に於いてすら、明に失敗の歴史を残してゐるのである、然るにも拘らずブルードンは僅に五萬法——それは五百萬法の誤解である——の小資本を以つて、而も任意に多額の交換切手を發行するならば、それは遂に反古紙同様に價值なきものとならねばならない、とブルードンの大資本に對する色盲を非難するのである。

次に吾々は第三の非難として、前章に於いてオーウエンの勞働紙幣に就いて述べし所を、繰返さねばならない¹⁶⁾。そしてそれは原料品と勞働との價值の換算に於いて、矢張り在來の貨幣價值を以つて、その尺度とすることであり、その換算に際して評價の誤りを、二重になす危険を有してゐることである。だから又この問題は、尙未解決のまゝに、後人に殘されてゐるものでなければならぬ。

註 (1) Proudhon, Solution du problème social, P. 259.

(2) Proudhon, *ibid.*, P. 263; シュタインは五萬法と述べてゐるのであるが、それは五百萬法の誤

りであり、而もシキキンはその資本金の少額であることを攻撃してゐるのである。Stein, Die Soziale Frage, S. 281—2.

- (3) Proudhon, *ibid.*, PP. 270, シキキンを二分の一とせんとするも、それは四分の一の差違ひなり。Stein, *ibid.*, S. 281.
- (4) 拙稿「勞農露西亞に適用せられたる共產主義」(『倫理講演集』第三百七輯二六頁)。
- (5) Laski, Karl Marx, P. 12.
- (6) Marx, (*Misère de la philophie*) Das Elend der Philosophie, Vorwort.
- (7) Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation (1821); Hopkins, Political Economy; William Thompson, An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most Conducive to Human Happiness (1827); T. R. Edmonds, Practical, Moral, and Political Economy (1828); J. F. Bray, Labour's Wrongs and Labour's Remedy, or The Age of Might and the Age of Right (1839).

- (8) Bray *ibid.*, PP. 33, 55, 76.
- (9) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. 47, 70—3; John Gray 以上は『イデオロギイ』 111—114頁を參照。
- (10) Loria, Karl Marx, PP. 54—8.
- (11) Anton Menger, Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung (1886), Ch. 7. §. 2, 3.
- (12) Proudhon, *Oeuvres complètes*, Val. 7, P. 120.
- (13) Proudhon, *ibid.*, Val. 7, P. 120.
- (14) Proudhon, Solution du problème social, PP. 269—270.
- (15) Stein, Die Sozial' Frage, S. 282.
- () 拙稿 五巻一七頁—一七〇頁。

第三章 グリーネの相互銀行論

1

私は、ブルードンの思想が、後世に及したる甚大なる影響に就いて述べた。そしてそれはマルクスの痛烈なる罵倒にも拘らず、「ブルードンは遂に模範的なる小ブルジョアとなつた」と言はれたにも拘らず、猶閑却し得ざる幾多のものをば残してゐるのである。今彼の研究者であるブグレーをして、それを言はしむるならば、「人々はブルードンをば再び読み始めて来た、今日最も多く古本屋で求められてゐるものは、彼の著書であり、「革命に於ける正義と教會に於ける正義」「經濟的撞着」「戦争と平和」及び「労働者階級の政治的能力」といふが如き著書³⁾は、洵に大衆講演の好題目であり、法律的或は哲學的論題であり、又政治的論文の題目である。そして學究的人々が、ブルードンの教義を信心深く恢復せんとする内に、實際的

運動家は、急性的にそれを待ち得ずしてその教義を利用し、その教義をして集團の合言葉となし、而も群集は今日その精神をば肉體化せんと焦慮してゐる」のである。

けれども私は今茲にその影響に就いて、一々語るの餘白と直接の必要とを見出し得ない、私は、唯ブルードン説の貨幣論を後繼する者として、米國のウリヤム・ビー・グリーネを擧げらるに止める。彼の「相互銀行論」(Mutual Banking)は、一八四九年新聞紙に連載されたものであり、後それをばバンフレットとして出版したのであつた。彼はその中にブルードンよりの影響に就いては語つてゐない、然しブルードンの「交換銀行論」が書き出されたのは、一八四八年の四月二十五日であり、それが出版されたのは同年の十二月であつた。又ブルードンの「民衆銀行論」は、一八四九年の一月中に書かれたものであり、當時の巴里は改造思想の世界的中心であり、彼グリーネは又その改造思想家であり、労働運動者であり、後巴里に行き、南北戦争によつて召喚されるまで、止つてゐた程の執着を巴里に持つて居り、ブルードンの交換銀行論は、その原理を相互主義に求めてゐたこと等より推察して、グリーネの

「相互銀行論」は、又必ずブルードンの「交換銀行論」、殊にその「交換切手の一般化」に負ふ所の多大なるものがあると考へねばならない。よし又グリーンネが、ブルードンと全く別個にその説をなした者であるとしても、彼をブルードンの亞流として考究するの至當さを、私はヘンリー・コーエンの如く、その學説の分類上より考へねばならない。

註 (1) Marx, La misere de la philosophie, P. 258.

(2) Bouglé, La sociologie de Proudhon, P. V-VI.

(3) La justice dans la révolution et dans l'église, (1858); Système des contradictions économiques, (1846); La guerre et la paix, (1861); La capacité politique des classes ouvrières, (1895).

(4) William B. Greene (1797—1877) は、十九世紀の中葉、マサチューセツの理想主義者として有名であり、その妻の美人であると共に、彼も亦美丈夫であることによつて、その風評を高めてゐた。彼は一八五三年マサチューセツ憲法議會の一議員であり、後彼はそれをば辭して巴里に行き、南北戦争によつて召喚されるまで止つてゐた。歸つて彼は第一マサチューセツ重砲隊の

大佐となり、屢々戦功をたてワシントン市を防禦したのであつた。戦後彼は労働運動に身を投じて、ニュー・エンランド労働改革聯盟の會長となり、又國際労働者協會の爲にも活動した。

(5) Proudhon, Banque d'échange, Ch. VI.

(6) Greene, Mutual Banking, P. 21.

(7) Greene, Mutual Banking, (Introductory note, by Henry Cohen), PP. 1—2.

2

グリーンネ、彼は先づその價值論から始める。彼は價值を二つに分類して、法定價值 (legal value) と實際價值 (actual value) とになし、今若し兌換銀行券が焼失するならば、それは何等實際價值の焼失ではない。唯それは數くちやなる小紙片の價值だけを焼失したに過ぎない。そしてその銀行券の所有者はそれを失ふことによつて、それを正貨に兌換し、或はその金額に相當する物資を請求する所の權利、即ち他人の手の中にある財産に對する合法的請求

權、即ち法定價值を失ふのである。然し銀行はそれによつて反對に、同價值の正貨を儲け得ることになる、それ故に如何に法定價值をば毀損しても、それは大したことではない、そしてそれによつて、假令それは個人に對して或は大なる不正となることがあつたとしても、實際價值の一弗をも破毀し得ない。然るに若し吾々が一片の銀貨を毀損するならば、吾々はそれだけ社會に實際價值の損失を投影する者であり、船舶が貨物に乗せて海中に没入するならば、又それだけの實際價值を失ふのである。今——即ち一八四九年の當時——英國の國債は八十億を越えてゐる、けれどもそれは法定價值の負債であり、それを辨償するの義務を抹殺するならば、その義務をば負されてゐる英國の納税者共は、それと同じ額の價值をば利得することが出来る。然るに今英國が八十億の實際價值を失ふならば、英國は一變してアラビヤの砂漠とならねばならぬ、と考へたのであつた¹⁾。

この價值論よりグリーンネは、進んで次の如く考へた。今、この法定價值だけを有する人々がその家族と共に、——恰もそれは他の生産都市から區別せられて、ワシントン市が政治都

市として存在するが如く、——實際價值を生産してゐる人々から、全く隔離せられ資本都市即ち寄生都市 (Parasitic City) として生活したと假定するならば、例へば六萬圓づゝの法定價值を資本として有する五千人の戸主が、他の四人の家族と共に生活してゐたとするならば、その總資本金は三億萬圓となり、その家族の總人員は二萬五千人となるのである。そして又この各家庭が一人づゝの婢僕を使役し、日用品を販賣する、例へば靴屋、パン屋、肉屋の類が五千戸それに附隨するものと考へるならば、各戸五口と見て、その總人口は又二萬五千人となり、斯くしてその寄生都市は全人口に於いて五萬五千人となるのである。今又この三億萬圓の投資に對して、年六分の利子が、他の生産都市よりこの資本都市に支拂はれるならば、それは一千八百萬圓となり、各戸の所得高は三千六百圓となるのである。この三千六百圓の中、各戸が一千八百圓にてその生計を立て、殘額一千八百圓をその子女の爲に年々貯蓄するならば、その子女は成長して後矢張り、六萬圓の資本家となり得るのである。斯く考察して來るならば、この資本都市は全く働くことなくして、その生存を續けてゐる無爲無能

の寄生都市であると言はねばならない。³⁹然しながらこの種の都市は、何れの社會に於いても別個の都市そのものとしては、事實上存在してゐない、けれどもそれは各都市の内に散在してゐる。何故に社會は斯くの如き無爲無能の寄生蟲を、その内に培養して行かねばならぬのか？そこにグリーンネは、その疑問を更に深めて來たのであつた。

彼はこゝに通貨の本質論に立歸つて、その原因を考究せねばならなくなつた。彼は金及び銀が、價值流通の媒介物となるの理由をあげて、(1)それが媒介物として慣行されてゐること、(2)それはその内に、即ち内在的に實際價值を有してゐること、(3)それは他の商品の如く、時によつてその價值を甚しく變動せざること、(4)それは容易に分割し得ると共に、その分割によつて價值を變ぜざること、等の四項となし、そして若し吾々が何等かの物品を正貨で賣るならば、それは正貨を買ふことであり、反對に何かの物品を正貨で買ふならば、それは正貨を賣ることである⁴⁰、その媒介機能を明確にし、通貨の本質は要するにその媒介機能にありと斷するのである。

然るに今政府が金銀を以つて、負債支拂の法定物貨とするならば、そのことによつて金銀の効用は、一層甚しく高められて來るのである。而も交換價值はその物貨の効用により、又それを獲得するの困難に比例して生ずるものであるが故に、金銀が法定の支拂要具とされるならば、即ちそれによつて一層甚しくその絶對的効用を超えて、相對的効用を高め、そこに新しき効用を附隨せしめて來るのである。⁴¹この新しき効用は、人爲的であり不自然的であるにも拘らず、絶對的効用を超過すればする程、人々をして争ふて金銀を、獨占せしむる所の動機となり、人々は他の何れの物資よりも、先づ第一に金銀をば獨占せんとするのである。それ故に又如何に他の貨物を多く有する人々と雖も、その金銀をば獨占する人々の許容なくしては、その負債を返済することが出來ないのである、こゝに先づ甚しき不自然が孕まれてゐると考へねばならない。

又この新しき効用は新しき價值を生じ、この價值によつて、それは賣買し得べき商品となり、斯くして金銀は交換の媒介物として、賣買し得る商品となるのである。而もこの價值は

それを評價すべき自然の尺度を有してゐない、何故ならばそれは自然的價值ではなく社會的價值であり、そして又この新しき社會的價值は、他に知られてゐる價值を以つて、評價し評量することが出来ないからである。斯くして金銀は貨幣となることによつて、それに固有なる相對的地位から一躍して、商品の高級なる種類となり、商品の絶對的王となり、半は神となつて來た、ここに貨幣の社會的政治的罪惡が潜んでゐるのである。始め人々が交換の媒介物を造出したといふことは、この新しい評價し得ない而も賣買し得る商品を造出することを目的としたものではなくつて、單にそれはその交換を容易にするが爲に外ならなかつた。然るにそれは商品の絶對的王となることにより、それを所有する人々によつて、交換關係が支配せられ、彼等はその關係に向つて、^{ペト}の權を有して來たのであつた。今この否認の權を撤廢せしめやうとするならば、彼等は必ずそこに利子を要求し、或は高利を要求する。そしてこの高利は現在流通の一大支障であり、且つそれは高利の世界を實現して、その最初の目的を裏切り、交換の支障をなすことによつて、即ち何物をも生産することなく寧ろ實際はそ

の妨害をなすことによつて、他の生産者の財布からその金を搾り取り、金から金を作出すの妖術に組して來たのである。それ故に金銀は流通の完全なる媒介物ではない、それは總ての商品の交換を容易にしないのみならず、却つてそれを妨害し、高利の制度を造出して來たのであつた。

尙それのみではない、それが正貨であつても亦は兌換紙幣であつても貨幣は、二重の意味に於いて商品であり、従つて二重の價值を有してゐるのである。そしてそのことから結果されてゐる貨幣の缺點をば、彼グリーンネは次の如く指摘する。貨幣には二重の價值がある、そしてその一つは他の商品と交換される物貨としての價值であり、他の一つは、それを貸與することによつて、それから利子を徴收することが出来るといふ價值である。それ故に前者の價值は貴金屬の需要供給によつて決定され、後者の價值は借用者の必要程度によつて決定されるのである。然るに貴金屬の需要供給と借用者の必要程度とは、共に絶えざる變動を示すものであつて、この變動に従つて又その貨幣の價值は變動せざるを得ない。例へば今一つの

社會に於いて、流通してゐる貨幣の總量を α とし、それによつて買はるべき物貨を β とするならば、 β の價值は α のそれに匹敵するであらう、然るに突然その通貨の總量を β 倍加して $\alpha\beta$ とするならば、その通貨の價值は、又突然その二分の一に下落せねばならない。よし金銀は、左程にまで急激なる増加を來すことが出來ないとしても、兌換紙幣は急激なる増加を來し得るのであつて、それが爲に價值の標準は常に不安定となり、従つて財界を混亂し、幾多の投機師をしてその隙に乗せしめ得るのである。

又この兌換紙幣による通貨の膨脹は、既に所有されてゐる貨幣殊に紙幣の價值を暴落せしめ、それを所有する者に不當の損失をかけ、その増發及び縮少が人爲的である所から、それに關係してゐる人々によつて、その通貨は統制せられ、彼等の偏愛と私利とは、又その統制に再び統制を加へ、その資本の貸附に公平を缺き、政商的賭博の弊を助長して來るのである。又この通貨膨脹は所謂空景氣を煽り、企業熱を高め、到底割に合ざる事業にまでもその資金を投下せしめ、次に來る可き恐慌時代の爲に深刻なる用意をなすに役立ち、貨幣の價值

をば世界共通のそれよりも低下することによつて、輸入超過となり、外國製品によつて國內の市場は壓倒され、生産過剰の災厄を蒙らねばならない。斯くして外債を増加し、國民はその貨幣の眞の價值に對して全く盲目となり、遂には國家をあけて外國の質草とならねばならぬ羽目に陥るのである。これ吾々が兌換紙幣を咒はねばならぬ理由である、と彼グリーンは考へたのであつた。

註 (1) Greene, Mutual Banking, PP. 3-4.

(2) Greene, *ibid.*, PP. 4-6.

(3) Greene, *ibid.*, P. 6.

(4) Greene, *ibid.*, P. 7.

(5) Greene, *ibid.*, P. 8.

(6) Greene, *ibid.*, P. 10.

(7) 歐洲大戰後の通貨膨脹 (Inflation) の時代はその好例である。G. D. H. Cole, A Short Hist.

ory of the British Working Class Movement, Vol. III. Pp. 145-7. 拙稿「金に對する一考察」(經濟及商業、第三卷第七號、四七頁)。

(8) 戦後のロシヤは紙幣亂發とその切換とによつて、一九一四年の二十一億留は一九二一年には一留となり、一九二五年の七月に於ける法の最低は、一磅に對して二百四十六法であり、大戦前一法は吾が三十八錢に相當してゐたにも拘らず、僅に約四錢となり、當時又洪牙利の一クローネは、吾が百分の二厘六毛となつてゐたのであつた。それ故にこの時代に於いては、人々は貨幣が手に入るならば直に何かの物品を、要不要に拘らず、購入せねばならない。何故ならば物品は實際價值を有してゐて、法定價值即ち貨幣の暴落につれて騰貴するからである。だから人々は競ふて物品を購入しやうとする、それ故に物價は天井知らずに昇り、貨幣價值は反對に底知らずに暴落して來るのである。或は又物品の代りに外國の安定せる貨幣、例へば英國の磅、或は米國の弗の如きものが買はれて來るのである。

(9) Greene, *ibid.*, Pp. 19-8

3

却説、グリーンネはこの貨幣の缺陷及び罪惡をば、如何にして匡濟しやうとしたか、彼はそこに「相互銀行」(Mutual Bank)を設立して、それより「相互紙幣」(Mutual Money)を發行せしめ、その「相互貨幣」によつて、在來の貨幣に伴ふ罪惡を救濟しやうと考へたのであつた。然らばその「相互銀行」とは如何なる組織であり、その「相互貨幣」とは如何なる性質と機能とを有してゐるか？ 吾々は又グリーンネに就いてそれを聞かねばならない。

グリーンネは確にその「相互銀行論」の着想に於いて、ウイリヤム・ベークの「貨幣及び銀行論」と、ブルードンの「交換銀行及び國民銀行論」との二者に負ふてゐるのである。そして前者即ちベークからは「信用勘定の一般化」を、後者即ちブルードンからは「交換切手(Les bons d'échange)の一般化」を、夫々暗示されて來たものであつた。先づベークの「信用勘定の一般化」とは、今甲がA銀行よりその預金を引出して乙に支拂ひ、乙はそれをばB